

【完結】 男性向け同人エ  
ロゲの女主人公だけは  
勘弁してください！  
何でもしますから！！

どうだか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※こんなタイトルですが、作者は男性向けエロゲが好きでこの小説を書いています。

男性向けエロゲみたいなことが起きる世界で、死ぬよりも酷い目に遭わないために、道徳観や倫理観をゆるふわにして何でもする系女子（前世の記憶持ち転生者）がジタバタするお話。

なお、ジタバタしているうちに、男性向けエロゲに出てくるサブキャラ（男）みたいな面々と出会ってくんずほぐれつする模様。

※男性向けエロゲがテーマですが直接的な性描写はありません。書けないので。

※ムーンライトで連載している作品を数話ごとにまとめて加筆修正し、掲載しています。なろうにR15『移植版』を掲載しています。

※3／5追記「第二章 第二十五話 性転換がわりと身近な世界」以降、性転換（TS）ありの精神的BL描写があります。

# 目次

## プロローグ

それなんてエロゲ？ | 1

第一章 エロゲの世界はモブ女子に優し

## い編

第一話 エロゲの世界ではモブ顔

4

第二話 R指定はエロだけじゃない

7

第三話 ハーレムの社会的恩恵

10

第四話 ハーレムの個人的恩恵

13

第二章 できることは何でもしますから

## !!編

第一話 男性向け同人エロゲの女主人

公とは | 16

第二話 “女主人公”対策 〓敗北エ

ロと淫乱度システム〓 | 21

第三話 主人公補正(微) | 24

第四話 くたびれたおじさんが強キヤ

ラはあるある | 27

第五話 腹上死ってレベルじゃない

31

回想 音声再生① おじさんと『 | 35

第六話 飲み込んで、おじさんの○○

第十二話 その発想、庶民には無かつ

た

66

挿話① コウモリの恩返し

第十三話 この世界のお家騒動あるあ

44

69

第七話 対策の抜本的な見直し

る

69

48

第十四話 吐くとラクになることもあ

第八話 おじいちゃんが強キャラなの

る

73

は常識

挿話② ようやく目が覚めた朝

51

第九話 安全かつ後腐れなく処女でな

77

くなる三つの方法

第十五話 性転換ヒロインとモブ化現

55

第十話 脳裏をよぎる、これまでの

象の関係性

82

日々

第十六話 貧すれば鈍する

58

第十一話 うれしくない呼び出し

第十七話 夏に盛り上がるものと言え

63

ば

92

	第十八話	七不思議の八番目	—	95
	第十九話	頭の中がおっぱいでいっぱい	—	99
	第二十話	突撃！ 隣の	—	106
	第二十一話	目と目が合わない	—	113
	第二十二話	そのための私	—	119
	第二十三話	ミッション ポツシブル	—	124
	挿話③	正しさばかりでは生きられない	—	129
135	第二十四話	なにごともない朝	—	165
	挿話④	君が好き 前編	—	172
	第二十五話	性転換がわりと身近な世	—	141
	第二十六話	どこことなく似ている	—	144
	第二十七話	カレシとカノジョ	—	149
	第二十八話	パーフェクトカレシサマ	—	153
	(?)	—	—	158
	第二十九話	エロゲの世界のカレシと	—	158
	カノジョ	—	—	158
	第三十話	恋をしている女の子は	—	158

	挿話④	君が好き	後編	179
	第三十一話	選ばれなかった二人		186
	第三十二話	繁華街へ逆ナンに行こう		190
	『選択肢』			194
	第三十三話	ドキドキ♡逆ナン大作戦		199
	第三十四話	エロゲの世界のフアツ		204
	シヨン			204
	第三十五話	エロゲの世界の制服		210
“女主人公”編				210
	『選択肢：初めてのことだ』			213
	第三十六話	バッドエンドのその後		219
	第三十七話	ループの真相		224
	第三十八話	エロゲにおける別ルート		227
	のヒロインの役割			227
	エロゲの世界は女主人公に厳しい			233
	“女主人公”編	個別ルート		240
	個別ルート	(プロット) 選択肢		240
	一人称『僕』おじさんルート(プロット)			244

			取り巻きハーレム先輩ルート（プロット）	249
			お孫さん師範代ルート（プロット）	256
			TS予定イケメンくん／TS“ヒロイン”ちゃんルート（プロット）	262
			エリザベティナ（ベティ）ルート（プロット）	271
			逆ハーレムルート（プロット）	276
			“ヒロイン”編	
281			『選択肢：もう何回目になるだろう』	
			第三十六話 デジャヴを重ねる	285
			第三十七話 “前世”の記憶	290
			第三十八話 ループを重ねる	296
			第三十九話 無限ループからの脱出	R
			TA	302
			エロゲの世界はヒロインに厳しい	315
			番外編 名前の由来 & あとがき	322



## プロローグ

### それなんてエロゲ？

——タイトル画面前の注意書きに曰く、

この作品に登場する人物や団体・地名・そのほか全てはフィクションです。

また、この作品に登場する人物は、全員18歳以上です。



前世、(ピーツ)歳の社会人女性の記憶転生する前は、泣きゲーから燃えゲー、萌えゲー、抜きゲーなどなど幅広くエロゲを嗜む成人女性だった。ただし、ゲームが下手なのでゲーム性の高いエロゲは除く。なので、(見る分には)甘々いやラブからバカエロ電波、NTR陵辱催眠、肉体改造猟奇まで、どんなエロに対してでも寛容。自分が死んだ後、部屋に残されているであろうキラキラしたシールがついた空き箱の山については、考えたくないのと考えていない。ごめんなさいとは思っているを引き継いで転生したけれど、剣と魔法の世界じゃなかった。普通に日本だった。しかも現代。ちよつぴり残

念。けど、お父さんとお母さんの顔面偏差値が高かったのでオツケーです。

約束された輝かしい顔面に胸を躍らせながら、両親の愛情を一身に受け、楽しくて幸せな赤ちゃんプレイを満喫した食事から排泄まで面倒みてもらう赤ちゃんプレイくつつそ楽しい。男女問わずだいたいこのキャラにバブみを感じてオギャツていた女に、赤ちゃんプレイの適性が無いわけないんだよなあ。の、だけれども。なんだかこう、モヤモヤとした違和感が拭えない。

違和感がカタチになったのは、小学校の社会の授業。パラパラと教科書を開くと、前世からなじみ深い歴史上の偉人が並んでいた。

みんながみんな見目麗しい女性になっていた。

聖徳太子も、源義経も、織田信長も、坂本龍馬も、伊藤博文も、女性この世界では、(前世の感覚で)男の子の名前を女の子につけるのが普通。たとえば、太郎は男女ともに使える名前で、花子は女つぽい名前。歴史上の人物の名前を覚えなおさなくて済んだのは助かるけど、違和感がすごい。最近では、花子を男の子に使ってもいいのでは? という意見も出てきた。

日本だけでなく、世界の偉人もだいたい女性。

ちらほらと男性も載っているけれど、前世では聞いたことのない名前だ。ただ、同時代の偉人たちと深い関係にあつたらしく、歴史を左右した立役者として大きく取り上げ

られている。

目を閉じて、深呼吸をする。

——それなんてエロゲ？

そう思ったのをキツカケに、生まれてから今まで見聞きしていた違和感が腑に落ちた。

この世界、めちやくちや男性向けエロゲしてる。

# 第一章 エロゲの世界はモブ女子に優しい編

## 第一話 エロゲの世界ではモブ顔

満員電車でドアの隣というベストポジションを確保し、ホッと息を吐く。ふと見ると、電車の窓ガラスに、真新しいブレザーを着た美少女が映っている。くるくると体の角度を変えて身だしなみを確認。うむ、今日も私は最高に可愛い。

自分で言うのもなんだけど、前世ならば美少女アイドルとして脚光を浴びたに違いな  
い可愛さだ。ただまあ、このエロゲみたいなことが起きる世界では、私の顔はいたって  
普通なモブ顔。だって顔面偏差値の平均がめっちゃくちゃ高いんだもん。

……美男美女ではない顔を意図的に描くよりも、整った顔の方が描きやす……げふん  
げふん。

さて、顔面偏差値の平均が高いのなら、どうして自分がモブ顔だと分かったのか。答  
えは簡単。見れば分かる。

電車がゆっくりと止まり、目の前のドアが開いた。ワツと通勤通学客が乗って——く  
ることはなかった。すさまじいオーラが風となって顔面へ吹きつける。風は、待機列の  
先頭に立っていた少女から吹いていた。

少女は、ポンポンと肩を怒らせながら足を踏み出した。彼女のツーサイドアップがふんわりとなびく。

「もお！ このわたくしが電車で移動する羽目になるなんて!! あなたのせいよ！」

小さな唇をつきだし、ムツと頬をふくらませる。なんて可憐な表情。思わずほうと息を吐いた。

周囲の乗客は一人残らず彼女に見とれている。けれど、その乗客の顔が分からない。彼らには、目鼻口がない。髪型と服装でしか区別がつかない。

チラツと窓ガラスで自分の顔も確認する。ガラスに映る私にも顔がない。というか、自分の顔が認識できない。

“モブ化現象”と、私は勝手に呼んでいる。現実とは思えないような美女や美少女、いわゆる“ヒロイン”に遭遇すると、そのオーラに圧倒され、普通の人は自分や周りの人の顔を認識できなくなるのだ。とまあ、自分がモブかどうかは、こんな感じで見れば分かる。

この現象に影響されないのは、“ヒロイン”と“サブキャラ”、そして――

「そんなに怒るなよ」

“主人公”だ。

この“主人公”くんは、顔が分かるタイプだな。ちなみに、“主人公”の顔は見えたり見えなかつたりで、顔の系統もいろいろ。共通点は、一人以上の“ヒロイン”と関わりがあること、かな。

“主人公”くんと“ヒロイン”ちゃんの二人は、やいのやいのと楽しそうにおしゃべり“ヒロイン”ちゃんがキャンキャンと突つかかり、“主人公”くんがのらりくらりとあしらっていて、端から見るとカップルがイチヤイチャしてるように見える。している。制服からして同じ学校のセンパイっぽい。

……彼らを取り巻く環境が、普通の学園物エロゲでありますように。

なお、“ヒロイン”ちゃんから離れるまで、周りの人の顔は消えたままだ。

こんな風に、エロゲみたいなことが起きる世界で背景にいる顔なしモブ女子として生きていく。けれど、自分がモブであることを残念に思ったことはない。

## 第二話 R指定はエロだけじゃない

「おい、オッサン」

車窓を流れる景色をボンヤリ見ていると、「主人公」くんの怖い声が聞こえた。二人の方を見ると、「主人公」くんが太ったおじさんの腕を捻り上げていた。素人目に見ても、そういうのに慣れてる感じが伝わってくる。

「やめとけ」

「主人公」くんから放たれる重圧に、太ったおじさんは言葉も出ない。状況から察するに、人混みに紛れて「ヒロイン」ちゃんのお尻なり胸なりを触ろうとしたのだろう。

「主人公」くんは、おじさんのパツパツスーツから名刺をサツとスリ取ると「次はない」と脅しつけて解放した。「ヒロイン」ちゃんが「手ぬるい！」と怒っているけれど、未遂だからなあ。前世でも、痴漢犯罪は難しい問題なのだけど、今世ではそれに加えて「レイプかプレイか」問題があつたりするらしい。

「つたく、学校でも電車でも、面倒なやつに絡まれやがつて」

「わたくしのせいではありません！ それに、あのいけ好かない男のことを思い出させないでください。気持ちが悪い！」

はい、私が、モブ顔でよかったとしみじみ思っている理由がこれ。

レイティングによって規制されるのは、直接的な性描写と——過度な暴力描写だ。この世界、犯罪率がめたくそ高い。軽犯罪なんてしよっちゅうで、重要犯罪は内容が斜め上にヤバすぎる。

ニユースで見た限り、科学では解明できないような不可解な事件がちよいちょい起きてるっぽいので、人智を超えた何があるのだろう。だってエロゲみたいなことが起きる世界だし。それがSFなのか、ホラーなのか、ファンタジーなのかは分からない。ぜんぶ混ぜてる可能性もある。

ただ、犯罪のほとんどは“主人公”たちや“ヒロイン”たちに集中してくれているので、モブは比較的安全だったりする。

……まあ、テロ事件や連続殺人で十把一絡げに“グロスチル”される可能性もあるけど。それも、“主人公”や“ヒロイン”から遠く離れていれば、確率はグツと低くなる。前世の日本を知っていると、かなりの治安の悪さ。けど、前世でいう治安の悪い国を旅行するのと同じくらいの対策で安全に過ごせる夜間に出歩かない。現金は小分けにしてしまう。鞆を体から離さない。なるべくリュックを使わない。防犯ブザーと手鏡、ライトを持ち歩く。歩きスマホをしない。肌の露出を極力減らす。オシャレをしない。戸締りをしっかりする。ペランダに洗濯ものを干さない。などなど。モブならば、そ



のくらいで済む。  
“主人公”  
“や”  
“ヒロイン”  
“？”  
……お察してください。

### 第三話 ハーレムの社会的恩恵

センパイたちからなるべく距離を取りながら、テクテクと通学路を歩く。遠目に見える“主人公”くんは、三人の“ヒロイン”ちゃんたちに囲まれつつ、騒がしく登校している。いつの間にか増えてた。

“主人公”一人に複数の“ヒロイン”——俗に言う、ハーレム。街を歩いていけばチラホラ見かける光景。なので誰も気にしていない。

この世界の日本、基本的には一夫一妻制なんだけど、歴史的にも法的にもハーレムが認められているんだよね。

まあ、歴史上の人物がだいたいどこかの“主人公”の“ヒロイン”なんだから、歴史的にハーレムが認められてるのはさもありなん。

現代でハーレムを後押ししているのは、世界的な出生率の低さ。で、一夫一妻制の夫婦より一夫多妻制の夫婦の方が出生率が高いという統計があるもんだから、そりゃ法的に認めざるを得ない。

「……不純異性交遊は校則違反だ!!」

校門の前で“主人公”くんたちが揉めている。『風紀委員長』の腕章をつけた美少女

が、仁王立ちしていた。周囲のざわめきに耳を傾けると、誠実さと厳格さで有名な文武両道の美人風紀委員長だと分かった。あの人も“ヒロイン”なのか。

「ふふ、朝からにぎやかですね」

“主人公”くんたちを取り囲む人混みが二つに割れ、おっとりとした見た目の美少女が輪の中へ進み出た。

私でも知ってる。この学園の名物生徒会長さんだ。見た目と裏腹にバイタリテイに溢れており、ことあるごとにイベントやお祭りをするのが大好きなんだそう。もちろん、会長さんも“ヒロイン”である。

この二人みために、“ヒロイン”は突出した才能、権力、美貌を持っていることが多い。若いころから活躍している“ヒロイン”が行きつく先は、国の、世界のトップだ。

テレビに出るような有名人——社長、芸能人、学者、弁護士、アスリートなど——は、ほとんどが“ヒロイン”。歴代の総理大臣も大統領も国家元首も、だいたい“ヒロイン”で、どの国の政治家も半分以上が“ヒロイン”。

つまり、この世界の舵取りをしているのは“ヒロイン”——女性だ。前世よりも女性<sup>ヒロイン</sup>が社会的に進出している……というか、女性<sup>ヒロイン</sup>が社会の中心にいる。男性向けエロゲっぽい世界なのに。いや、そういう世界だからこそ、か。

こうなると、女尊男卑な世界になりそうだけど、世界に羽ばたく“ヒロイン<sup>女</sup>性”たちが

“主人公”<sup>男</sup>しゆきしゆき勢なので、男尊女卑でも女尊男卑でもない世界に落ち着いてい  
る。なんて絶妙なバランス。

## 第四話 ハーレムの個人的恩恵

この男性向けエロゲっぽい世界は、“ヒロイン”のおかげで、“ヒロイン”でない女性にとっても生きやすい社会になっている——だけではない。

(……)から早口)

“ヒロイン”が“主人公”とハーレムを形成してくれるおかげで、独身男性があまりがちなのである!!

独身男性が! あまりがちなのである!!!

前世、(ピーツ)歳でひとり様だった私にも! カレシが!! しかもイケメンのカレシができるチャンスがある!!! なぜなら“主人公”は(この世界基準で)普通の男性が多いから、イケメンが余っているのだ!!! ありがとうございます!!! 本当にありがとうございます!!!

エロゲのサブキャラのイケメン(見た目も性格も素晴らしい男性)って、男が見てもカッコよくて頼もしい男、いや、“漢”が多いんですよ。男が惚れる男ってマジで最高だよ。すごい好き。たまらん。

(……)まで早口)

……まあ、“主人公”の親友ポジションの“サブキャラ”イケメンだと思っていたら、最終的に性転換して“ヒロイン”になるというアクロバティックな展開が無きにもあらずだから、そこは気をつけなきゃなのだけけど。

コホン。そんなわけで、今日も“主人公”たちと“ヒロイン”たちは、日本各地、いや世界各国で元気にハーレム展開していることだろう。

巨大人工浮島とか、隔離されてる市とか、街一つまるごと学園とか、上流階級しか通えない全寮制の学園とか、エロゲの舞台に事欠かないっほしい。“主人公”と“ヒロイン”のみなさんには、今後もがんばってハーレムしてほしいと思います。



わいわいと楽しそうにしている“主人公”くんと“ヒロイン”ちゃんたちの横を通り過ぎる。

きつと、この六人で色んなイベントをこなすのだろう。どんなストーリーになるのかは分からないけれど、そのエンディングが、六人にとって幸せなものであるよう心から祈っている。

彼ら——“主人公”と“ヒロイン”のおかげで、この男性向けエロゲみたいなのが

起きる世界はモブ女子に優しくできている。

ありがとう。

感謝の気持ちでいっぱいだ。モブ女子だから、イベントの役には立たないけれど、心からみんなを応援している。

“主人公”と“ヒロイン”の活躍の陰で、イケメンのカレシをゲットして人生を謳歌する。私は、この男性向けエロゲーみたいな世界の背景モブ女子。

——そう、思っていた。



「……海外に、出張？」

第一章 エロゲの世界はモブ女子に優しい編 完

## 第二章 できることは何でもしますから!!編

### 第一話 男性向け同人エロゲの女主人公とは

「……海外に出張?」

思わず箸が止まる。

「うん。今日、かなり上の人から直々に探りを入れられたし。順番的にも次はパパが海外の支社に行くんだろなうな〜って感じ。半年後くらいに内示が出るんじゃないかな?」

「ママの方もおんなじ。まさか、二人同時に海外出張が被るなんて」

家族三人水入らずの晩ご飯中に落とされた、特大の爆弾。お父さんもお母さんも、困った顔をしている。

「二年生の間は一人暮らしになっちゃうんだけど……大丈夫?」

大丈夫じゃない。ぜんっぜん大丈夫じゃない。でも、社会人経験者である私は、この海外出張が二人のキャリアにとつてめっちゃくちゃ重要であることが分かる。分かってしまう。

「うん、だいじょうぶ! 任せてよ!!」

ニッコリと笑って見せると、お父さんとお母さんはホツとした顔で微笑んだ。



目を背けていた事実がある。

——前世の記憶があるとか、“主人公”か“ヒロイン”なんじゃね？

いやでも、前世の記憶があるだけだし。他に特殊なものないし。両親共働きの一般家庭で生まれ育った一般人だし。そう自分に言い聞かせて生きてきた。

でも、これはダメだ。

両親が海外出張で一人暮らしはダメだ！ しかも二年生の時に！！ おいしいポジシオンだよね二年生って！！ 先輩も後輩もいるからね！！ そういう問題じゃねえんだよなあ!!!

声にならない悲鳴をあげながら、勢いよくベッドに転がる。スプリングがギシツと音を立てた。両親の部屋は廊下を挟んで斜め向かいにあるので、ちよつと騒がしくしてもバレないだろう。

——二年生になったら何かあるんですね。分かります。

私は、“ヒロイン”ではない。モブ化現象を起こせない。突出した才能も権力も美貌も持っていない。“主人公”になりそうな男の幼馴染もない。

で、『前世の記憶』『両親が海外出張で一人暮らし』『二年生』というワードから考えると、どう考えても『主人公』になるだろう。性別が女なので、『女主人公』、かあ。

“女主人公”かあ~~~~~！　ロクなことにならないの確定じゃないですか!!　やだ——!!!



女主人公は、男性向け同人エロゲに多い、ということを知っている。

もちろん、男性向け商業エロゲにも、女主人公のゲームがあるとさえある。女性同士の恋愛を描いた百合ゲーやごくごく一部のエロゲーに、女主人公が存在する。

ただまあ、本数が比べ物にならない。

ということは、私も男性向け同人エロゲの“女主人公”な展開にぶち当たる可能性がめちやくちや高い。

んだけど。実は、女主人公の同人エロゲにそんな詳しくない。正確に言うと、ゲームのあるエロゲがあまりにも苦手&ヘタ。なので、ロールプレイングゲームやアクションゲームが多い女主人公のエロゲは敬遠してた。

幸いなことに、フォロワーさんが女主人公好きでSNSに情報が流れてきてたので、

ちよつとだけ知っている。

基本的なゲーム内容は、女主人公がエッチな目に遭って快樂に墮ちていく姿を楽しむって感じらしい。選択肢や戦闘敗北などでエロスチルを見れるそう。あと、エッチなパラメータがあつたり、エッチなスキルがあつたり、立ち絵の差分がたくさんあつたりする。

ストーリーは、敵と戦つたり、お金に困つてたり、閉じ込められたり、巻き込まれたり。で、エッチなことばっかりしてると墮ちていく、と。

どうやって楽しむかは人それぞれなので割愛女主人公に感情移入する人もいるし、竿役に感情移入する人もいる。第三者視点で物語を読むように楽しんでいる人もいれば、誰かの人生をクリック一つで左右することを楽しんでいる人もいる。ピッチブレイや処女ブレイなど、各周回でプレイスタイルを決めて遊ぶ人もいる。楽しく遊んで気持ちよく又ければヨシ！。

……正直、自分の身に何が起こるかは、想像がつきすぎて想像がつかない。変身ヒロインになるかもしれない。異能力に目覚めるかもしれない。異世界に召喚されて勇者になるかもしれない。学校や館に閉じ込められて化け物に追いかかわられるかもしれない。

それに加えて、エロい目に遭う。

自分がプレイしてきたエロゲの記憶が恨めしい。最悪の展開が容易に想像できてしまう。

ぶっちゃけ、肉体を陵辱されるのはまだマシだ。相手が汚つさんでもモンスターでも、殺されないのであれば、たぶん耐えられる。犯されてるけど自分は人間のカタチを保ってるもん。

でも、極端な膨■やく■、ニ■■■??■、眼■、齒■?■、子■、ダ■、  
 ■単語だけでR指定になりそうなので伏せました。これらは主人公が想像する『最悪の展開』であって、本作中でこういう展開はありません。猟奇に足を突っ込んだ陵辱を魅力的に書ける腕は持ってないです。そういう肉体にくわえて尊厳を陵辱される展開はマジで勘弁してほしい!! むり!!!

いやね、まあ、プレイヤーとして、そういうハードでアブノーマルな陵辱も嗜んでましたけども!!! ゲームだからいいのであって、自分がされたいとも思わないんですよねえ!!!

……はあ、最悪の展開を想像しすぎて憂鬱になってきた。気分転換に、この一年で何をするのか、何ができるのか、もっと建設的なことを考えよう。

## 第二話 “女主人公” 対策 ～敗北エロと淫乱度システム

ム

① 戦闘で敵に負けること。

② エッチなステータスが上がること。

男性向け同人エロゲにおいて、エロ展開のフラグになりがちなのはこの二つくらいだと思います。たぶん。そうであってほしい戦闘中エロ、敗北エロ、スラム街エロなどなど。男性向け同人エロゲはエロ展開のフラグがいろいろあります。

まずは、戦闘で敵に負けると犯されてしまう——いわゆる敗北エロ。心は屈辱に燃えるけれど、体は感じてしまう定番のアレだ。

敗北エロを避ける方法としては、戦わないことと、戦ったとしても負けないこと、かなあ。具体的な対策は……うーん……逃げ足を鍛えるくらいしか思いつかない。ランニングでもはじめてみようかな。

次は、エロい目に遭うと上がっていくステータス——淫乱度システム。経験回数や絶頂回数が増えたり、体の各部位の開発具合が進んだりすると、女主人公の淫乱度が上がる。で、淫乱度の上昇に伴って、セリフや立ち絵が変わるらしい。

淫乱度を上げないためには、処女を守る？ ……いや、いつそのこと二年生までに非処女になっておくのはどうだろうか。初めから非処女なら、快樂堕ちを樂しむって方向にならないのでは?? 天才の発想かな???

まあ、世界は広いから非処女が主人公の同人エロゲもあるかもだけあります。

とにかく、目下やるべきことは――

①体を鍛えて逃げ足を早くすること。

②処女でなくなることを。

この二つか。うん、これならなんとかなる気がしてきた！ の、だけれども。

……………実は、もっと簡単に確実な“女主人公”対策を思いついている。

寝取られだ。

カレシをつくってイチャイチャらぶらぶしつつ性的に不満を抱えながら寝取られを待つ。たぶん、いちばん安全で手っ取り早い対策だ。

(〆〆)から早口)

でもね、寝取られるために誰かと恋人になるのは解釈違いなんです。寝取られは、前提として恋人がお互いを真摯に想い合っていてほしいんです。恋人のこと心から愛

しているのに、体から墮とされていくのがいいんですよ！ だからこそ、寝取られて完  
墮ちした時の「ごめんなさいっ」が輝くわけで!!これは個人の感想・嗜好・解釈であり、  
普遍的な価値観を示すものではありません。

(一)(一)まで早口)

まあ、とてもとても個人的な理由から、寝取られは最後の手段としてとっておきたい。  
それに、寝取られるためカレシをつくつて、寝取られ展開になるとはどうにも思えない。  
どっちかというとホラー展開になりそうなんだよね。カップルもホラーの定番だ  
し。

となると、やっぱり逃げ足を鍛えなくっちゃ。けど、カレシがいたらデートやらなん  
やらで鍛える時間が減ってしまう。

そういう意味でも普通にカレシをつくるのは無しだな、うん。

よし、明日の朝からランニングは始めるぞ！ 目標は三日坊主にならないこと!!

## 第三話 主人公補正（微）

私たち家族は、都市部から少し離れたところに住んでいる。新築一戸建ての一軒家。都会とも言えず、田舎とも言えず。ほどほどに賑やかで、ほどほどに静か。そんな住宅街の一角は信号も少なく、早朝ランニングにはうってつけだ。

ねむい。けど、ちゃんと起きた。三日坊主は回避できた。このままランニングを朝の日課にしようね。

ジャージに着替えて外に出る。4月上旬になると、朝5時でもうっすら明るい。もう30分もしたら日の出の時間だ。

——うちの敷地にある道路に面したフェンスに血まみれのおじさんがもたれている。ちよつと意味が分からなくて固まってしまった。うずくまるようにフェンスにもたれている血まみれのおじさん。足元にえげつない量の血だまりができています。

き、救急車っ！ 通報!! 119番!!! いちいちきゅー!!!

「アハ、アハハハハハ！ その程度オ？」

パニックになりながらスマホを取り出そうとした私の耳に、少年の高笑いが届いた。そんなに遠くない場所からゆったりとした足音が聞こえる。これゼツタイ追われてる



やつじゃん。

自分でもなんでもそんなことをしたのか分からない。

火事場の馬鹿力を發揮し、おじさんの体を引きずる。もつれるようにフェンスの陰にしゃがみ込んだ。や、やつてしまった。思わず助けてしまった。

足音が近づいてくる。これはバレる。ぜったいバレる。血だまりあるもん。ちよつと覗けばフェンスの奥にいるの見えるもん。

「フウン、まだそんな小細工ができる余裕が残ってたんだ。クスクス……」

少年は近くをゆつくりと見まわした後、フェンスの前を通り過ぎて行つた。足音が遠ざかっていく。……は？ うそやろ君ガバすぎへん?? 早朝で暗いと言つてもそこそ

こ見えるやろ???

瞬間、私の脳裏に閃くものがあつた。閃いてほしくなかつた。

——主人公補正。

いやでも、そんな都合が良すぎる………ことが起きるのが主人公補正ですよね——

!! 知ってる!!!

やめてよね! 私が「女主人公」である可能性を高めるのは!! やるだけやつて何

にもなくて徒勞に終わつて、心配し過ぎだつたなくははははで済ませたいんですよ本当

は!!!

ていうか、ついつい助けちゃったけど、どうしよう。

改めて、血まみれおじさんを見る。ヨレヨレのコート、型崩れしたスーツ。くたびれたおじさん（精神年齢的には若い年）にしか見えない。けど、引きずった時に触った体は驚くほど引き締まっていた。このキャラ設定、どう考えても裏家業の人だ。だつての黒の革手袋してるもん。ついでに顔もいい。

——このおじさんが相手なら、後腐れ無く処女を捨てられるのでは？

処女をもらつてくれそうな相手が、恩を売れそうな状態で、手元に転がり込んできた。別の方法を考えていたけど、こっちの方が手っ取り早く済ませられそうだ。

だから、助けてもいい。うん。そういうことにしよう。

控えめに言つて罨では?? と喚き叫ぶ心の声には、耳を貸さないことにした。

「立てますか」

薄目を開けたおじさんに肩を貸す。私の部屋に連れていくことを伝えると、おじさんは眉をしかめつつ頷いた。怪訝そうな顔だ。そりやそうだな。得体が知れなすぎるもんな、私。

手が震える。両親に見つかりたい気持ちと、見つかりたくない気持ちがせめぎ合う。もし、本当に主人公（都合展開）補正が私に備わっているのなら——

## 第四話 くたびれたおじさんが強キャラはあるある

お父さんとお母さんに、ちよつと体調が悪いから今日は休むと伝えた。日ごろから無遅刻無欠席で良い子の私は、こういう嘘も信じてもらえる。まあ、あながち嘘ではないけれど。

「学校には連絡しておくね。でも、ママかパパがいなくて大丈夫？ 顔色けっこう悪いみたいだけど……」

「うん、大丈夫。風邪っぽいだけ。薬を飲んで一日寝たら治ると思う」

「何かあったら、電話するのよ？」

「はい」

お母さんに良い子の返事をする。騙しているのに心配してもらおうと、ちよつと申し訳ない気持ちになってしまう。

「急にランニングをはじめたから、体がビックリしたんじゃないか？」

「もー！ そんなことない、と思う……」

からかうように笑うお父さんにむくれて見せる。二人でじゃれてるだけだと分かっているの、お母さんも笑っている。

「いつてらっしやい」

手を振って、お父さんとお母さんを見送った。ドアを閉めるふりをして、細く隙間を開けて耳をすませる。けれど、二人が何かに驚くような声は聞こえなかった。



マグカップを二つ持って部屋に戻ると、おじさんはベッドに腰かけていた。

「起き上がって大丈夫なんですか？」

「おかげさまでね」

——幸か不幸か。誰にも見つかることなく、血まみれのおじさんを自分の部屋に連れ込むことができた。

部屋に入って早々、おじさんは私の血液を求めた。前世の経験から全血献血には慣れていたのので気軽に応じると、私の体重をめっちゃ詳しく聞いてきた。

抜いていい血液の量を計算するためらしいので素直に答えただけど、ちよつと恥ずかしかった。その、エロゲみたいなのが起きる世界らしからぬ体重的なので。そういうところも「ヒロイン」じゃないんだよなあ、私。

「ココアです」

「どーも」

右手のマグカップを渡すついでに、おじさんの様子をうかがう。服は大きく破れていて、痛そうな傷口が見えている。けれど、血痕が見当たらない。あれだけの大怪我だったのに。

玄関前の血だまりも、廊下や部屋の血痕も、私のジャージに染みた血も、消えてなくなっていた。なんとなく、おじさんが何かをしたんだらうことは察している。

「いやあ、慣れないことはするもんじゃないねえ。お嬢ちゃんが招いてくれて助かったよな。血まみれおじさんと『私』が見つからなかったのか。『私』が家に招き入れたことを契機に、おじさんが自分の概念を“客人”に上書きしたから。吸血鬼は招かれないと家に入れない”という概念を応用した感じ。ヤバい少年は五感ではなく概念感覚で追跡していたので、おじさんを見失った。」

おじさんは、そうボヤキながらへらつと笑った。やつぱり顔がいいな。男前系の顔だ。

ココアをすすする。血の気の引いた体に温かさがしみる。これまでのやりとりからなんとなく予想はつく。けど、いちおう聞いておこうかな。

「あなたは……その、吸血鬼、なんですか？」

おじさんは、喉の奥をクツと鳴らし、自嘲するように笑った。

「僕は、血をすすするしか能が無いただのコウモリさ」

——その姿形<sup>ナリ</sup>で一人称が『僕』!? その姿形<sup>ナリ</sup>で一人称『僕』?!?!? その姿形<sup>ナリ</sup>で一人称が『僕』!!!!

あまりの興奮に思わず反芻してしまった。一人称『僕』おじさん……なんて味わい深い。  
い。

じゃなくて。

わざわざ「コウモリ」と口にするあたり、どつちつかずのポジションを取っているみたいなニュアンスを込めているのだろう。おじさん良いキャラしてんねえ。

「まあまあ、そう怖い顔せずに。嘘はついてないから。言いたくないだけで」

おじさんは、私の沈黙を怒っていると判断したらしい。怒ってないです。一人称『僕』おじさんを嘸みしめてただけです。

「さて、おじさんの話は置いといて。お嬢ちゃんの話をしようか」

すつと目を細めて、おじさんは私を見た。

「さつき言っていた、僕にしてほしいことって、何だい？」

## 第五話 腹上死ってレベルじゃない

「諸事情あつて処女でなくなりたいから、後腐れなくセックスできる相手を探してた、ねえ」

おじさんは、私の言葉をザツクリまとめながらポリポリと顎をかいいた。

「おじさんで良ければ構わないよ、と言いたいたいところなんだけど……僕とお嬢ちゃんじゃ、人としての“器”や“格”が違い過ぎて、セックスできないねえ」

「それは……私のことを馬鹿にして言っているわけじゃないですよね？」

言葉だけ聞くと、めっちゃ馬鹿にされてる気がするけど、おじさんの話し方はそんな感じじゃない。

「もちろん」

おじさんの説明をオタク的にまとめると、“器”はその人のレベル上限。“格”は現在のレベル。

そもそも“器”<sup>レベル上限</sup>がある程度以上ないと、“格”<sup>レベル</sup>を上げることできない。そして、“格”<sup>レベル</sup>の差が大きくなりすぎると、“格”下の相手と交われなくなる正確には、“格”上の相手と交わる（セックスや戦闘など心や体の交わり）と、めっちゃうちゃ経験値が入

り“格”<sup>レベル</sup>が上がりやすくなる。けれど、“器”<sup>レベル上眼</sup>のほぼ無い人がそれをする、膨大な経験値を受け止めきれずに“器”<sup>レベル上眼</sup>が破裂して死ぬ。“器”<sup>レベル上眼</sup>に差があっても、“格”<sup>レベル</sup>が同じくらいならセックスできる。逆は無理。

なるほど。

“器”や“格”が備わっている人とは、つまり、“主人公”や“ヒロイン”、“サブキャラ”といったエロゲの登場人物っぽい人々のことか。彼らの特殊性はエロゲの登場人物っぽいからで納得してたけど、ちゃんと理由があつたんだなあ。

いやいやいやいや、待って。

この世界、レベルとかの概念が実在するのにおじさんがいる業界では“器”と“格”という言葉で説明されているが、違う業界では別の単語で説明されていたりする。ただ、レベルのような何かがあるのはこの世界で共通の概念。？ 嘘でしょ?? 男性向け同人エロゲRPG感が増してきたんだが???

あつ、でも、おじさんと私がセックスできないってことは、“器”や“格”が私に無いつてことじゃん！ これって私がモブであることの証明になりませんか!?! なりますよね!?! よっしゃああ!!!

内心でガッツポーズを決めながら、おじさんの話に耳を傾ける。

「ま、普通に生きてるだけじゃあ“器”があつても“格”は上がったりはしないだけ



ど。僕は、人間から何歩か踏み出した存在でね」

そら、人の血を吸うような存在だもんなあ。

「ちよつぴり」格”が高いから、“器”のほぼないお嬢ちゃんとセックスしたら、良くて内臓破裂——」

良くて内臓破裂!?

「悪くて上半身が消し飛ぶんじゃないかな?」

悪くて上半身が消し飛ぶ?!?!

おじさんの腰の一突きで、上半身が消し飛ぶ自分を想像する。エロゲみたいなきっかけで起きる世界で生きてるから、死ぬのはそれなりに覚悟してるけど、そんな死に方しようがない。

まとめると、おじさんは同じくらいの“格”の相手としかセックスできないということか。

……いやまあ、セックスの相手してもらうのは、おじさんを助けるための方便だったけど。あわよくばという気持ちはそりゃあったので、当てが外れて残念だ。

仕方がない、当初の予定通りの方法で——

「ところで、処女でなくなりたいのは、性的な快感に耐えられるようになりたいからって理由だったよね?」

「え？ ええ、はい」

おじさんは、「なら良かった」と頬を緩めた。笑うとけつこう若く見えるな。  
「そういうことなら、僕でも手伝えるよ」

——凹凸を絡み合わせるだけが、性的快感じゃないからね。

おじさんは、黒の革手袋をゆつくりと外した。

## 回想 音声再生① おじさんと『 』

「苦痛にしろ快感にしろ、耐えることや慣れることは難しいんだ。人間は良くも悪くも忘れる生き物だからね」

（ベッドがきしむ音）

「ただ、許容範囲を広げることとはできる」

『そう、なんですか？ んっ』

「たとえば、精神的にも肉体的にもキツイ仕事を経験したとする。環境が変わって新しい職場に行くと、”前よりマシだな”って思うのさ」

『つああ、たしかに』

「だから——」

（衣擦れの音）

「これ以上ない羞恥と快楽と苦痛で、性感のしきい値を上げる」  
『ひえ』



(途切れなく続く水音)

『っあ、んっ、んん……っ！ ふっ』

「こらこら、今、ここが——」

『あっ！』

「気持ち良かったんだろう？」

『ああっ、あん！ っ!?!』

(ベッドのきしむ音)

「ほら、ちゃんとやわらないと。言ったよな？ まずは普通に性感を高めていくって」

『す、みませ、っはー……き、きもちいい、です……』

「よくなりました。はい、次はここ」

『ひゃあ!?! あっ、きもち、いいです……っん!』

「おっ、いい調子。これから頭がおかしくなっていけなくなるくらいの快感を叩きこむんだから、まずはフツウに気持ち良くなつとかなないと、後がツライぞ？」



『いいっ！ あっ、ふあっ！ つあ、いくっ！ ううっ!!』

(ベッドのきしむ音)

「おっと、しがみつくなら枕コツチにな。これ以上服がしわくちやになつたら、おじさん困っちゃうから」

(水音)

『や、あ……っ!? だめ、もう、イッた……イッたからあ……!』

「うんうん、イッたなあ」

『も、もう、やめ……っ』

「ようやく、これからが本番だ」

『——ヒッ』



『うあ、っ♡ ああ、くくっ♡ ひぬ、しんじやう……っ♡♡』

「ははは、このくらいじゃ死なないさ」

『ふっ、ぐううっ!』

「ほらな。まだ蹴ったり殴ったりする元気があるじゃないか。ぜんぜん力が入ってない

けど」

『ひぎっ♡ いっつ、あああ、くくくっ♡♡』

「意識がトベなくなるまでやるぞ。ほら、がくんばれ」



(軽く叩く音)

『…………』

「よし、起きた。口を開けるな？」

『あ…………』

「ん、いい子。今からココアを飲ませるから、ぜんぶ飲むんだ」

(何かを啜る音)

『んっ、ちゆう、ちゆうっ、んぐ…………』

(嚥下する音)

『ぐっ、げほっごほっ！』

「あゝあ、こぼした。口の周り汚しちゃって」

『くくくっ！ あっ!?!』

「あらら、舐められたただけで軽くいったのか？」

『ひいつ、いつてない！ いつてないですっ!!』

「ウソはダメだなあ」

『……う、くくつ、ぐすつ……ひぐつ……』

(すすり泣く声)

「よしよし。でも、泣いても終わらないんだ。イけなくなるまでがんばろうな？」

## 第六話 飲み込んで、おじさんの○○

「お疲れさま」

ポンポンと頭を撫でられ、軽い調子で労われた。おじさんはスーツにコートのまま、乱れた様子も疲れた様子も見えない。それに比べて私は、真つ裸でベッドに横たわったまま。喉はガラガラに枯れ、体はギシギシに痛む。けど、頭はいたって冷静だった。

「あ、りがとうございました」

首だけ動かして会釈する。おじさんは、私が求めたことを叶えてくれただけだ。お礼を言うのが筋だろう。めつつちやキツかったけど。

下着やタオルの場所を聞かれたので、引き出しの場所を伝える。どうやら、もろもろの後片付けもしてくれるらしい。立ち上がった後ろ姿を目で追う。

——おじさん、ヤバイ。

しみじみと思った。

ありとあらゆる手練手管でイカされ続けた。おじさんにその気があつたら墮ちていた。目にハートが浮かんで、頭がバカになっていた。確実に。でも、そうならないよう



に加減されていた。性依存も、性嫌悪もない。

なんだそのトンでもないテクニク。

最終的に、肉体の感覚と脳の受容が切り離され、体は感じているのに頭は落ち着いているという、わけわからんとこまで押し上げられた。

エッチなこととして『うんうん。そうだね、気持ちいいね』としか思わん状態つてなに。こわすぎるんだが。

で、まだお昼すぎ。半日も経っていない。むちやくちやだ。

そりゃあ、エロゲの登場人物っぽい人がヤバくないわけないと思っただけでも。ここまでだとは思っていなかった。



おじさんに後片付けをしてもらったあとも、私はベッドから起き上がれなかった。ギリギリまで血を抜かれて、ギリギリまでイカされたら、まあ、そうなるわな。

「さっきのを何回か繰り返したら、たいていの性感に対応できるようになるけど……」

そっか〜！ 繰り返し返す必要があるのか〜！！

ゆるして。

「命を助けてもらってこれだけじゃ、釣り合っていないか」

おじさんの胸元、赤い糸血液を操作して傷口を固定している。縫っているように見えるだけ。で縫ってある傷口からジワリと血がにじんだ。血液は生き物のように揺らめくと、宙で球形になり、私の口に飛び込んできた。

は？　なんで??

するりと喉の奥に入っていく血液。舌を通り過ぎた鉄の味に、思わず目を白黒させる。

「これでよし」

ヨシじゃないが??

「いざという時、お嬢ちゃんの命を助けてくれるお守りみたいなものだよ。体に害はないから、安心してほしい」

そう言われると、ありがたくもらっておこうかな?　と思ってしまう。

「ありがとうございます」

「じゃあ、忘れたところにまた来るから。またね」

わあ~~~~!　アフターケアもバッチリだあ~~~~!!

たすけて。

おじさんが去るのをベッドに寝ころんだまま見届けた後、私は眠りについた。という

か、  
気を失った。

## 挿話① コウモリの恩返し

タイチとユウ泰たいち一と夕星ゆうせい。おじさんに関わりのある“主人公”と“ヒロイン”。他に四人の“ヒロイン”が存在するが、おじさんは二人の名前しかまともに覚えていない。ただいま個別ルートクライマックスの真つ最中。おじさんをオタク的にたどると『推しに幸せになつてほしい』&『壁や天井になりたい』タイプで、二人のために命をかけることも厭われないし、見返りを求めていない。には、生きていてほしかった。幸せになつてほしかった。あの二人が笑つて生きる未来の一助になれるなら、僕にとつてこのうえない幸福だった。

だから、僕が死んでも構わないと思つていた。

——まさか、命拾いするとは思わなかった。

しかも、僕みたいな不審者バケモノに、迷わず血を分けてくれる変わり者悪者が、タイチ以外にもいるとは。世の中は広い。彼に出会う前の荒んでいた自分が馬鹿みたいだ。

軽く助走をつけ、屋根から屋根に飛び移り、真つ直ぐ疾走はしる。僕はどちらかという肉体派ではないのに、タイチに出会つてから走つてばかりだ。ひとまず、彼に付けた“血痕”に向かう本当は、ヤバい少年に“血痕”付けて追跡したかったが、概念から自分

の居場所がバレてしまうのでできなかつた。「血」を通して感知を行う。まだ異変はない。

たしか、日中は「姉」とやらが起きているから自由に動けないとほざいていた。だからこそ、恩返しをする時間の余裕があつたのだがどんな時でも、エツチなことをする時間は確保される。それが、エロゲみみたいなことが起きる世界。

脳裏の広域地図に点在する「血痕」。ついさつき増やしたばかりの「血痕」は、微動だにしていない。本人の望みとはいえ、だいぶ無理を強いたから、たぶん寝てるのだろう。

それにしても、変わったコだつた。

移動しながら、二人目の変わり者愚か者について考える。タイチを取り囲む女たちに「常識が無い！」とキーキー言われる僕が、「変わっている」と思つたのだから、相当の変わり者だ。

そうしなければならぬという、強迫観念。

タイチとは、また違う方向で揺るがない瞳と感情。まあ、さすがに、僕が正体をはぐらかしたときは怒つてたか一人称『僕』おじさんを反芻していただけです。女つてやつは、ああいう受け答えをするとすぐ怒る個人の経験に基づく感想であり、普遍的な価値観ではありません。

それはさておき。あのコの手してほしいことが、短時間で済むうえに僕がすぐできることとでよかつた。命を救ってもらつた恩返しに、きちんとできた。

『命を助けてもらつてこれだけじゃ、釣り合つてない!』

僕の目を見てそう言い切つたタイチの姿を思い出す。

「……ん」

なんとなくおかしくなつて、唇の端が吊り上がる。彼に恩返ししてもらつた僕が、誰かに恩返しすることになるなんて!

ああ、本当にタイチの言うとおりで。僕は、なんて狭い世界で生きていたんだらう。

“血痕”の感知に、おぞましい気配とそこから溢れる殺意が引つかかつた。圧倒的な“死”の概念が叩きつけられる。怖ろしい。過去に置き去りにしたはずの恐怖が、じわりと胸に去来する。

——タイチとユウが、僕の世界から失われてしまうことが、何よりも怖ろしい。だから、僕は立ち向かう。

それに——

「またね、と言つてしまつたし」

約束は、守らないと。

そうだらう?

命の危機にあるというのに、僕を見つけて破顔するトモ<sup>愚</sup>ダ<sup>か</sup>チ<sup>者</sup>に、心の中でそう話しかけた。

## 第七話 対策の抜本的な見直し

早朝の空気を胸いっぱい吸う。今日も良い天気になりそうだ。

つい先日、隣の市で爆発事故があり周辺一帯が停電したり、海上を震源とした大きめの地震があったりしたおじさんたちは勝ちました。おじさんも満身創痍ですが生きてます。けど、エロゲみたいなことが起きるこの世界ならわりとよくある。いつも通りの治安の悪さだ。

軽くストレッチをしてから、ヨタヨタと走り出す。静かな住宅街は、いろいろ考えながら走るのにピッタリだ。まずもって考えなければいけないのは、男性向け同人エロゲの女主人公対策について。

——私は甘かった。

エロゲみたいなのが起きる世界、舐めてた。ちよつとエロゲの知識があるからつて調子に乗っていた。この前、『JK連続絶頂耐久訓練〜イキ狂い地獄〜』みたいな体験をして、考えを改めた。

エロゲをやっていると、「馬鹿になる」「頭がおかしくなる」「死ぬ」などといった喘ぎ声をよく見かける。フィクションにおける誇大表現だろうけど、エッチだからヨシ！と



思っていた。

しかし、この世界では“セックスで精神が壊れる”が事実として起こる。だって、エロゲみたいなことが起きる世界なんだから。おじさんのトンでもないテクニクを味わって、心から理解した。理解したからこそ、より強く思う。

——男性向け同人エロゲの“女主人公”とかゼツタイなりたくない……！

ということ、おじさんの“訓練”が今後も行われるであろうことを加味して練り直した対策がこちら。

〔Before〕

①体を鍛えて逃げ足を早くすること。

②処女でなくなる事。

〔After〕

①逃げる・避ける方法を中心に護身術を教えしてくれる相手を見つけること。

②処女でなくなる事。

え？ ②が変わってないって？ ていうか、おじさんの“訓練”があるならいら

んじゃないかって??

逆だ。

おじさんの“訓練”があるからこそ、早めに処女でなくならなければならない。

だつてここ、エロゲみたいなことが起きる世界やぞ？ そんな世界で“エツチなこと  
に強い処女”とか、なんやかんやでハメられて即墮ちしてアへ顔ダブルピースさらす未  
来しかない??

「くんれんとぜんぜんちがう！ おちんちんしゅごいのおお!!」とかいう展開にゼツ  
タイなる。知ってる。なぜなら、そういうのいっぱい見てきたから。

というわけで、今日からこの二つの対策を進めていきたいと思う。いちおう、どちら  
も具体的な方法を思いついている。……うまくいくといいなあ。

## 第八話 おじいちゃんが強キャラなのは常識

住宅街を抜けると河川敷に出る。ここから少し先の橋まで行って、Uターンしてくるのが、私のランニングコースだ。

早朝の河川敷には、ぽつぽつと人がいる。毎朝同じ時間にランニングをしているので、だいたい同じ顔触れになる。

犬の散歩をしているお姉さん。ガチ装備でランニングしているお兄さん。のんびりと歩いているお婆さん。そして、ゆったりとした動きで体操をしているおじいちゃん。おじいちゃんの体操は、たぶん何かの武術や武道の型だと思う。しかも、なんかこう、スゴい。ゆつくりとした手さばきや足さばきなのにキレがある。

言葉では説明できないけど、あのおじいちゃんはゼツタイに強キャラ。間違いない。そう、今日の目的はランニングじゃない。このおじいちゃんに話しかけることだ。

先日のおじいさんの“訓練”を通して分かったことは、『エロゲみたいなきることが起きる世界のヤバさ』だけじゃない。『教えてくれる相手がいると成長が早い』ということだ。あの“訓練”を経験して、たった数日。私は、多少の“刺激”に対して動じなくなっていた。ダンスに小指をぶつけても、痛いとは思ったけど悲鳴をあげたりしなかった。

どういう理屈かサツパリ分らないけど、「訓練」はたしかに効果があった。

たった一年しかない。自分一人でどうにかするには明らかに時間が足りない。

ならばこそ、技術で時間を補えるレベルの人に首を垂れて、教えを乞う。それしかない。

「お願いします……！」

「——ふむ」

芳しくない反応に頭を上げる。おじいちゃんは、指でアゴ髭をしごきながら思案していた。全てを見通すような静かな目で見つめられ、なぜだか首筋がチリツと痺れた。

「あつ、あの、自分でも、都合がよすぎることを言ってるなと思います」

やつぱり、おじいちゃんはこの近くで道場を開いている人だった。そんなおじいちゃんに私がお願したのは以下の二つ。

①逃げる・避ける方法を中心に護身術を学びたいこと。

②両親には内緒にしたいので、道場ではなく朝のこの時間に、この場所で学びたいこと。

どう考えても、今日はじめて話す相手をお願いすることじゃない。特に②。図々しすぎる。

でも、これは譲れない条件だ。お父さんとお母さんにバレたら、何かあったのかと心

配され、いろいろとやりにくくなる。

ぶっちゃけ、おじいちゃんには断られるだろうなあと思ってる。

私の目的は、断られた後で「お知り合いに、この条件で引き受けてくれる人はいますか?」と尋ねることだ。知り合いからの紹介なら断りにくい度が上がるだろうという、こすい作戦だった。

「——かわいそうに一人称『僕』おじさんに飲まされた血液が体内にあることを看破しており、良からぬものに目をつけられた娘さんだと思っている。向こう（おじさん）の出口が分からないので、毎朝稽古をつけて様子見することにした。なお、おじさんの本質はマジで良からぬものなので、おじいちゃんは間違ってる。」

「え?」

風に紛れるように、おじいちゃんをつぶやきが聞こえた。いま「かわいそうに」って言った? 言ったよね?!

きよとんとしていると、おじいちゃんは取り繕うように首を振る。

「ああ、いや、何でもないんじゃないよ。大変だったのう……」

みんな? なにが?!

今までの話に、『かわいそう』とか『大変』とか言われる要素あった? ……………あつ

たわ。

危機回避のために護身術を学びたい。両親には内緒にしたい。なんかめっちゃ必死で切羽詰まってる。羅列すると、何らかの犯罪被害者感がスゴい。特に、両親には内緒にしたいてところ。性犯罪つぼさがにじんでいる。

なんか勘違いされてる気がするけど、訂正はしない。まあ、将来的にそういう目に遭うかもしれないから、あながち間違つてないし。

おじいちゃんは相好を崩した。それまでの落ち着いた雰囲気はどこへやら。ウキウキした様子で呵々大笑する。

「いや、こんな若い娘さんが武術に興味を持つてくれるなんて、うれしいのう！ 儂、ばつちり教えちゃう」

好々爺然とした様子に、ホツと肩の力を抜く。ていうか、え？ あの条件で引き受けてもらえるの？ マジで??

「ただし、儂の稽古は厳しいぞ？ あと一時間は早起きせんとな！」

「あ、ありがとうございます！ がんばります!!」

やった——っ！

## 第九話 安全かつ後腐れなく処女でなくなる三つの方法

ムフムフと機嫌よく電車に揺られる。まさか、こんなにスムーズに事が運ぶとは思っていなかった。おじいちゃんには感謝しかない。

“女主人公”対策にとって、『負けない』『捕まらない』『逃げる』はものすごく重要だと思っている。なので、明日からほぼ一年を稽古に費やせるのは大きい。

あとは、処女でなくなるだけだ。

この男性向けエロゲみたいなきっかけが起きる世界で“安全”かつ“後腐れなく”処女でなくなる方法は、私が思いつく限り三つ。ちよつと危ないのを含めると四つある。

【けつこう安全】

① “サブキャラ”の取り巻きハーレムの一員になる（難易度：低）

② 性転換しそうな“サブキャラ”の彼女になる（難易度：中）

③ “主人公”の筆おろしを行う“サブキャラ”になる（難易度：高）

【ちよつと危ない】

④ 繁華街で逆ナンする（難易度：低）

それぞれの詳しい説明はさておき。危ないことはなるべくしたくないので、安全かつ

難易度の低い『①“サブキャラ”の取り巻きハーレムの一員になる』をするつもりだ。

実は、ウチの学園に“モブ女子取り巻きハーレムでふんぞり返っている性格の悪い金持ちイケメン”な先輩がいるのだ!!。すごくない!?。ギャルゲやエロゲで定番キャラな印象があるけど実例があんまり思いつかないやつ!!!。実在してるんですよウチの学園に!!!。さすが男性向けエロゲみたいなことが起きる世界!!!。

いや、初めて見たとき感動したよね。顔はめっちゃイケメンなんだけど、表情と仕草がクツツソ腹立つんだ、あの先輩。しかも、お嬢様な“ヒロイン”ちゃん先輩第一章第一話「エロゲの世界ではモブ顔」で、電車に乗ってきた“ヒロイン”ちゃん先輩。ウチの学園にいるのが不思議なくらいのウルトラハイパーお嬢様。に粘着してるといふね。もう完璧。最高。オチが見える。

この先輩の取り巻きハーレム——ファンクラブのメンバーになると、お手付きの順番が回ってくるらしい。先輩に気に入られると、お手付きの回数が増えるのだとか。すでにファンクラブに入ってる友だちが言ってた。

ファンクラブの具体的な活動内容は、メンバー同士でキャツキャツして、先輩をチャホヤして、先輩に体を差し出すくらいしかしてないっぽいことも彼女から聞き出した先輩が“ヒロイン”ちゃんに粘着しているのは面白くない。けれど、地位も実力もあまりにも格上すぎて、“ヒロイン”ちゃんをいじめるとかできない。ファンクラブメンバー



は全員一般人なので。

そう、このファンクラブに入れば、待つてるだけで処女でなくなることができるとい  
！

めっちゃ楽しん!!

デメリツトは、たいていの生徒から「ファンクラブの一員なんだ……」と引かれるく  
らい。そのくらい、肉体と尊厳の陵辱に比べれば、安い安い。

順風満帆な先行きに思いをはせて、私はウキウキしていた。

## 第十話 脳裏をよぎる、これまでの日々

——二年生になったら両親が海外へ出張し、一人暮らしになる。

男性向けエロゲみたいなきっかけが起きる世界で、こんな特大のフラグを見逃ごせるはずなく。それから一ヶ月は“女主人公”対策に奔走した。おじさんの“訓練”、おじいちゃんへの護身術の稽古、先輩のファンクラブに入会。思い返すと濃いひと月だったなあ。

なんとか対策がカタチになってから、さらに一ヶ月。忙しいながらも平穏な毎日だった。



忘れた頃に来ると言っていた一人称『僕』おじさんは、まだ来ていない。今日来るか、明日来るかと身構えている間は、来ないのかもしれない。忘れてないってことだし。



雨の日以外は毎朝、河川敷でおじいちゃん師範と稽古。今は、基礎体力と持久力を鍛えつつ受け身の練習をしているおじいちゃん師範が道場から持ってきてくれた畳の上で練習している。さすがに地面はまだ無理。これがなかなか難しい。というか痛い。普通に痛い。最近になつて、ようやく前回り受け身ができるようになった。まあ、まだぎこちないけれど。

そうだ、ゴールデンウィークの数日間は、おじいちゃん師範が町内会の旅行でいなかったのも、お孫さんに稽古をつけてもらつた。

お孫さんと言うから、同じ年か少し上だと思つていたら、三十代くらいのお兄さんが来て驚いた。おじいちゃん師範に似ず、ずいぶんと寡黙な人で、必要最低限のことしか話していない。ただまあ、体つきからしてしっかりと鍛えてる人なんだろうなとは思ふ。

◆  
今後、おじいちゃん師範が用事でいないときは、お孫さん師範代が来てくれるそうだ。学生に払える程度の些細な月謝でここまでしてもらおうと申し訳ないけれど、正直言つてもものすごくありがたい。お手数をおかけします。

モブ女子取り巻きハーレム先輩のファンクラブ活動は、聞いていた通りの内容だった。お昼休みや放課後に先輩を囲んでチャホヤする簡単なお仕事。あとは、みんなでワイワイおしゃべりしながらお菓子を食べたりしているお菓子や飲み物の代金は先輩持ち。ごちそうさまです！だけだ。

メンバーは、玉の輿を狙ってるガチ勢から、顔目当てのエンジョイ勢、友だちがいるから入っているライト勢、その他私って感じだ。なお、先輩ガチ恋勢はいなかった。

私に割り振られたお手付きの順番は、ファンクラブに入ってから三ヶ月後。もともとは二ヶ月後だったんだけど、順番が延びてしまった。取り巻きハーレム先輩がお嬢様“ヒロイン”ちゃん先輩にかなり粘着しているので、呼び出しがまちまちになっているかららしい。

まあ、見えているオチはさておき。

私としては、処女でなくなればオツケーなので、憂さ晴らしでいいからテキストに呼び出してセックスしてほしいなとしみじみ思っていた。



——さて、回想は負けフラグだとよく言われるが、安心してほしい。これは、戦う前の回想ではなく、精神的ショックで見えてる走馬灯だから。

モブ女子取り巻きハーレム先輩が、お嬢様“ヒロイン”ちゃん先輩に粘着し続けた結果、  
“主人公”くん先輩にざまあされて転校しました。

週明けに夏服で登校したらこれですよ!!!

そのうちそうなるだろうとは思ってたけど早すぎる！ まだ一学期やぞ!! 衣替えしたところやぞ?! せめて夏休みまでがんばろうよ!!!! あれか?! 夏服の差分がなかったんか?!?!?

あまりにも早い取り巻きハーレム先輩の退場に、頭の中はてんやわんやのしっちゃかめっちゃか。そりやあ走馬灯も見るつてものですよ。泣きたい。

私があんまりにもしょんぼりしているのを見かねてか、ファンクラブメンバーの友だちがめっちゃ慰めてくれた。ありがとう。でも違うんです。取り巻きハーレム先輩が好きだったから悲しんでるわけじゃないんです。

事情通のクラスメイトによると、上流階級しか通えない全寮制の学園へ転校していったらしい。私物の持ち込みなども厳しく制限されるようなところだそう。それって、もう会う機会がないっていいませんか？

長々とため息を吐いて、机に突っ伏す。

とにもかくにも、私の“女主人公”対策は破綻してしまった。

## 第十一話 うれしくない呼び出し

(頭の中で)ひとしきり暴れまくった後、鎌首をもたげてきたのは後悔だった。

いつかこうなることは分かっていた。ならば、私には、できることがたくさんあつたはずだ。確実に処女でなくなるために、取り巻きハーレム先輩を通してできることが。でも、しなかつた。いろいろと対策を講じたから、もう大丈夫だと思ひ込んでいた。

取り巻きハーレム先輩ばかりを責められない。自分の浅はかさに凹む。

——そう、後悔しているのはそれだけだ。うん、それだけ。

取り巻きハーレム先輩を都合よく使おうとしていた人間私が、彼に同情とか憐憫とかしちやいけない。さすがに失礼すぎる。

ただまあ、これから先、取り巻きハーレム先輩の人生に良いことがあるよう祈るくらいは許してほしい。やらかしたとはいえ、"主人公"くん先輩やお嬢様"ヒロイン"ちゃん先輩より、顔を合わせていたし話していた相手だから。ちよつとばかり情が湧いてしまった。

それはそれとして、かなりガチなやらかし性的暴行未遂事件と傷害未遂事件。お嬢様"ヒロイン"ちゃん先輩の目をえぐろうとした。こわい。このレベルのやらかしで、転

校で済んでるのもこわい。をしたそうなので、そこら辺はしっかりと反省してください。マジで。



どうかかこうにか気持ち切り替え、ここ数日は新たな対策に移るための準備をして過ごしていた。今は向こうの返事待ちで、ちよつぱり手持ち無沙汰。

休日だし、天気もいいし、出かけようかな？　と思つた矢先にスマホに通知が入つた。相手はまさかの取り巻きハーレム先輩。なにごと。

日付と場所と時間だけ。デートのお誘いにしては素っ気ない。呼び出し、と言つた方が適切かもしれない。

ふと気になって、ファンクラブメンバーのグループメッセージファンクラブのメンバーだけのグループメッセージ。取り巻きハーレム先輩が入っているグループは別にある。に取り巻きハーレム先輩から連絡があつたか、それとなく確認する。すぐに、玉の輿ガチ勢の二人から反応があつた。

「あんな人だと思わなかつた」「ゼツタイに会わない方がいい」言葉は違うけど、二人ともそんな感じの内容だつた。めっちゃキレてた。どうやら、この二人にも呼び出しが



あつたらしい。他のメンバーへは、なんの連絡もないようだ。

ホツと胸をなでおろす。二人が無事でよかった。想像していた最悪の展開は無かった。こつぴどくフられたことよって気が狂って、婦女子狙いの猟奇殺人犯にでもなったのかなと想像していた。

ともあれ、すぐに返事があつたということは、命の危険はない感じか。それにしても、かなり親しかった二人の次に連絡をするのが、入つてすぐの私。取り巻きハーレム先輩の考えはよく分からない。

未遂とはいえ事件を起こした相手と、一対一で話すのはかなりイヤだ、けど。

……会うかあ。

考えないようにしても、“分かつていて何もしなかった”後ろめたさは拭えない。ならば、ガチ勢二人がキレるようなイヤな目に遭つて、後ろめたさと相殺したい。

そんな下心に背中を押されるようにして、取り巻きハーレム先輩に了承の返信をした。

## 第十二話 その発想、庶民には無かった

さて、呼び出し当日。私は、超高層ビルの52階にある高級レストランにやって来ていた。なんかこう、ドレスコードとかがありそうな、エントランスの雰囲気からしてお高そうな、入るのに気後れするレストランだ。

エントランスでオドオドしていると、お姉さんに話しかけられた。私の名前を確認すると、にこやかに席まで案内してくれる。パーカーとジーンズというオシャレを度外視した格好で挙動不審になっている私に、この丁寧な接客。さすが高級レストラン……！取り巻きハーレム先輩の呼び出しに応じたのは、呼び出された場所がこのレストランだったから、というのもあった。確実に人目のある場所で、そう無体なことはいらないだろう。

——と、思っていた。

まさか、52階をフロアまるごと貸切にして、人払いまでしてるとは思わなかった。金持ちの考えることは規模が違わなく……！ バカじゃないの!?!?

……まあ、マジのガチで命に関わる事態になったら……おじさんに飲まされた”お守り”が助けてくれる……はず。たぶん。きつと。

テーブルを挟んで向かいに座る先輩は、無言でこちらを睨んでいる。神経質そうな面差しに影が落ち、不健康そうだ。前々から年齢にしては細身で華奢な体だったけど、さらに痩せたように思う。

目が届く範囲に人はいない。飲み物も食べ物も運ばれてこない。

貧乏ゆすりの音が、かすかに聞こえている。

「やっぱりお前も違うじゃないか」

口火を切ったのは取り巻きハーレム先輩のつぶやきだった。

そこからはもう立て板に水というか。よくもそこまで溜め込んでたなという罵詈雑言だ。「金があれば誰でも良かったんだろう」だの「誰にでも股を開くアバズレ」だの「媚びを売ることしかできない無能」だの「誰もオレのことを見ていない」だの「お前たちの目は違う」だの。すごい剣幕でまくし立てる。

こんな風に面と向かって罵られれば、あの二人もキレルわなあ。二人が玉の輿ガチ勢で、先輩本人にあんまり興味が無いのが事実だとしても。

先輩の体目当ての私には、ちよつと的外れな内容もあった。けど、自分の都合のため他人を利用しようとした自覚があるので、肅々と罵倒を受け入れる。

何も言わない私をどう思ったのか。取り巻きハーレム先輩は整った顔を醜悪に歪めて、引きつるように嘲笑う。

「——脱げよ。抱かれないんだろう、オレに！ 雌犬らしく、今すぐここで尻尾を振って見せろよ!!」

え、マジでいいんですか!?! それめつちや助かります!! ありがとうございます!!!!



結論から言うと、セックスできなかつた。

……………その、勃たなくて。

## 第十三話 この世界のお家騒動あるある

実際の経験はないけど、エロゲ由来の知識エロゲの性行為はファンタジーです。エロゲの知識を元にセックスをするのはオススメできません。だけはあるので、いろいろと試してみた。けれど、うんともすんとも言わなかった。ピクリとも反応しなかった。

気まずい空気が漂う。先輩は、下半身まる出しのまま呆然と椅子に腰かけている。なんだかいたたまれない気持ちになりながら、テーブルに置いていたパーカーとジーンズをモゾモゾと着なおす。

勃起不全。

男性の性機能障害の一つ。EDとも呼ばれている。何らかの原因で男性器が勃起しない、もしくは勃起を維持できない状態を指す。そんな一般知識はあるけれど、専門家ではないので詳しくは分からない。ただし、いろいろと察することはできる。

ちよつと前までファンクラブメンバーとセックスしていたので、生まれもって勃たないってわけではない。年齢的に加齢が原因ではなさそうだし、見た目からして外傷が原因でもなさそう。

となると、心因性——心の問題、かなあ勃起不全の原因としては、この他にも、神経

や血管・筋肉などの異常、ホルモンの分泌異常、薬剤の副作用、男性器の長時間の圧迫などいろいろありますが、『私』の知識にはないため言及していません。

……“主人公”くん先輩にざまあされたことか、お嬢様”ヒロイン”ちゃん先輩に振られたことか、どつちもか。私に思い当たる原因はそんなところだ。

ついでに、取り巻きの中で親しい二人の次に、私が呼ばれた理由もなんとなく分かった。一度も抱いたことのない相手なら目新しさから勃起するかもしれない。そんな経緯だろう。

となると、わざわざレストランを貸切にして、フロアの人払いをした理由は……勃起不全を他の誰かに知られるのを恐れてってこと？

——ハッ！ ドロドロの相続争いの気配がする……!!

世界的にも歴史的にも子どもが生まれにくいこの世界では、お家騒動のタネがだいたいい性機能障害だ。前世と違って、種をバラまくことより、種が無いことの方が大きな事件になりがちだった。

跡継ぎが無精子症かどうかを確認するために、男児が精通するとすぐ、出産経験のある未亡人を側室にあてがう習慣があったくらいだ。こういうところ男性向けエロゲっほいよね。ちなみに、種無しだと判断されると、相続から外された。

ただ、この考え方は現代においてあまりにも時代錯誤で古くさい。はずなのだけど。

たしか、取り巻きハーレム先輩のご実家はかなり古いお家なんだっけ。そういうお家となると、勃起不全によって相続争いが揉めるとかなんやかんやあるのかもしれない。大変そうだなあ。

床に落ちていいるボクサーパンツを拾い上げ、取り巻きハーレム先輩の足に通す。このままの格好で放置するのは、その、あまりにも哀れなので。私にだって、それくらいの情はある。

先輩はされるがまま。がらんどうの目でボンヤリとしている。股間にぶら下がっているおちんちんが、無感動にぶらりと揺れた。

……ん？ 先輩は勃起不全なだけで、無精子症じゃないよね??

あの噂が事実なら、勃起不全は相続争いの問題にならないはずでは？

「えっと、先輩……その、精子を凍結保管とか……してるんですか?」

ズボンを履かせながら、そう聞いてみた。先輩は慣れた様子で腰を上げながら、気だるげに頷く。うわー、やっぱりそうなんだ。

この世界のネットで、そういう噂をよく見かけるのだ。上流階級の人間は精通したらすぐに精液検査を行うし、精子を定期的に凍結保存していると。やつかみ半分のホラ話だと思っていたけど、まさかマジ話だったとは。

「なら、ほら、人工授精とか体外受精とかありますし……」

軽々しく大丈夫とは言えないけれど、そこまで落ち込むこともないと思う。そんなニュアンスを含ませてみる。先輩は、椅子の肘掛けを拳で叩いた。ガツツと痛そうな音がする。

「そんなことはどうだっていいんだよ!」

急に罵声が飛んできて首をすくめた。このままだと蹴られそうなので、慌てて距離をとる。

それにしても分からない。勃起不全で苦しんでいるっほいのに、子どもができるかどうかは問題じゃない? 相続争いにまつわる何がしかで悩んでるんじゃないってこと?

「こんなオレはオレじゃない。オレは完璧でなければならぬんだ。完璧なオレに戻れば、すべて、すべてすべて上手くいくんだ! あの女は戻ってくる!!」

んんん?

血を吐くような悲痛な叫びだけど、先輩の言っている意味が分からなくて首をひねる。もう一回言ってもらっていいですかね??



## 第十四話 吐くとラクになることもある

「オレは……今のオレは、そう、完璧じゃない。完璧じゃないんだ。だから……だから、元に戻る。そして、完璧になつたら、あの女は戻ってくる。だって、オレのものだから」  
そこまで言うと、取り巻きハーレム先輩は大きいため息をついた。

「……同じことを何回言わせるんだよ」

「申し訳ないです。ちよつと気になつて」

追加でいくつか確認して、それでようやく分かった。

まず、『お嬢様』ヒロイン“ちゃん先輩は、取り巻きハーレム先輩のものじゃない”というの、いったん脇に置く。ここは取り巻きハーレム先輩にとつて“事実”らしく、触れると火傷じやすまない感じがする。

私が引つかかったのは『完璧なオレに戻つたら、お嬢様』ヒロイン“ちゃん先輩が戻ってくる”というところだ。

取り巻きハーレム先輩の中で認識がねじれて、因果が逆転している。

聞き取りした話から考えると、『ヒロイン“ちゃん先輩にふられたから勃起不全になつた”が事実だ。なのに『勃起不全だから』ヒロイン“ちゃん先輩にふら

れた』になつてゐる。

だからこそ、『勃起<sup>完</sup>不全<sup>壁</sup>が治つたら、すべて上手くいく』という考えになる。違う、そうじゃない。

分かりやすくして直しやすい欠点にすぎりたくなる気持ちは分かる。そうでもしなければ、もうどうしようもないくらい追い詰められているんだらう。

けれど、先輩本人もそれが事実ではないと心のどこかで分かっている。ところどころ言葉に詰まるし、自信なさげに目が泳ぐし、自分に言い聞かせるような口振りになる。ふむ。

——これ以上、踏み込んでいいものか。

今ならまだ、引き返せる。何も見なかつたし聞かなかつたことにして、「そうなんです、お疲れ様です」と言つて、さっさと帰ればいい。それでおしまいだ。

けれど、私の精神年齢がそれを押しとどめる。

たしかに、取り巻きハーレム先輩は、“ヒロイン”ちゃん先輩と“主人公”くん先輩に、酷いことをした。でも彼は、それが酷いことだったということすら、理解していない。

“先輩”と呼んでいるけども、彼の心はまだまだ子どもで。

“後輩”という立場だけでも、私の心の方がだいぶ年上だ。

だからというかなんというか。転んで、立ち上がり方すら分からずに泣いている子どもを、自業自得だという事実で突き放すことが、どうしてもできなかつた。

余計なお世話と言われれば、それまでだけど。

とにかく、精神年齢（ピーツ）歳の私には、今の取り巻きハーレム先輩が立ち上がるために必要なものがなんとなく分かるので、やるだけやってみよう。……うまく行くといいなあ。

「よし。先輩、ちよつといいですか？」

「なんだよ……」

何回も同じ話をさせられたからか、先輩の返事はくたびれていた。

「このレストラン、いえ、このフロアには、誰も人がいませんよね？」

「そうするように言つてある」

よしよし、人払いはバツチリ、と。先輩は「それがいつたいたいなんだつて言うんだ？」と、怪訝そうに眉をしかめている。

「先輩つて、私の名前、覚えてます？」

「覚えてるわけないだろ」

ですよね。アドレス帳にファンクラブの会員番号でしか登録されていないのは、メンバーのみんなが知つてる。そのことに関して、特になんとも思っていない。なぜなら、

かく言う私も――

「奇遇ですね。私も先輩のお名前、覚えてないんです。名字も名前も。なんかご実家がスゴいらしいとしか知りません」

自分より上の学年の生徒には、とりあえず先輩って呼べばオツケーだから助かるよね！

「……はあ？」

先輩は、思ってもみなかったことを言われたようにポカンと大口を開けている。

「お互いに名前を知らないだけじゃありません。私たちは、先輩の勃起不全のおかげで男女の関係になることがあります。さらに、先輩は学園から転校したので、これから先、顔を合わせることもありません」

「なに？ お前、遠回しにケンカ売ってるわけ？」

いやいやそんなそんな。これは、私たち二人の立場を明確にしているだけだ。

「つまり、ここにいるのは相手のことをよく知らない二人！ これはチャンス!!」  
ガタツと立ち上がり、堂々と宣言する。

「――第一回！ チキチキぶっちゃけ話&愚痴大会を開催します!!」

「はあ!!」

## 挿話② ようやく目が覚めた朝

オレにしては珍しく、朝と呼べる時間に起床した。喉に違和感がある以外は、スツキリした目覚めだった。まあ、あれだけ長時間ベラベラと話していれば、喉も痛めるか。

それにしても、けつきよく何時間くらい話してたんだ？ 解散したときはだいぶ日が傾いてた気がする。

適当に身繕いをしながら、昨日の出来事を思い返す。正直、あれこれと話し過ぎて、何を話したかあまり覚えていない。ちよつと、いや、だいぶヤバい話もした気がする。

もし、あの話を知られたとしたら、この家の嫡子として、アイツを処分しなければならぬ。ならないのだが——どうしてだか、アイツに対してその必要性を感じない。まあ、保身はできるようだから、ウカツなことは言わないだろう。

あれを話した、これを聞いたと、一つずつ思い出す。あんなにくだらぬ話のどこで笑ったのか、今となっては分からない。けれど、とにかく楽しかった。

◆ — ああ、そうだ。別れ際に約束を交わしたんだった。

『そうですね。いろいろ話しちゃいましたし、いろいろ聞いちゃいましたし。お互いのためにも、もう会わない方がいいと思います』

実際その通りなのだが、改めて言葉にされると何とも言えない気持ちになる。

『ただ、何かの偶然で、もう一度出会ったら。その時は——』

アイツは、ゆるく握った拳を顔の前に掲げた。オレにも同じことをするように促す。

『友だちになりましょう』

拳と拳が、コツンとぶつかった。



ふと、窓ガラスに映る自分の顔が気になった。オレはこんな顔をしていただろうかと、変なことを疑問に思う。

洗面所へ移動し、まじまじと鏡を覗き込む。驚きに目を見開く自分の顔と対面した。あの女の目の輝きが、自分の瞳の奥に見えた。かすかではあるが、間違いはない。オレが見間違えるはずがない。

オレは、この目が欲しくて欲しくてたまらなかつたのだから。

あの女と初めて会ったのは、五歳のころ、ウチの家で開かれたガーデンパーティーでだった。家同士のつながりを強めるためと、同じ年くらいの子どもたちが集められた一角にあの女はいた。

ピーチクパーチクとやかましい雛鳥の中で、あの女はひととき美しく、そして、ひときわ浮いていた。見覚えのある虚ろな目で、ニコリともせず黙って立っている。

とある名家のご令嬢だと紹介され、目と目があつた瞬間に理解した。何もかもを手にかけているはずなのに、何もかもに価値を見出せない。果てのない飢えと渇き。

——なんてつまらない存在なんだ。

顔が美しかろうが、家が良かろうが関係ない。そんなつまらない女に興味は湧くはずもなく。それきり、記憶の片隅に放り込んでしまっていた。

だというのに——

あの男と出会ってから、あの女は変わった。

変わってしまった。

キラキラと目を美しく輝かせ、蕾がほころぶように微笑む。そんな姿を見ると、頭の中がグチャグチャになった。訳も分からず胸が締め付けられ、ドロドロとした感情が溢れて止まらなかった。あの女がほしい。あの目が欲しい。

——欲しくて欲しくてたまらない。

『へー、そうなんですわね!』

アイツの声が聞こえた。昨日、よく聞いた合いの手だ。ワクワクと好奇心に満ちた声で、話の続きを催促する。

『えっ、なんでですか? 何があつたんです?』

なんで? ……なんと、聞かれても。

——…だつて、あの女はオレだ。

「——っ!」

ぞわりと鳥肌が立つ。今まで目を背けていた感情に言葉が与えられ、カタチになる。

——オレはあの女だ。

オレあの女はオレはあの女だから、このしがらみばかりの淀んだ世界を一人二人きりで生きていくのだと、信じて疑っていなかった。

——なのに、どうしてお前だけ。



——裏切り者。

——ずるい、ずるいずるいずるい！

だから、オレがいるところまで引戻きずり下ろしたかった？

心のどこかが「違う」と答える。

……オレは、そんなオレと同じつまらない女には、興味が湧かないんじゃないのか？

——おいていかないで。

ガキの自分が泣いている。必死に手を伸ばしながら、あの女の背中を追いかけ泣いている。

「バカだなあ、オレ」

分かってしまえば簡単だ。オレは、あの女がいる場所に、自分も行きたかっただけだ。……いいや、変に言葉で飾るのは止めよう。

みんなが楽しそうにしている輪に、自分も入りたかった。

それだけだった。

「ほんとにバカだ……」

## 第十五話 性転換ヒロインとモブ化現象の関係性

じわじわと暑さが増す今日このごろ。気温に反比例して、私の元気はなくなっている。周りからは、失恋を引きずっていると思われているが、もちろん違う。

“女主人公”対策が!! 遅々として進んでいないからです!!!

処女でなくなるための三つの方法のうち、一つ目『サブキャラ』の取り巻きハーレムの一員になる』が失敗したので、二つ目の『性転換しそうな』サブキャラ』の彼女になる』ための準備をしているのだけど、これもおろろろうまくいかない。

『性転換しそうな』サブキャラ』が見つからない……!』

そんなもんどややって見つけるんだと言われそうだけれども、実はわたくし、すでに発見しているのです! この世界で、性転換して“ヒロイン”になる人物『性転換して“ヒロイン”になる人物』と限定しているのは、“ヒロイン”にならず、普通に性転換する人は見分けがつかないから。を見分ける方法を!!

方法は簡単。その人の周囲の顔を確認すること。

そう、性転換して“ヒロイン”になる兆候がある人は、性転換の前でも“モブ化現象”を起こせるのだ。根拠は私の<sup>ソース</sup>の実験。

中学の卒業式を間近に控えたころ、イケメン同級生くんの周囲で“モブ化現象”が起きた。当時の私は、この世界について考察を重ねている途中で、“モブ化現象”は“ヒロイン”の周りでしか起きないと仮定していた。

その仮定をひっくり返す存在。注目せざるを得なかった。

そのうち、イケメン同級生くんは休みがちになり、卒業式にも出席せずじまいだった。イケメン同級生くんには親友の男の子がいたのだけれども、彼も理由を知らなかった。

はい、お察しの通り。イケメン同級生くんは性転換して女の子になつてました〜！ たまたま、イケメン同級生くんによく似た“ヒロイン<sup>女の子</sup>”を、街で見かけました。もしかしてと思い、話しかけてカマをかけたら案の定だった。その時、「みんなには、あの、彼にはナイショにしてほしい……」とお願ひされた。とても可愛かった。

イケメン同級生くんと親友くんは同じ学園に進学すると聞いていたので、高校入学後に彼女と彼のドタバタラブコメエロゲが始まるんやろなあと！ 思いました！！

以上が、『性転換して“ヒロイン”になる兆候がある人は、性転換の前でも“モブ化現象”を起こせる』と主張する根拠<sup>ソース</sup>だ。

まあ、サンプルがこの一例だけなので、すべての性転換で同じことが起きるとは言えない。けど、何の手がかりもなしに動くよりはマシだと思う。

——と、いうわけで。

モブ化現象を起こすイケメンがいないか、ひたすら調査してる。街で噂になるレベルのイケメンを、片っ端から総当たりしている。

もちろん、イケメンだけが性転換するわけではないことは知ってる。そのうえでイケメンを調査対象にしている理由は二つ。一つは、イケメンが“サブキャラ”として“主人公”とセットになっている可能性があるから。もう一つは、“主人公”を探すより、イケメンを探す方が簡単だからだ。

簡単……そう、簡単だ。

——お金を払えば。

## 第十六話 貧すれば鈍する

エロゲでたまに見かける『主人公に情報を伝えるキャラ』。

情報と言っても、好感度とかじゃやない好感度を教えてくれる親友キャラを、作者はエロゲで見かけたことがない。ゆえに、男性向けエロゲみたいなことが起きる世界にも、好感度を教えてくれる人物はいない。このタイプのキャラは、ギャルゲの中でも特定のシリーズにおける定番キャラとなっている。そのシリーズがとてつもなく有名なので『親友キャラ』好感度を教えてくれる』と認識されているのかなあと思う。「大変だ！○○が△△だつて!!」とか、「実は、□□は昔——いや、なんでもない」みたいな感じのストーリーやルートを進めるのに必要な情報の方だ。そういう情報を主人公にお届けしてくれるのが『主人公に情報を伝えるキャラ』だ。

と、私は勝手に呼んでいる。

『主人公に情報を伝えるキャラ』は、ヒロインやサブキャラで手分けしていたりもする。そもそも『めつっちゃ事情通なキャラ』がいることもある。

で、その『めつっちゃ事情通なキャラ』に近い存在が、このエロゲみたいなことが起きる世界にもいる。

“サブキャラ”だったりモブだったりする彼ら／彼女らは、ものすごく耳が早かったり、情報収集に熱心だったり、噂が大好きだったりする。そんな生徒が、どの学園にも何人かいる。学年に一人は必ずいる。

中には、情報を買って、お小遣い稼ぎしている生徒もいる。

はい、そうです。『性転換しそうな“サブキャラ”』である『モブ化現象を起こすイケメン』を見つげるために、『街で噂になるレベルのイケメン』の情報を、事情通の生徒たちから購入しています。

なかなか当たりのイケメンに出会うことができず、コツコツ貯めていたお年玉がじりじりとすり減る日々。つらい。お金が減るのつらい。

学生ってお小遣いとお年玉しかない大変だな!? 社会人だったころは！ 自分の好きなことにモリモリお金を使ったのに!! 働くことの偉大さを転生してから味わうってどういうことなの!?!?

……バイト、しようかなあ。

もうすぐ夏休みだし。ウチの学園バイト禁止じゃないし。

——などとウダウダ考えていたら、後ろ受け身に失敗して後頭部をぶつけた。いた

ぶつけたところを手でさすりながら立ち上がる。目から星が出るかと思つた。お孫さん師範代から「顎をしつかり引くように」と、静かな声で指摘された。

奥さんたちとバカンス中のおじいちゃん師範に代わり、今朝はお孫さん師範代に稽古をつけてもらつている。の、だけれども。

“女主人公”対策が進まない焦燥感と、貯金の底が見えてきた絶望感で、まっつたく集中できていない。

「稽古に、身が入っていないようだが……」

寡黙なお孫さん師範代が、思わず口を開くレベルで気が散つていたようだ。

「すみません……」

もう本当にすみません。教えてもらつている立場でこれはよろしくない。悩みはいったん忘れて、気を引き締めて稽古に臨もう——と、思つただけれど。

「……何か、悩みでもあるのか?」

そう質問されて、思わずポカンとしてしまった。いやだつて、お孫さん師範代が稽古の指導以外を話すところ初めて見たんだものおじいちゃん師範から、「あの娘さんに、何か変わった様子があったら詳しく聞け! いいな?」と口を酸っぱく言われているから。もちろんそれだけでなく、師範代として弟子の心配もしている。

私が呆けているのを質問が聞き取れなかったと思ったのか、お孫さん師範代は同じ言葉を繰り返した。そして、「自分でよければ、話を聞こう」とものすごく真剣な顔で言った。言葉数は少ないながらも、心配してもらっていることがまっすぐ伝わってくる。

しかし、悩みの内容がアレなので、心配してもらおうのものがものすごく申し訳ない。いたたまれなさ過ぎてツライ。なんとかごまかそうとしたけれど、お孫さん師範代はごまかされてくれない。師範代つてば勘がめちゃくちゃ鋭いな!?

腹をくくって、二つの悩みの片方を正直に話すことにした。頼む、これで見逃してくれ〜!〜!

「えっと、その……お金が、なくてですね。……夏休みに、バイト、しようかなあと……考えてました……」

「……そうか」

ぬあく〜! お孫さん師範代、声に感情が無いから、どういう気持ちでその返事しているのか分からない!! 私は! 恥ずかしいやら申し訳ないやらで、頭が上がらない!!! たすけて!!!

「君は、料理ができるか?」

急にそんなことを尋ねられて、首をかしげる。

前世では一人暮らしをしていたし、今世では両親が共働きなので、料理はそこそこで



きる。凝ったものは作れないけれど、レシピ通りに作るくらいなら大丈夫だ。

「まあ、それなりに。簡単なものでしたら」

「なら、バイトをしないか?」

渡りに船だけれども、バイトと料理にいったいどんな関係が?

聞けば、夏休みに巨大人工浮島で合宿をするのだが、まともに料理ができる参加者が一人しかおらず困っていると言う。ほかの参加者は、台所に近づけてはいけないタイプ——ようするにメシマズらしい。お孫さん師範代は、その人たちを台所へ近づけないようにするので手一杯だとか。なにそれこわい。

うくん、道場の門下生で合宿するってことだよな? 道場って言うとな所帯のイメージあるなあ。たくさん食べる人たちのご飯を料理するのって、大変そう。それなら、短期のレジバイトとかの方が——

「あまり多くは払えないが……」

日給を聞いて、私は目の色を変えた。それに加えて移動費と食費と宿泊費は向こう持ち!?

「バイトやります!!!」



お孫さん師範代の申し出に飛びついた私は、夜になってメールで届いた合宿の概要と参加者リストに頭を抱えた。自分の部屋で一人、クッションで口を押えながら叫ぶ。

「男一人に女三人プラス師範代このうち、まともに料理ができるのは“主人公”のみ。師範代は米なら炊けるがたいいていのもを焦がすタイプ。そして気にせず食べる。残りの三人は、それぞれ方向性の違うメシマズである。バランスの悪さよ。とか、ゼツタイドつかの“主人公”と“ヒロイン”のイベントじゃん!!」

たしかに、お孫さん師範代は道場の合宿だと言つてなかつたけどさあ！ 私が勝手にそうだと思ひ込んだだけだけどさあ!! 巨人工浮島にある学園の『七不思議研究部』とかいう特徴的すぎる部活の合宿だとは思わないじゃないですか!!!

ていうか師範代、巨人工浮島の学園の先生だったの正確に言うと、『巨人工浮島の学園に臨時教員として任用されている潜入捜査官』。巨人工浮島に渦巻く陰謀を、極秘に捜査するのが任務。なんやかんやあつて“主人公”と“ヒロイン”が所属している部活、『七不思議研究部』の顧問をすることになった。!? まったく知らなかった!!

どうか、どうか普通のラブコメ合宿イベントでありますように!!

ガツチリと両手を組んで、お空に向かって祈る。けれども、心のどこかが「それはない」と訴えている。

だって、お孫さんガチで戦える人師範代が顧問やぞ？ しかも『七不思議研究部』って、ホラーとか  
ファンタジーとかサスペンスとかミステリーとか、そっち系でしょ???

——どれだけお金を積まれても、命には変えられない！ やっぱり断ろう!!

そう思った私の目に、バイトの日給が飛び込んでくる。

「……………」

お金には勝てなかったよ……。

## 第十七話 夏に盛り上がるものと言えば

——ようやく“モブ化現象”を起こすイケメンを見つけたと思ったら、実は“ヒロイン”でした。

男装“ヒロイン”が三回続き、さすがに心がくじけそうです。

ていうか、そのおっぱいどうやって収納してるんですか？ おっぱいの分のお肉はどこへ消えたんです?? 男性向けエロゲみたいなのが起きる世界の胸つぶし技術スゴいな???

そんなこんなで、“女主人公”対策は相変わらず進まず。あつという間に夏休み。今日から二泊三日、『七不思議研究部』の合宿に料理手伝いのバイトとして参加する。

そう、バイトにね、集中しなきゃだから。この三日は、『性転換して“ヒロイン”になるイケメン』を、探さなくていい。探さなくていいのだ。

バイトだからな——！ しょうがないよな——！！  
さて。

一日目の朝は、合宿先となる巨大人工浮島の保養地のコテージへの移動。足は、お孫さん師範代がおじいちゃん師範から借りた10人乗りのワゴン車だ。

私は、河川敷近くのコンビニから乗車。『七不思議研究部』部員たちは巨大人工浮島の寮から乗車することになっている。

今は、ちょうど寮の前に着いたところなのだけど……。

車外の騒がしさに、助手席の私と運転席のお孫さん師範代は顔を見合わせる。何やら揉めている声が聞こえてくる。師範代は無言のまま車を降りた。あんまり行きたくなかつたけど、私も助手席側のドアを開いた。

寮の前には、『七不思議研究部』の部員らしき四人の男女がいた。三人の“ヒロイン”たちは睨み合っており、眼鏡をかけた“主人公”がオロオロしている。

なるほどね、“ヒロイン”たちがあんまり仲良くないタイプのハーレムなのね。たわいもない言い合いくらいなら可愛いものだ。……ドロドロしてないといいなあ。

お互いに軽く自己紹介を済ませ、何があつたのか事情を聞いた。

眼鏡“主人公”くんが言うには、ワゴンのどこに誰が座るかで揉めていたそうだ。正しくは『どの“ヒロイン”ちゃんが眼鏡“主人公”くんの隣に座るか』で揉めていたんだろう。さすがに分かる。

お孫さん師範代は、眼鏡“主人公”くんの肩を叩いた。

「助手席に乗れ」

ですよねー。

三人の“ヒロイン”ちゃんの様子を見る。

中二病ロリ系”ヒロイン”ちゃん。

無口クール系”ヒロイン”ちゃん。

おっとり不思議系”ヒロイン”ちゃん。

個性豊かな三人の“ヒロイン”ちゃんたちは、助手席に乗り込む眼鏡”主人公”くんの背中を見つめてしょんぼりしている。

ふむ。夏のイベントにしては、みんなの好感度が高い感じがするなあ。いやまあ、最初からヒロインたちの好感度がマックスなエロゲも多いけどさ。

……保養地のコテージで、眼鏡”主人公”くんをめぐって三人の“ヒロイン”ちゃんたちが殺し合いするとかいう展開になりませんように。

## 第十八話 七不思議の八番目

さつきまで揉めていたのが嘘のように、保養地に向かう車内は和気あいあいとしていた。お菓子をつまみながら、ワイワイとガールズトークに花を咲かせる。

はあ~~~~っ！　かわいい!!　みんなかわいいねえ!!　“女主人公” 対策で荒んでいた心が癒される——っ!!

エロゲが大好きな自分は、可愛い女の子がキヤツキヤしているところを見るのがたまらなく好きだ。しかも、恋をしている女の子は、なおさら可愛くて大好きだ。

というか、恋する可愛い女の子が嫌いな人類なんておらんやろオタクはすぐ主語をデカくする。

今は、『七不思議研究部』のこれまでの活動について話を聞いていた。巨大人工浮島の学園では、“学園の七不思議”がまことしやかに囁かれているのだそう。開校から数年しか経ってないのに関わらず、である。

しかも、普通の七不思議と何やら趣きが異なるのだという。

「——そしてワレらは!　とうとう七不思議の謎を解き明かしたのだ!! その結果、『七不思議研究部』は巨大人工浮島に隠された陰謀に気づいてしまった。最後の謎を解くた

め、保養地に向かっているという流れ。」

「おおー！」

パチパチと拍手をすると、中二病ロリ“ヒロイン”ちゃんがムフフンと誇らしげに胸をはった。かわいい。

それにしても、すでに七不思議とやらの謎は解明してるのか。つまり、今つてクライマックス手前くらいなのかな？

「それでだな、これから行く保養地に、けんきゅ——」

「部長、ストップ」

「むぐっ」

無口クール系“ヒロイン”ちゃんが、中二病ロリ“ヒロイン”ちゃんの口をふさいだ。

「わたしたちは、ええ〜つと。この合宿で、えつとえつと……」

なんとかフオローしようとするも、モゴモゴと口ごもるおつとり不思議系“ヒロイン”ちゃん。無口クール系“ヒロイン”ちゃんが「研究レポート」とつぶやいた。

「そう！ これまで調べたことを研究レポートにまとめようつて、思つてて〜。えつと、思つてるんです〜」

……たぶん、部外者が聞いちゃいけないこと言いそうになつたんだろうなあ！ 中二



病ロリ”ヒロイン”ちゃん!!

「へく、すごいねえ! みんなしつかりしてるなあ!!」

私は、すべてに気づかなかったことにして話を流すことにした。

もちろん、中二病ロリ”ヒロイン”ちゃんは『研究所』と言いかけたのではないかと察している。けど、そんな怪しい単語、掘り下げたくない。嫌な予感しかしない。

ゾンビか? ゾンビなのか??ゾンビではない。

「レポートが書いたら、キサマにも読ませてやるからな!! ありがたく思えよ!!」

ふむ。研究レポートは口から出まかせじゃなくて、ちゃんと書く予定なんだ。

そういうえば、お孫さん師範代から送られてきた合宿概要メールにも、コテージの使用目的は『集中してレポートを仕上げるため』と書いてあった。

つまり、『研究所』とやらに行くのは、お孫さん師範代にもナイショにしているってことかな? まあ、もしもお孫さん師範代が知ってたら、部外者<sup>私</sup>をバイトに雇わない、か。

……四人だけで大丈夫なのかなあ?

「うん、研究レポート読むの、楽しみにしてるね」

「ムフ、ムフフー! キサマ、なかなか分かってるではないかッ!!」

中二病ロリ”ヒロイン”ちゃんはうれしそうに口元を緩ませている。えっ、そんなに喜ぶポイントあった?!

「わあ、ぶちよー、よかったねえ」

「……部長のレポート、読むの大変。がんばれ」

ああ、なるほど。レポートも中二病のノリなのね。それは読みごたえがありそうだ。

## 第十九話 頭の中がおっぱいでいっぱい

巨大人工浮島の保養地は、砂浜に面した小高い丘にあった。なだらかな丘の斜面に似たようなカタチのコテージがズラッと並んでいる。なかなか面白い光景だ。

自分たちが宿泊するコテージは、想像していたより遥かに広いコテージだった。二人用の部屋が二つ、三人用の部屋シングルベッド二つとソファベッド一つ。が二つ、最大で10人が泊まれるそう。

部屋分けは、以下の通り。

二人部屋A：お孫さん師範代

二人部屋B：私

三人部屋C：眼鏡“主人公”くん

三人部屋D：“ヒロイン”ちゃん三人

“ヒロイン”ちゃんたち、三人部屋Dにめっちゃ押し込まれてるけど、どこに分けても問題が起きそうだから致し方なし。

荷物の運び入れなどはみんなに任せ、食料品の詰まった段ボールを抱えてキッチンへ移動する。道中で買った生鮮食品を早く冷蔵庫にしまわないと。暑いからすぐ傷んで

しまう。

わつせわつせと作業をしていると、「ヒロイン」ちゃん三人が、キツチンに隣接したダイニングルームの隅でしゃがみこんでいた。荷物を抱えたまま何やら話している。かと思つたら、ペコペコとお互いに頭を下げている車内でのガールズトークの直前まで、眼鏡「主人公」くんを巡つてバチバチにケンカしていた。しかし、第三者を交えて、改めて普通に話すことができたおかげで、ギクシヤクした関係が緩和。話し合いの結果、共同戦線を組んで優柔不断な眼鏡「主人公」くんを攻め落とすことになった。

何してるんだろ? ……まあ、ギスギスした感じじゃないからいつか。

「——えっ、コレ一本しかないのか!」

中二病ロリ「ヒロイン」ちゃんの大きな声が聞こえて、なにごとか顔をあげる。何かあつたのかと声をかけると、三人は揃つて首を横に振つた。

「ぶちよー、声がおつきいよお〜」

「もつと静かに」

「む、スマヌ……」

そこからは、声のトーンを落として何やらゴニョゴニョと話し込んでいた。

「——では、約定に則り決を取るぞ! 賛成の者!!」

中二病ロリ「ヒロイン」ちゃんの掛け声に、スツと三人の手が上がる。

「いちおう聞くが、反対の者!!」

誰の手も上がらない。何の多数決なのかはサツパリ分からないけど、何かが決まったらしい。みんな満足げに頷いている。仲が良さそうで微笑ましい。

「おーい、海に行くんじゃないや無かったのか?」

ちようどそこへ、眼鏡主人公くんがやって来た。合宿中、勉強ばかりじゃツラかろうということと息抜きもちゃんどある。今日は夕方まで海で遊ぶ予定だそう。

「ホホーウ、契約者はワレの艶めかしい水着姿をお望みなのか? しかれば見るが良い!!」

「いや、おれは予定を確認しただけ、わーっ! ばかつ!!」

慌てる眼鏡主人公くんの目の前で、中二病ロリヒロインちゃんが勢いよく服を脱ぐ。

「あ、ズルい」

「わ、わたしも〜!」

無口クール系ヒロインちゃんと、おっとり不思議系ヒロインちゃんも、えいやつと服を脱いだ。みんな、服の下に水着を着こんでいたらしい。気合入ってるなあ。

ダイニングルームに水着のヒロイン<sup>美少女</sup>たちが勢ぞろいだ。いやゝ目の保養。ずずいと詰め寄られ、眼鏡主人公くんは真っ赤になっている。でも、目はそらさずに水

着姿をバツチリ凝視している。その行動、まさに“主人公”って感じでヨシ!

四人は、ドタバタしながらダイニングルームから出て行った。水着で走る三人……いや、二人のおっぱいがばるんばるんに揺れていた。

ちらりと、眼鏡“主人公”くんが申し訳なさそうな顔でこちらを見る。気にしないでいいと、笑って彼を見送った。

入れ違いでキッチンへやってきたお孫さん師範代。手には、白米や調味料と言った重い食品が入った段ボール箱が抱えられている。師範代と、顔を見合わせて頷き合う。

——さて、料理バイトのお時間です。

海で遊ぶ予定は、もちろん息抜きも兼ねている。けれど、最大の目的はメシマズたちをキッチンから遠ざけるためだ。

お孫さん師範代は、ご飯を炊けるそうなので白米の準備をお任せする。私は、野菜とお肉をザクザク切っていく。玉ねぎ、にんじん、じゃがいも、とり肉! 今日の晩ご飯はカレー!!

「炊飯器のタイマーをセットした」

「はい、お疲れさまです」

いったん自分の部屋に引き上げるといってお孫さん師範代の背中を見送る。

「まずは玉ねぎをフライパンに、っと」

カレーは家でもよく作るから、レシピを見ながらじゃなくても大丈夫だ。

玉ねぎを軽く炒めて、じゃがいも、にんじん、とり肉を順番に入れていく。玉ねぎがしんなりしてきたら、お水を加える。アクを取りつつ、具材が柔らかくなるまで煮込む。カチ、と火を止める。あとは、鍋のグツグツがおさまってから、カレールウを割り入れ……あれ？ カレールウがない??

「さっきスーパーで買ったはずなのに……」

間違つて冷蔵庫に入れてしまったのだろうかと中を見る。見当たらない。きよろきよろと辺りを見回すと、ダイニングルームのテーブルの上、調味料が詰まった箱の横に置いてあったお孫さん師範代は、カレールウがテーブルの上にあつたので、調味料が入った段ボール箱をここに置いた。

なるほど、お孫さん師範代が持つてきてくれた方の段ボール箱に入つたのか。わざわざ出しておいてくれるなんて、親切だなあ。まあ、声はかけてほしかったけど。

ルウが溶けたら、もう一度火をつけ、焦げつかないように混ぜながらしばらく煮込む。

「……う？」

なんか一瞬、鍋の中がピンク色に見えたような？ いちおうカレーをかき分けて確認したけれど、変なものは見えない。

「気のせいか」

小皿に少し取り分けて味見する。うん、普通にカレー！ ヨシ！！ あとは冷ましてから冷蔵庫にしまえば、晩ご飯の準備はおしまいだ。

ぐいーっと伸びをすると、視界の下半分で自分のおっぱいがゆっさり揺れた。もうスツカリ慣れた重量感。前世の感覚だと“ありえんくらいの巨乳”だけど、今世の感覚だと“普通サイズのおっぱい”だ。

揺れるおっぱいと言えば、さっきの“ヒロイン”ちゃんたちのおっぱい、ばるんばるんに揺れていた。あれ、前世の感覚だと“痛そう”なのだが、今世の感覚だと“普通”だ。

このエロゲみたいなことが起きる世界のおっぱい、千切れそうなくらい揺れてても、痛くないんだよねえ。なんていうか、そもそも肉体の構造が違う気がする。というのも

ブラをしてなくても、おっぱいがあんまり垂れないのだ。

このサイズで。

このサイズで、だ!!

——この世界のおっぱい強い。重力に勝ってる。

成長期で自分のおっぱいがモリモリ成長した時、鏡に映る自分の体を見て、しみじみ思ったもんね。



私は、前世の自分も今世の自分も、“人間”だと思っている。けれど、もしかしたら根本的にカテゴリーが違う生き物なのかもしれない。ゴリラみたいに腸の中でタンパク質を作ってくれる細菌がいるとか。なんかそういうレベルで違う気がしている。

……ぶつちやけ、正面から”おっぱいがあると分かるように”女性を描くと、自然と巨乳になりやす……げふんげふん……男女ともに巨乳の方が体を描くときにバランスを取りやす……げふんげふん。

——んん？　なんでこんなにおっぱいのことについて考えてるんだ??

いやまあ、わりといつものことか。このエロゲみたいなことが起きる世界について考えてると、頭の中がエッチな単語でいっぱいになるからなあ。

## 第二十話 突撃！ 隣の――

鍋のフタにキッチンペーパーを挟んで、誰かがフタを開けたら分かるようにしておく。むやみやたらに調味料（？）を足すタイプのメシマズがいるらしいので、その対策だ。まさか、漫画で読んだ知識自分が外出する際、ドアや引き出しに髪の毛を挟んでおいて、外出中に侵入者があったかどうか確認する方法。がメシマズ対策に應用できるとは思わなかった。

鍋を冷蔵庫にしまったところで、お孫さん師範代がキッチンへ戻ってきた。洗い物と片付けは任せてほしいと言われたので、場所を入れ替わる。

すれ違いざまに、師範代の胸が目に入る。見事な雄っぱいの巨乳だ。私は、男性の胸も揺れることを、師範代との稽古で知りました。

「……顔が赤いようだが、大丈夫か？」

「へ？」

そう声をかけられお孫さん師範代の胸から顔を上げる。たしかに、なんか体がポカポカする、気がする。手のひらで自分の顔に触れる。ちよつと火照っているかもしれない。

「コンロの前にはいたから、ですかねえ」

「熱中症の初期症状ということもある。水分と塩分をしつかり摂っておくように」

「押忍じゃなくて、はい」

冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出す。さつき入れたばかりなので、あんまり冷えていない。ゴクゴクと飲みながら、洗い物をするお孫さん師範代の後ろ姿をぼんやり眺める。

早朝の稽古では正面から向かい合っていることが多い。なので、師範代の後ろ姿はなんだか新鮮だ。あと、とてもエツチな感じがする。特に、背中からお尻にかけての筋肉が素晴らしくセクシーだ媚薬の効果が少し出ているのだが、普段から頭の中がわりとピンク色なので気がついていない。

「……どうかしたのか?」

お孫さん師範代は、振り返りもせずそう言った。不埒なことを考えていたので、思わずビクツツとしてしまう。なんで見ることが分かったんです? 後ろに目でもついているんです?!

「いや、あはは、何でもないです」

愛想笑いを浮かべながら、そそくさとキッチンを後にする。

自分の部屋に戻って荷解きしようつと。

ちなみに、水分と塩分を摂っても、顔の赤みは引かなかった。海から戻ってきたみんなも心配してくれた“ヒロイン”ちゃん三人が用意した媚薬入りカレールウのせいなのだが、メシマズなので料理を味見するという発想がなかった。普通に体調不良だと思っただけで心配していた。けど、体はめっちゃ元気なんだよねえ。むしろ調子が良いくらい。



合宿一日目の残りの予定は、おやつを食べて、勉強して、晩ご飯を食べる。すべて、予定通りにつつがなく進んだ。

晩ご飯を先回りして作っていたことに対して、料理したがるタイプのメシマズ“ヒロイン”ちゃんたちが怒るかな〜と思ってはいたけど、そんなこともなかった。三人とも、おいしそうにカレーを頬張っていた。眼鏡“主人公”くんが不思議そうにしているのが印象的だった。

今から思い返せば、フラグだったんだと思う。

夜半に寝苦しくて目が覚めた。冷房を入れても、パジャマを脱いでも、暑い。——熱い。体の奥がドロドロに溶けて、ぐつぐつ煮えているようだ。

「うっ……はぁ……」

吐く息すら熱く感じる。内にこもる熱を解放したくて身をよじる。シートが肌にすれる感覚すらもどかしい。パンツはもうぐじゅぐじゅだ。

ここまで来るとさすがに分かった。

——はいはい、媚薬ね媚薬七不思議について調べている途中で見つけた謎のレシピ。無口クール系“ヒロイン”ちゃんがそのレシピで作ったのが、カレーに使われた媚薬。部員たちは、『研究所』から持ち出されたレシピなのではと推測している。

体は煮えたつているのに、頭はわりと冷静だ。たぶん“訓練”のおかげだろう。ありがとう、一人称『僕』おじさん。次に“訓練”がある時がコワイです。

にしても、媚薬かく。エロゲにもけっこう出てくるけど、実際に摂取したのは初めてだなあ。安全性とか、どうなってるんだろう。まあ、犯人と思われる三人がカレーをモリモリ食べていたので致死性は無いと信じた。

そう。どうやったのかは分からないけれど、“ヒロイン”ちゃんたちはカレーに媚薬を盛った。たぶん、カレールウにカレールウの箱を、開け口ではなく、横の接着面から開封して中身を取り出した。トレイの分かりにくいところ穴をあけ、ルウに媚薬を埋め込んだ。あとは、元に戻して箱を糊付けすれば、媚薬入りカレールウの完成!

。午後から顔の赤みが引かなかったのもそれが原因だったんだと思う。

全員が食べるカレーに媚薬を盛るだなんて……まったく……まったくもって——

グツジョブ!!!

口元を緩ませながら、フラフラと立ち上がる。こんなチャンス、逃す手はない。向こうからキツカケを与えてくれるのなら、乗っかるしかあるまいて。

今ごろ、眼鏡“主人公”くんたちは“お楽しみ”の真っ最中だろう。どさくさに紛れて混ぜてもらえれば！ 私もセックスできるって寸法よ!! 発想が天才のそれ!!!!

………いや、でもなあ。

眼鏡“主人公”くんたちが関わっているヤバ『学園の七不思議』そうな事件が頭をよぎる。もし、一夜限りの関係ではなく、今後メイシンイベントも付き合う関係になったら……私も『研究所』とやらに行くことになるのでは??

い、行きたくない。とても行きたくない。

——ふと、キッチンで見た後ろ姿が思い浮かんだ。

そうだ、お孫さん師範代のところはどうかろう。

師範代もカレーを食べていたので、媚薬を摂取しているはずだ。普段の師範代なら、私が迫っても良識ある大人の対応をする。確実にする。

けれど、媚薬で性的興奮が高められている今なら?? いけるのでは?? 「からだか、あ

つくて……たすけてくださいっ」からの「薬で記憶がトンでいて何も覚えてないので無かったことに……」コンボが使えるのでは?????

いやいやいや、待て待て待て。

たとえコンボがキマっても、気まずいことこのうえないが?? 今後とも早朝の稽古で顔合わせるかもしれないのやで???

しかも、お孫さん師範代は、眼鏡”主人公”くんたちの”サブキャラ”っぽいので、ヤバそうな事件に関わるヤバい人な可能性もある。いやまあ、ヤバい人には思えないけど。

いや……しかし……でも……。頭の中でぐるぐると言葉が回る。けど……だつて……。考えすぎて、なんだか目も回つてきている。あ……も………なんかかんがえるのめんどくさくなつてきた!! からだがあついいもんだいはセックスしたいかしたくないかですよ!!!!!!!

セックスしたいです!!!!

いえええええええ!!!! いったれええええええええええ!!!!

えいやつとドアを引き開ける。目の前に筋肉の壁——もとい、お孫さん師範代が立っていた。右手にこぶしをつくつているので、ちょうどノックしようとしていたところだつたらしい。

「……………中和剤無口クール系〃ヒロイン〃ちゃんが媚薬を作った際、効能を中和する薬も作ったのだが、原料があまり確保できなかったため、中和剤は一本しか作れなかった。だ。飲むように」

「アツ、ハイ」

師範代は、栄養ドリンクサイズの瓶を渡すと、ドアを閉めた。歩き去る足音がドア越しに聞こえる。

「……………」

私は、中和剤を一息にあおると、布団にくるまって寝た。

べつに拗ねてない。

ここに来たのはバイトをするためであって、〃女主人公〃対策をするためじゃないことを思い出しただけだ。



## 第二十一話 目と目が合わない

いつもの稽古のクセで、朝早くに目が覚めてしまった。のどがカツサカサに渴いている。うわ、冷房つけっぱなしでキャミとパンツだけで寝てたのか。

「ああ、くく……げほっ」

起きてキッチン行くかあ。ついでに、朝ご飯の準備もはじめてしまおう。たぶん、眼鏡“主人公”くんと“ヒロイン”ちゃんたちはギリギリに起きるだろうし。

そういえば、昨日の無差別媚薬事件、お孫さん師範代と私に中和剤を用意してたってことは、合宿前から準備してたのかな？ なかなか計画的な犯行だなあ合宿一日目に仲直りして突発的に実行したので、計画性はまったくくない。媚薬は、無口クール系“ヒロイン”ちゃんか他の二人を出し抜くために持ってきていた。

……ふと思っただけど、4Pをこなす眼鏡“主人公”くん、体力も精力もヤバいな。いや、媚薬がスゴかったのかも？

「あれ？」

キッチンに行くと、炊飯器のタイマーがセットしてあった。たぶん、お孫さん師範代

がセットしてくれたんだろう。……だよな？ メシマズ三人娘じゃないよね??

ちよつと不安に思いつつ、冷蔵庫から食材を取り出す。今日の朝ご飯はハムエッグと納豆と玉ねぎのお味噌汁！ ちなみに、明日の朝ご飯も同じ!!



「すみませんでした——っ!」

「すまなかつた!」

「ごめんなさい」

「ごめんなさいあ〜〜っ!」

案の定、ギリギリの時間にダイニングルームへやってきた四人は、いつせいに頭を下げた。その後ろから、お孫さん師範代が顔を出す。どうやら、ギリギリに起きたのではなく、ギリギリまで叱られていたようだ。

「こいつらには、おれからもよく言つて聞かせましたんで!!」ヒロイン「ちゃん三人は、仲直りのキツカケになつてくれた『私』への好感度がかなり高く、昨晚の乱交に混ざつてもらう気満々だった。彼女たちなりのお礼も兼ねていたのだが、お孫さん師範代と眼鏡“主人公”くんから「自分が好きなものを他人も好きとは限らない」と説教されて反

省した。」

眼鏡「主人公」くんの謝罪を聞きながら、ずらっと並んだ四つのつむじを眺める。

——言いたい。

四人に、「ゆうべは おたのしみでしたね」って言いたい。けど、この世界でそのネタは通じないし、今のタイミングで言ったら単なるイヤミだ！ がまん!!

「謝ってくれたので許す！ でも、もう同じことしないでね？」

無難な落としどころを口にする。本音を言うと、今日の晩ご飯にも媚薬を盛ってほしい。私も乱痴気騒ぎに混ぜてほしい。口にも態度にも出さないけど。

ちよūdいタイミングでご飯が炊けた。陽気なメロデーがダイニングルームに流れる。パンと両手を叩いて、話を切り上げた。

「じゃあ、朝ご飯にしよっか」

あ、そうだ。炊飯器のフタを開ける前に確認せねば。

「あの、炊飯器のタイマーをセットしてくれたのって……」

「……自分だ」

やっぱりお孫さん師範代だった。よかった。

「……手は、しっかりと洗った……」

「えっ？ あ、はい」

まあ、料理をする前に手を洗うのは大事だよね？ でも、なんでいま報告した?? 不思議に思いながら、お孫さん師範代の顔を見上げる。

……あれ？　なんか、いつもの師範代と違う感じが??　……でも、何がどう違うのか分からんな。



さて、気を取り直して朝ご飯だ。

おっとり不思議系“ヒロイン”ちゃん以外の面々で、お皿をテーブルの上に並べていく。彼女のウツカリは、その、世界レベルだそうなので。朝ご飯をひっくり返されないよう、テーブルに着いてもらっている。

私はご飯を盛る担当だ。無口クール系“ヒロイン”ちゃんからお茶碗を受け取り、ご飯を少なめによそう。

「( )のくら( )っ」

「うん」

手渡すと、小さな声で「ありがとう」とお礼を言われた。

「——ねえ」

「ん?」

「からだ、大丈夫?」

無口クール系〃ヒロイン〃ちゃんの顔を見る。ちよつと目が泳いでいる。たしか、媚薬も中和剤も、彼女が作ったんだっけ? 薬の副作用とかを気にしているのかな?

「うん、大丈夫だよ? 中和剤がちゃんと効いたみたい」

「えっ?」

無口クール系〃ヒロイン〃ちゃんは驚きに目を見開いている。

えっ、なに? 何に驚いてるの?? 中和剤に効き目があったこと?? あれって、そんなあやしい薬だったの???

「……………先生に、もう一回あやまる」

へ? この話の流れで、なんでお孫さん師範代が出てきた? 理由を尋ねる前に、無口クール系〃ヒロイン〃ちゃんは師範代の方へ走って行ってしまった。

ペコリと頭を下げる無口クール系〃ヒロイン〃ちゃん。顔色一つ変えず、何かを言うお孫さん師範代。その様子を眺めていると、不意に師範代と目が合った。目を逸らされた媚薬の効果である性的興奮を鎮めるために、ほぼ一晩中、自慰していた。基本的に〃無〃だったのだが、疲れて油断した瞬間に、弟子のあられもない姿を思い出してしまった。しかも思い出したタイミングでフィニッシュしてしまい、死にたくなるほどの罪悪

感に苛まれている。

もう一度言おう、お孫さん師範代に、目を逸らされた。えつ、うそでしょ……あの師範代が?! 目を逸らした!?!?

——ハッ、さつき感じた違和感の正体、これだ!

お孫さん師範代と、目が合わない!!

えつ、なんでだ? 私、何かやらかしたつけ?? たぶん何かしたんだろうなあ!!

お孫さん師範代と私だったら、どう考えてもやらかすの私だもんなあ!! でも思い当たるふしがまったくない……! 昨晚、お孫さん師範代から中和剤を渡されたとき、キヤミとパンツだけしか着てなかったことに気づいていない。

## 第二十二話 そのための私

無差別娯楽事件のペナルティとして、二日目に予定されていた午前中の息抜きは取りやめとなった。四人は大人しく勉強に勤しみ、レポートもかなり進んだ——のだけれども。

息抜きが無かった反動か、メシマズ“ヒロイン”ちゃん三人が手料理を振舞おうとやたらめつたら張りきった。

彼女たちの熱意にほだされて、昼ご飯を手伝ってもらうことにしたのだ、が！ ものの数分でレフエリー私のストツプマジ泣きが入った。お昼？ お昼はね、店屋物を食べたよ。おいしかった。

四人が午後の勉強に励んでいる間、お孫さん師範代と私でキッチンの後片付けをしました。師範代とは相変わらず目が合いません。なんでや。

そんなこんなで一日が過ぎ、今は眼鏡“主人公”くんと二人、晩ご飯の準備をしている。

キッチンへ入ろうとする“ヒロイン”ちゃん三人と、それを阻止するお孫さん師範代との攻防がBGMだ。……なんで爆発音が聞こえるんですかねえ。

「なんかもう、昨日も今日も色々と迷惑かけてごめんな……」

「いいよいよよ、みんなでワイワイできて楽しかったし」

恐縮する眼鏡「主人公」くんは笑って返す。昼ご飯大惨事事件ではついついショックで泣いてしまったけど、実はけっこうエンジョイしていた。あのワチャワチャした感じ、ものすごくエロゲの日常ギャグパートっぽかったの。なんかもう懐かしかったよね。

「話は変わるんだけど、さ。その、きみの部屋って、先生の隣の部屋だったよな？」

「ん？ うん、そうだよ」

間取りで言うと、二人部屋AとBが隣り合っていて、三人部屋CとDは少し離れたところにある。

「いや、その……さらに迷惑をかけることになるんだけど、二つ頼みがあつて——」

「……え？」

じゆうじゆうと音を立てるフライパンから顔を上げて、眼鏡「主人公」くんを見る。彼は、キャベツを千切りにする手を止めて、私を見ていた。ちなみに、今日の晩ご飯は豚肉の生姜焼きだ。

「頼めるか？」

「いやまあ、構わない、けど……」



「理由は、聞かないでくれると助かる」

「う、うん。……わかった」

「——ありがとう」

眼鏡 主人公 くんはホツとしたように微笑むと、手元に目線を戻した。トントんと、キャベツを切る軽快な音がする。私も、フライパンに意識を戻して豚肉をひっくり返した。

『頼みの一つは、今日の夜、先生が部屋に戻って寝たかどうかの確認。これは、たぶん難しいと思うから、できたらでいい』

『もう一つは……朝になって、おれたちがコテージにいなかったら……先生に伝えて、あと、警察にも通報してほしい』

フライパンの柄をグツと握る。

——眼鏡 主人公 くんには言えないが、実は、ほぼほぼ同じことをお孫さん師範代から頼まれているんだよね!! 午後、キッチンの後片付けをしている時に!!!

『あの四人が就寝するまで、同じ部屋にいて見張ってほしい』

『明日の朝、自分がコテージにいない場合は、四人にその旨を伝えて警察に通報するように』

みんな、今日の夜に『研究所』へ行くんですね!! わかります!!!

行くのかあ、『研究所』。もう『研究所』っていう響きがヤバイもん。しかも、お孫さん師範代も眼鏡。主人公。くんも、帰れない可能性を考慮してるってなに?? こわすぎるが??

それでもなお、行くのを決めてるってことは……止めても無駄なんだろうなあ。そこはもう仕方ないとして。……これ、お孫さん師範代と。主人公。くんたちの出発時間がカチあつたら、大変なことになるな？

いやまあ、みんなをカチ合わせて『研究所』行きを無理やり止めてもいいんだけど……それは悪手だと、エロゲーマーとしての私の勘が囁く。ロクなことにならない気がする。なんやかんやで日本が滅亡する可能性が高いです。

しかも、眼鏡。主人公。くんたちだけで『研究所』へ行っても、お孫さん師範代だけで『研究所』へ行っても、バッドエンド直行な気がする。たぶん、二組が『研究所』内に揃っているのがフラグだ。

これももしエロゲなら、という頭が湧いた根拠。けれど、ここはエロゲみたいなことが起きる世界。自分が今まで見てきたもの、感じてきたことを信じよう。

となると――

お孫さん師範代と。主人公。くんたちには、タイミングがカチ合うことなく出発してもらわなければならない。

ハッ、なるほど！ 私がここにいる理由、それかあ~~~~っ!!お孫さん師範代は、料理手伝い兼『七不思議研究部』の引き留め要員として雇っています。イベントの進行をスムーズにするためではありません。

「みんなー、晩ご飯できたよーっ！」

なんとなくスッキリした気持ちで、豚肉の生姜焼きを配膳する。やることは分かった。あとはやるだけだ!!

## 第二十三話 ミツシヨン ポツシブル

——お孫さん師範代と”主人公”くんたちが、出発時にカチ合うことなく『研究所』へ向かう。

これが、今日の夜に私がなすべきミツシヨンになる。まあ、インポツシブルというほどではないのでサクサク行こう。

もちろん、お孫さん師範代と”主人公”くんたち、どっちからも頼みごとをされるつてのはナイショだ。どっちにも打ち明けるつもりはない。……前世でエロゲをプレイしてきた勤が理由です、なんて言えないし。

頼みごとの理由について（私が一方的に知ってるだけで）聞かされてないから、黙ってるのはお互いさまということで。

寝る準備を済ませて、眼鏡”主人公”くんの部屋にお邪魔する。”ヒロイン”ちゃん三人もすでに來ていた。

表向きは、四人でカードゲームをするため。その実は、眼鏡”主人公”くんたちの頼みである『お孫さん師範代が寝たのを確認する』ための打ち合わせだ。

「じゃあ、22時過ぎで解散して、おれらはいったん寝たフリする感じで。先生が寝たの

が確認できたら連絡してくれな」

眼鏡「主人公」くんがこれまでの打ち合わせの内容をまとめてくれた。この寝たフリで、師範代の頼みである『就寝まで見張る』も達成できるって寸法だ。いえーい、一石二鳥。

「アナタは念のためだから。確認できなくても一時間後には出発する」

無口クール系「ヒロイン」ちゃんが、淡々とそう言った。突き放すような冷たい言葉に目を丸くする。眼鏡「主人公」くんが、無口クール系「ヒロイン」ちゃんの肩をツンツンとつつくと、ハツとした後、彼女はモゴモゴと口ごもる。

「……だから、気負わなくていい。無理はよくない」

かつ、かわいいいゝゝゝ！ いやもう満面の笑みですよ、これは!! ホッコリしちゃった。

「うん、了解。心配してくれてありがとう」

実のところ、確認に関しては問題ない。このコテージ、壁が薄めだし。それに、寝たことを確認して連絡するわけじゃないしね。

「——ムムツ！ 打ち合わせは終わりだな！ 終わったな!」

待ってましたと言わんばかりに中二病ロリ「ヒロイン」ちゃんが立ち上がって声を張った。隣にいるおっとり不思議系「ヒロイン」ちゃんの腕には、これでもかかとカード

ゲームの箱が抱えられている。二人とも、お目目がキラッキラだ。

「ヨーシ！ キサマら、刻限まで遊興にふけるぞ!!」

「わあゝい、あつそぼおゝ!」

無口クール系“ヒロイン”ちゃんも懐からスツとカードゲームの箱を取り出す。眼鏡“主人公”くんは、頭を抱えていた。

緊張でガチガチになつてるよりいいと思うよ？



22時を過ぎたあたりでゲーム大会おつとり不思議系“ヒロイン”ちゃんがめつつちやくちや強かった。次いで、無口クール系“ヒロイン”ちゃんと眼鏡“主人公”くんがいい勝負をしていた。その後、私。中二病ロリ“ヒロイン”ちゃんは……ムラツ気がスゴい。勝つのも負けるのも派手。を切り上げて解散し、各々の部屋へ引き上げる。帰り道の途中、お孫さん師範代の部屋に立ち寄って、みんなもう寝ることを伝えた。やっぱり目は合わなかった。

自分の部屋に戻ってドアを閉める。室内の電気を消してから、ドアの前に座り込んで耳をすませる。このコテージ、ドアの前を通る人の足音が聞こえるんだよね昨日、お孫

さん師範代が中和剤を私に来てくれた時、ドアを閉じた後も廊下を歩く音が聞こえていた。

——15分くらい経つただろうか。

何かかすかな音が聞こえた。集中していなければ聞き逃しそうなくらい小さな音だ。規則正しいその音は、ドアの前を通り過ぎて行つた。たぶん、お孫さん師範代が物音を立てないように歩いた音だろう。

——そのまま、さらに10分待つ。

さて。

そつとドアを開いて廊下に出る。目的は隣の二人部屋A——お孫さん師範代の部屋だ。

コテージの各部屋は普通の室内ドアになっている。中からは鍵をかけられるけれど、外からは鍵をかけられないタイプ10円玉で外側から開けられるタイプの鍵付きドア。戸建てを丸々レンタルするコテージなので、個室に鍵が必要ないとの判断だろう。

なので、部屋の中に誰もいなければ——こんな風にドアが開く。ざつと部屋の中を見回す。人の気配はない。

お孫さん師範代の外出、確認よし！

そそくさと自分の部屋に引き返し、眼鏡、主人公、くんに連絡を入れる。これで任務

完了だ。あとは、なんかいい感じにことが運ぶことを祈っておこう。

「……………」

パジャマを脱いで、普通の服に着替える。ベッドの脇にスニーカーを揃えて、枕元に財布やスマホなどが入ったショルダーバッグを置く。

いざとなったら即座に逃げる、準備よし！

なんてったって『研究所』だし。なんらかのハザード的なことになる想定はしておく。

ももぞとベッドに潜り込む。起きたら、みんなが無事に戻っていますように。何ごともなく朝を迎えられますように。そんなことを祈りながら眠りに落ちた。



## 挿話③ 正しさばかりでは生きられない

——体が痺れたように動かない。早く、針を、抜かなければ……。

頭に震がががかかっていく。薄ぼやけた思考に、何かが染み込む。 “生きるために必要なもの あたたかさ” が奪われていく。体が、いや、魂が芯から凍えていくようだ。

「あは、あははははは！ やった、やったわ……!!」

髪の毛の長い女の甲高い哄笑が聞こえる。ひどく耳障りだと思ふ感情が、聞いていて快いという感情に塗りつぶされる。

「先生!？」

「そんな、おれたちをかばって……!」

少女と少年の悲痛な叫びが聞こえる。無事で良かったという安堵が、なぜ生きているのだという憎悪に塗りつぶされる。

「そうでしょうね。そうするしかないものね。無辜の一般市民を、犠牲になんてできないわよねえ? その判断が、全員を死に至らしめるとしても! 切り捨てられないわよねえ!! あははははは!!」

笑い声に導かれるように、足を踏み出す。あちらへ、行かなければ。

「せ、せんせえー、まって。いつちやダメだよおうつ」

引き留めようと腕を引く華奢な手を、振り払う。わずらわしいあたたかさだ。人に、物に、空気に、あたたかさが満ち満ちていた。そんなおぞましい光景に身震いする。

「——この世界は正しくない」

自分の手で、正さなければ。

「危ないっ!」

髪の高い女が、少女を抱えて地を転がった。遅い。無防備な背中を蹴り——やめろ! なぜか、寸前で勢いを殺してしまった。それでも、女と少女の体は軽々と吹き飛び、壁に衝突する。

「がっ」

「きやあ!」

少年が吹き飛んでいった三人の名前を呼ぶ。

「さすがお巡りさんねえ。〃死〃に感染して縋りつくものが『正義』だなんて。フフ、正義の味方——いいえ、これからは正義わたくしの奴隷、かしら」

髪の高い女は隣に立つと、体をすりつけるようにしてしなだれかかってくる。その冷たさが身になじんでいく。

「さあ、この場にいる生きている人間を殺さない! そして、あの世とこの世の境界を

溶かしつくすのよ!!」

「ごほっ、げほっ……バカなこと言わないで／そうよ、まだ間に合うもの……!」

髪の毛の短い女の口から、女の声とは別に、少女の声が聞こえる。

「いまだ!」

「きやあ!?!」

物陰から飛び出してきた少年と少女が、髪の毛の長い女もろとも自分を突きとばした。とつさに、女を助けなければいけないと思ひ、彼女の体を抱える。両手が、ふさがった。

「先生、お薬の時間」

倒れた先に、もう一人の少女がいた。口内にピンク色の液体が流し込まれる。

——あつい。

熱い熱い! 喉が焼けてしまう!! 液体を吐き出そうとするが、髪の毛の短い女と少年に抑え込まれて飲み込んでしまった。

「……あの薬は、普通の人間が飲むと媚薬に近い効能がある」

熱さから逃れようと、のたうち回る自分の耳に、少女の声が響く。

「でも、それは単なる副作用／あの薬の主作用は——」

「死」を振り払うほどの「生」の衝動を引き出すこと!」

喉をかきむしる。

熱い、熱い熱いあつい……!!

「先生!」戻ってきてくれ!!」

髪の長い女は、顔を歪ませて笑う。髪を振り乱しながら絶叫した。

「無駄よ! たとえ〃生〃の衝動を引き出しても、〃意志〃が支えなければ意味が無い!! その薬があることは把握していたもの! さらに改良を施した〃死〃は、相手の〃意志〃を奪う!!」

「いいえ、いいえいいえ! あの方の〃意志〃には残っています! ひとかけらでも〃意志〃が残っているのならば——必ず!!」

髪の短い女が少女の声で叫ぶ。

「彼の心に残る〃最も強い意志〃を呼び覚ますことができたら——!」

「先生——!」  
少年と少女たちの声が聞こえる。どうにかこの熱さから逃れようと立ち上がる。しかし、身を焦がすほどの熱は、すでに全身に回っていた。

この世界は正しくない。

己こそが正しい。

過ちは正さなければ。

——弟子の下着姿で射精した人間が、どの口で正しさを語る。

「ぐはっ」

罪悪感——直近で感じた”最も強い意志”。正しさから最も近く、最も遠い。悪を成したという”意志”。あまりに強烈な衝撃を受け、膝から崩れ落ちた。

「先生が急に倒れたんだけど?!」

「あれー!?!／そんなどうして?!」

「……ぼ、ボクの調査に間違いはない……はず」

あれは、ほんの偶然で。たまたま思い出した時に射精してしまっただけで。決して、彼女自身に劣情を抱いているわけではない。——いや、そんなものただの言い訳だ。弟子で抜いてしまったという苦い事実がそこにある。

「……大丈夫だ」

その苦さが、頭の霞みを打ち払ってくれた。拳を握り締めて立ち上がる。

「終わりにしよう」

弟子に、謝罪は出来ない。してはいけない。自分の体が性的に消費された事実を伝え

なければ、謝罪にならないからだ。それは、若い彼女の心をどれだけ傷つけることだろうもし、弟子に伝えたら。まったく気にしないうえに（お孫さん師範代つてその顔でちゃんと性欲あるんですか!? めっちゃ属性盛ってくる〜!）と興奮する。謝ることは大事だが、時として事実是人を傷つける。

償うことのできない、許されることもない、自分の罪。

——この罪は、墓まで持って行こう。

そう固く心に誓った。

## 第二十四話 なにごともない朝

明け方、遠くから聞こえるざわめきにふんわりと意識が浮上した。人の声、人の気配。しばらく耳を傾けていたけれど、差し迫った様子は感じられない。よかったと安堵しつつ、もぞもぞと布団にくるまる。

もう一回寝よう。

事情を何も知らないはずの私が出迎えても、みんなが困惑するだけだろうし。



「うおっ」

ビックリしすぎて小さく悲鳴をあげてしまった。

あの後、いつも通りの時間に目が覚めたので、朝ご飯の準備をするためキッチンへ来たのだけど……ダイニングルームの隣、リビングルームのソファでお孫さん師範代が寝ていた。

えっ、なんで？

疑問に思いつつも、部屋から毛布を持ってきて、お孫さん師範代の体にかける。師範代はピクリともしない二十分くらい前まで、電話での事情聴取に応じていた。学生組は、後日改めて事情聴取を行うことになっている。気配に敏いというか感覚が鋭い師範代が、こんなに近づいても起きないとは。よく見ると、あちこちに怪我しているし。よっぽど疲れてるんだなあ。

お孫さん師範代でこれなのだから、眼鏡〃主人公〃くんたちも相当に疲れていることだろう。朝ご飯の準備はゆっくりにした方がいいかもしれない。できるだけあつたかいご飯を食べてほしいし。

といつても、今日の朝食もハムエッグと玉ねぎのみそ汁だ。やることは多くない。お米を研いだり、玉ねぎを切ったり。のんびりと料理をしていると、後ろで物音がした。振り返ると、眼鏡〃主人公〃くんがキッチンの入口に立っていた。

「おはよう、うおおっ!」

な、泣いてる……!?

えっ、えーっ?! なんで? どうして?? ものすごくオロオロしていると、眼鏡〃主人公〃くんは、涙をぬぐって顔をあげた。

「……ごめん。なんか、ホツとして……」

「そ、そっか」



その言葉で、昨日ものすごく大変なことがあったらしいと察する。気になったので「聞いていい？」と確認したけれど、「聞かない方がいい」と言われたので、話を切り上げた。

直後に、廊下の方からにぎやかな足音が聞こえてくる。「ヒロイン」ちゃん三人がダイニングルームに飛び込んできた。私をキツチンに見つけると、ぎゅううとしがみついで泣き出してしまった。

「おおおう……？」

眼鏡“主人公”くんならともかく。どうして私が揉みくちやになっっているんだろう普通に料理している『私』を見て、生きて帰ってくるのができたのを実感できたから。『私』が『研究所』にも『学園の七不思議』にも関係ない人物だからこそ、ようやく安心できた。と思いつながら、よしよしと三人の背中を撫でる。

さすがに騒々しかったのか、お孫さん師範代がむくりと起き上がる。四人は、お孫さん師範代がリビングルームで寝てたに気づいていなかったのか、飛び上がって驚いていた。その様子がおかしくて、思わず笑ってしまった。

「おはようございます」

「……おはよう」

あらま、ちゃんと目が合った。



「あのく、こちらの方については、聞いていいんですかね……?」

七人そろって、ダイニングテーブルで朝ご飯を食べている。

何回数えても七人いる。一人増えている。ウルフカットのキレイ系お姉さんが、テーブルについてモリモリご飯を食べている。……どなたさま?

お姉さんの顔を認識できる。つまり、〝モブ化現象〟が起きていないので、〝ヒロイン〟か〝サブキャラ〟なのだろうことは分かる。

眼鏡〝主人公〟くんは、困った顔で返事に窮している。

「説明がむずかしいんだよねあ〜」

「あら♡ あたしたちとキミの仲をみんなに説明してくれるの?」

キレイ系お姉さんは、からかうように眼鏡〝主人公〟くんを声をかけた。〝ヒロイン〟ちゃん三人がムツとした顔で眼鏡〝主人公〟くんをにらむ。朝から空気が重〜い。

「ちよつ、ちよつと!」

「ま、あれは救急処置みたいなものだから。ノーカンで許したげる」

焦る眼鏡〝主人公〟くんと、ケラケラ笑うキレイ系お姉さん。なるほど。なるほどな

るほど。こちらのお姉さん『主人公』の筆おろしを行う“サブキャラ”だな!?

童貞主人公の共通ルートで、筆下ろしをするサブキャラのお姉さん。もしくは、訳あり主人公の過去回想で、初めての相手として出てくるサブキャラのお姉さん。

個別ルートに入るまでヒロインとのエロがない系のエロゲでよく見かけたなあ。

プレイ時間的にそろそろエロを挟みたいけど、主人公とヒロインがエッチできるようになるのはまだまだ先だ〜! という時に輝くサブキャラだね。

ちなみに、サブキャラなのでヒロイン攻略対象ではない。まあ、ファンディスクメーカーがファンサービスとして製作するディスク。アフターストーリーやIFストーリーなど、ゲームをクリアしたプレイヤーが楽しめる内容となっている。個別ルートしかない作品では、設定上ありえないハーレムシナリオが収録されたりもする。で攻略できるようなになったりもするけど

だから、“安全”かつ“後腐れなく”処女でなくなる方法の一つとして挙げていたんだけど……そういうポジションに狙ってなるなんて、難易度が高すぎて。ちよつと出来そうにないからなあ。

などということを考えている間に、キレイ系“サブキャラ”お姉さんの正体についてはうやむやになった。たぶん知らない方がいいってことなんだろう。

——まあ、そんなこんなで、『学園七不思議研究部』は、二泊三日の合宿を終えた。

いや〜、何ごともなく合宿が終わってよかったね！ うん！！

なんか色々あつたんやろなあということには察しつつも、それぞれの事情に踏み込まなかつたおかげで、（私の視点だけで見れば）何ごともなかつた。

バイト代も弾んでもらえたし、ホクホクである。

心機一転、明後日から『モブ化現象』を起こすイケメン』探しを再開しよう。“女主人公”対策、がんばるぞー！

## 第二十五話 性転換がわりと身近な世界

Trans Sexual Fiction——性転換を取り扱った創作で、TSやTSFという略称で呼ばれているひとくちに『性別が変わる』と言つても、“どうやってTSしたか”で話の方向性がかなり変わる。変身、入替、憑依、転生、など。

。男性が（男性の精神のまま）女性の肉体になってしまふという話が多いもちろん、女性が（女性の精神のまま）男性になる話もある。ただ、（作者の目にする範囲では）男↓女の創作の方が多く感じる。

TSという略称は出てこなくても、『何らかの原因でキャラクターの肉体の性別が変わってしまう』という話の展開は、マンガ、アニメ、小説、ゲームなど色んな創作で見かけると思う。

なお、男性向けエロゲに限ってTSを語るならば、TSのみをメインとしたエロゲはそんなに数が多くないけれど、エッチなイベントの一つとしてTSが起きることはけっこうある。そんな感じだ。

というわけ。

この男性向けエロゲみたいなのが起きる世界でも『何らかの原因で肉体の性別が変わってしまう』ことがままある。この世界で一般的に広く知られている性転換の原因は“TS病”——何の前触れもなく肉体の性別が変わってしまうという病気だ。何千人かに一人の割合で発症するらしい。

そこその割合でTS病の患者さんがいるので、性別にまつわることに関して社会はかなり寛容だ。心の性別と体の性別のどちらを選んでもいいし、戸籍の性別を変えの手続きもけっこう簡単と聞く心の性別を選んだ場合は、備考に体の性別を付記することが多い。これは、医療的な理由によるもの。

ただまあ、『薬を飲んだら性別が変わった!』とか『呪われて性別が変わった!』とか『事故に巻き込まれて性別が変わった!』とかいう噂がネットに溢れているので、TS病以外での性転換の事例もたくさんあるんやろなあと思う。つまるどころ、だ。

性転換する人物は男女問わずそれなりにいる。ただ、私は『後腐れなく処女でなくなる』という目的を達成するため、『性転換して“ヒロイン”になるイケメン』を探していた。これがまあ、大変だった。

何が言いたいかというと。

とうとう『“モブ化現象”を起こすイケメン』——将来的にTSして“ヒロイン”になるイケメンを見つけましたく〜く〜！

秋空に向かって万歳三唱を唱えたい気分だ。

しかも、このTS予定イケメンくん、いつ見ても違うカノジヨがおり、来るもの拒ま  
ずだけれども長続きしないという！ 顔も性格もいいのに不思議だねなんて噂されて  
るのだ!! なんとというウルトラ好条件!!

サツと付き合って、ちやつちやつとセックスして、パツと別れる！

わはは、勝ったな……！

## 第二十六話 どころなく似ている

——さて、どうやってお付き合いまで持って行こう。

そんな当たり前のことに頭をひねる。

昨日は“モブ化現象”の有無を確認しただけだったからなあ。TS予定イケメンくんの周りで“モブ化現象”が起きてるのを見て、テンション上がりすぎて何もせずに戻ってきてしまった。ウツカリ。

とりあえず、今日もTS予定イケメンくんの様子を見に行くことにした。やることはストーカーそのものだ。放課後、急いでTS予定イケメンくんが通う学園へ向かう。校門の周りを見渡せるファストフード店に陣取り、TS予定イケメンくんが出てくるのを待つ——

待っていたのだけれども。

——当の本人が近くの席でド修羅場を繰り広げていらつしやる。

ファストフード店のボックス席スペース。そのいちばん奥まったところに私は陣取っている。私の斜め前の席に、男の子と女の子が向かい合って座っている。

私からは、男の子——TS予定イケメンくんの顔しか見えない。彼は平然とした顔を



しているが、ボックス席まわりは気まずい空気ではいっばいだ。だって、女の子のすすり泣く声が聞こえてくるんだもの。

「別れる」

女の子の震える声。ざわめく店内で、そのひと言はハッキリと聞こえた。

「うん、わかった」

TS予定イケメンくんの声に動揺は無い。ちらりと彼の顔を見る。えっ別れ話を切り出されてそんな顔できる?? と、思うくらい落ち着いていた。

「どうしてっ」

女の子はかすれた声を絞り出す。そこには、怒りと悲しみが入り混じっていた。別れと言ったのは女の子の方なのに、まるで彼女が振られているみたいだった。「どうして」の後に続くのは「引きとめてくれないの?」なのかもしれない。

「……ウソ、だったの? ぜんぶ……」

「君に嘘をついたことは無いよ」

まるで、別の誰かに嘘をついたような言い方。

「くっつ!」

あつと思つた瞬間には終わっていた。女の子が勢いよく立ち上がり、手を振りかぶる。TS予定イケメンくんはそんな女の子の姿をじつと見ていた。ばちん、とものすこ

く痛そうな音がした。

女の子は、荷物を抱えると走ってお店から出ていった。すれ違いざまに彼女の横顔を見たけど、“モブ化現象”のせいで私には顔が認識できなかつた。視線をTS予定イケメンくんに戻す。バッチリ目が合った。

ひえ。

——TS予定イケメンくんの鼻から、血が垂れている。

目が合ったことよりも、そっちにビックリしてしまった。思わず立ち上がる。

「は、鼻血でてますよ!?!」

持っててよかつたティッシュとハンカチ!



「ありがとう、助かったよ」

「いえいえ」

鼻血の止め方って、昔は上を向くように言われてたけど、今は俯くのがいいって言われている。上を向くと口や喉に血が流れちゃうからダメなんだそうなの。

なので、TS予定イケメンくんも俯いてじっとしている。鼻の付け根をつまみながら

鼻の下にティッシュをあてて、血が止まるのを待つ。

柔らかなような前髪が、TS予定イケメンくんの顔に影を落とす。親しみやすい優しいような面差しは、腫れて赤くなっている。めっちゃスナップ効いたもんなあ、あの女の子のビンタ。

「——君さ」

「うえっ、はい!!」

急に話しかけられて変な声が出てしまった。

「昨日もここにいたよね」

も、目撃されてらっしやるゝゝゝっ!

でも、言われてみればたしかに、『ファストフード店から校門が見える』ということは『校門からもファストフード店が見える』というわけで。

動揺を隠せない。イヤな汗が背中を流れる。挙動不審が止まらない。TS予定イケメンくんは俯いたままだ。彼が、どんな顔をしているか分からない。ただ、優しい声で話を続ける。

「目立ってたよ、この近くで見たことない制服だったから」

だって! 学校終わってすぐ行かないと間に合わないんだもん!! 着替える余裕とか無いんだもん!!!

T S 予定イケメンくんが顔を上げた。

目が合う。

——私何か目的があるに似ている目だ。

するりと言葉が出た。

「カレシになつてください」

「いいよ」

こうして、私はT S 予定イケメンくんと恋人になつた。

## 第二十七話 カレシとカノジョ

明日、放課後にTS予定イケメンさんと待ち合わせして、制服デートをすることになった。気がついたらそうなっていた。TS予定イケメンくん、言いくるめ力が高い。

◆  
そんなこんなで翌日。

私とTS予定イケメンくんは、おしやべりしながら繁華街をブラブラと歩いていた。シヨウウインドウに並んで歩く二人が映る。端から見たら、まあカップルに見える、のか？ もうちょっと近くを歩いた方が恋人っぽい？ ……わからない……わたしはふんいきでコイビトをしている。

——秋深き、カレシカノジョとは何をする人ぞ。

前世でも今世でも恋愛と縁の薄かった私には、普通に分からない。前世うんぬんの部分は省いて、素直にそう伝える。TS予定イケメンくんはきよとんと目を丸くした。

あ、しまった。こっちから「カレシになつてください」って言ったのに「カレシと何

すればいいのか分からない」って、かなりおかしい話だ。

もー！ 自分はワケアリですって言うてるようなもんじゃん!! うかつがすぎるな

!!? 精神年齢（ピーツ）歳の余裕はどこにいった?!?!? ぬあくあく!! はずかしい!!!

はいはいはいはい、そうですね！ 前世も今世もあわせて初カレシでテンパっておりますとも!! すぐに別れる予定だけどね!!!

おたおたしている私に気を悪くすることなく、TS予定イケメンくんはゆつくりと声をかけてくれた。

「ごういこうことしたいとか、ある?」

もんのすつごく気を遣われているう〜う〜!

さくつとセックスしたいですねえ! というのが本音。だけど、言わない。

取り巻きハーレム先輩の勃起不全を知ってから、ネットでいろいろ調べた。そして知った。男性の勃つ・勃たないは、かなり繊細な問題だと。多種多様な原因特に心因性は原因がさまざま。緊張、焦り、不安、過労、ストレス、トラウマなどなど。で、男性は勃たなくなる。それは困る。

というわけで、初手からガツガツするのはよろしくない。

まずはTS予定イケメンくんについて知ることから始めよう。そして段階を踏んで関係を進展させる。具体的に言うときス、<sup>A</sup>ペッティング、セックス<sup>C</sup>。1980年代に生

まれた、恋愛の進行度を表す言葉だ。分かりやすくいいよね。

……ただ、出会って翌日でキスもがつつきすぎな気がする。

「手をつなぐ、とか……」

ビビってない。私は決してビビってなどいない。ちゅーぐらい、一人称『僕』おじさんとしたし。へっちゃらだし。……あの“訓練”を、キスにカウントしていいのかわからないけど。

「(こんな感じ?)」

TS 予定イケメンくんの手に指が触れたと思った直後。するりと手をつないでいた。手のひらがじんわりとあつたかい。誰かと手をつなぐなんて、子どもの頃ぶりです——

………ん?

んんんんんっ!?

えっ、なっ、ええええっ!! なっ、なにが、いま、なにが!?!? なん!!!

愕然とする。手をつなぐという動作だけで、彼我の戦力差は明白だ。瞬間移動で後ろに回り込まれる敵キャラの気持ちがあつてしまった。

強すぎる……!! 勝てない……!!

いや待て。落ち着け。別に勝たなくていいから。そういう勝負じゃないから。恋人として進展があつたのはいいいことだから。半歩ほど、二人の距離が近くなってるし。う

ん。

「こっちの方がよかったかな？」

さりげない動きで、手のつなぎ方が変わる。指と指を絡めるようにお互いの手を握る。二人の距離が、さらに縮まる。

——いわゆる恋人つなぎ。

「ひえ」

けつきよく私は、TS予定イケメンくんの圧倒的なカレシちから力によって蹂躪されたのだった。

ぐずぐずに溶かされていく頭の片隅に、顔の分からない女の子の横顔が浮かぶ。きっと、元カノちゃんともこんな感じだったのだろう。

TS予定イケメンくんが、恋人と長続きしない理由、か——

……まあ、長続きしないっていうのは、私にとってメリットだし、いつか。



## 第二十八話 パーフェクトカレシサマ (?)

二週間に一回くらいの頻度でデートを重ねる。流行りのスイーツ店に並んだり、水族館へ行ったり、映画館へ行ったり。まるで絵に描いたような学生デートだ。少女漫画を讀んでいるようで、年甲斐もなくドキドキしてしまう。

学生だから、あんまりお金のかかったご飯や遊びは無理だ。けれど、TS予定イケメンくんは話が上手いのでいっしょにいてまったく飽きない。特に、彼の親友くんトークがめっちゃくちや面白い。

そもそもその発端は、親友くんのご両親。彼らはワケアリのお仕事をしていたらしく、駆け落ち同然で結ばれたんだそう。しかし、最近になって、それぞれの元上司が部下を送り込んできた。毎日がてんやわんやでしっちゃんかめっちゃかになんだとか親友“主人公”くんの両親は元勇者と元魔王。二人は最終決戦で次元の狭間へ飛び込み、殺し合いの果てに日本にたどりつき、結婚した。勇者と魔王の血を併せ持つ親友“主人公”くんのもとへ、創造神と破壊神が天使と悪魔を送り込んできて大変な目に遭っているという状況。

——そうだね！ 親友くん、確実に“主人公”だね!! しかもイベントが現在進行形

で起きてるタイプ!!!

手をつないで公園をブラブラお散歩しながら、親友“主人公”くんトークで盛り上がる。昨日も部下さんたち二人がハッスルして大変なことになってたらしい。

は〜〜！ 直接的に危害が及ばない状態で聞くエロゲーイベントめちやくちや楽しい  
〜!!

近くのカフェでお茶しようかと話している時に、TS予定イケメンくんのスマホが鳴った。TS予定イケメンくんは、画面に表示される名前を確認する。

「ちよつと出るね」と言つて通話ボタンを押すと、すぐに耳を離れた。

爆発音。爆発音。ビーム音。男の絶叫。

スピーカーモードにしてないのに、あまりの音のデカさに通話音声は筒抜けになつて  
いる。

『おに、い、ちゃん！ た、すけ、てえ〜〜つ!!』

「ええ……」

TS予定イケメンくんの妹ちゃんとおぼしき悲鳴が、爆発音に紛れて聞こえてくる。さすがのTS予定イケメンくんも絶句している。「僕、ここに飛び込まなきゃいけないの?」という顔だ。でも、行かないという選択肢がないあたり、彼らしい。

「じゃあ、今日はここでお開きということだ」

つないでいた手を離し、TS予定イケメンくんにそう声をかける。私の対応も慣れたものだ。残念だという気持ちはあんまりない。むしろ、次に会った時にどんな話が聞けるのか、ワクワクしている。

ふと、視界が陰った。唇に柔らかな感触。

「またね」と手を振りながら走るTS予定イケメンくん、呆然としながら小さく手を振り返す。

走っていく彼の後ろ姿を見送って、なんかまあ、気がついたら自宅の玄関に立っていた。ドアにもたれてズルズルと崩れ落ちる。頭を抱えてうずくまった。

——なんだあの流れるようなキス。パーフェクトカレシサマかよ。

「ぐわあああああ——ッ!!」

湧き上がる感情を抑えきれず、雄叫びを上げる。廊下に転がって、水揚げされた魚のようにビツタンビツタン暴れる。

「すきになっつちやう……!」

ダメですダメダメそれはマジでダメ! 振るもしくは振られるまでが計画でしょ!!

あーもー自分がチョロすぎてイヤになる!! だからヤだっただよ誰かとフツウに

恋人になるの!!! やーい恋愛クソザコなめくじ!!!

「うぎぎぎぎ……」

いつかは分からないけれど、TS予定イケメンくんは性転換して“ヒロイン”になる。何がどう転んでも、最終的には別れるのだ。

ならば、自分の目的をしつかり果たして、後腐れなく別れなければ。——自分のために。

「そうだ。粗探しをしよう」

TS予定イケメンくんの良くないところを探そう。なんかもう人としてどうかと思うけど、やらないといけない。自分の中のTS予定イケメンくんに対する好感度を下げたいこう。

寝ころんだまま腕を組み、しばらくうなる。

「……思いつかない」

さすがパーフェクトカレシサマだ。



——と、私は思っていたのだけれど。

「ないわ……」

残念なコを見る目で、お昼ご飯の会お昼休みにダベりながらご飯食べる会。元・取り

巻きハーレム先輩のファンクラブメンバーで構成されている。うちの学園における取り巻きハーレム先輩の評判がマジで悪いので、残されたファンクラブメンバーは肩身が狭く、寄り添い合って学園生活を送っている。会長にしみじみとそう言われた。周りのみんなももうんうんと頷いている。

あれ〜？

## 第二十九話 エロゲの世界のカレシとカノジヨ

「カレシができたってほんと?」

「言ってよ!!」

「立ち直れてよかったね〜!」

お昼ご飯の会で使っている空き教室のドアを開いた途端、みんなにワツと囲まれた。どうやら、昨日の公園デートをうちの学園の誰かに見られていたらしい。回りまわってお昼ご飯の会のみんなが知るところになった、と。……普通に恥ずかしいが?

あとはもう、根掘り葉掘りよ。

ただ、話せば話すほど、みんなのテンションは下がっていった。最終的に言われたのが「ないわく……」だ。しかも、会長だけでなく、みんなそう思っていると来た。

——これはチャンスだ!

自分の中のTS予定イケメンくんに対する好感度を下げられるかもしれない!! ということで。さっきまでとは逆に、根掘り葉掘り「ないわく……」の理由を聞いていく。みんなの話をザツクリまとめると「ないわく……」の理由は四つになった。

◆  
【ここがダメだよ！ TS予定イケメンくん!!】

①デートの回数の少なさ

「二週間に一回は少なすぎるでしょ!!」

「学園が違うから、毎日は会えないってのは分かるけどさあ」

「最低でも週三はデートしたい！ できるなら毎日イチャイチャしたい!!」

「でも、デート場所のチョイスはいいと思う」

「わかる〜！ 人気のお店にいっしょに並んでくれて、しかもイヤな顔しないってのはポイント高い!!」

二週間に一回のデートは少ない。思いもよらない意見に目を丸くする。TS予定イケメンくんがまともに付き合った初めてのカレシだから、あれが普通だと思っていた。

……ただなあ……私、プライベートで人と会うと疲れるタイプなんだよなあ。ほぼ毎日、カレシ他に会いたいと言われると……うん。二週間に一回くらいでいい気がする。

TS予定イケメンくんと毎日会うのも……ムリだ。たぶんドキドキしちゃって心臓がもたな——やめるバカ。自分から「それって好きってことなんじゃね」ポイントを発見しに行くんじゃない。次に行こう。

②親友“主人公”くんトーク

「ひたすら知らない人の話されるって何？　ほかの話題ないの?」

「つまんない」

言われてみれば、たしかに。親友“主人公”くんトーク∥知らない人の話∥興味ない・つまらない話になるのか。

私が親友“主人公”くんトークを楽しめるのは、エロゲが大好きだから。だって、親友“主人公”くんトーク、ほぼエロゲイベントなんだもん。聞いててものすごく面白い。

「あと、トークアプリを日程調整以外に使ってないのが地味にヤバイ」

「えっ通話もほぼないの?　夜に話したくなったりしないの?」

あゝ……これはTS予定イケメンくんのせいじゃない。どっちかという私のせいだ。

オタクは基本的に夜、忙しいから。スマホの通知を切ってるので、反応がめちゃくちゃ遅くなる。自然と日程調整以外にしかトークアプリを使わなくなったんだよねえ。

私みたいにカノジョらしい対応ができていなくても、カレシでいてくれるなんて、TS予定イケメンくんいい人——はい、おしまい。この話題おしまい!　つぎ!!



## ③親友“主人公”くんファーストの対応

「友だちから呼び出されたから途中でデートを切り上げるってなに?」

「しかも、今まで8回デートして、途中解散5回?!?」

「ありえない!!!」

「なんで許せるの!?! ムカつかないの!?!?」

「聞いているこつちがムカつくんだけど!!」

ムカつかないんだよなあ、これが。

だって、TS予定イケメンくんは“主人公”の友だちポジションの“サブキャラ”だから。絶賛エロゲイベント中である親友“主人公”くんのサポートに奔走するのは当たり前でしょうまれに、鬱陶しかったり裏切ったりする友だち(?)サブキャラもいるけれど、TS予定イケメンくんはそのタイプじゃないと思っている。

——などという男性向けエロゲ的解釈は、口が裂けても言えないので、あいまいに笑っておいた。

たぶん、みんなのお怒りポイントは『カレシにとっての一番がカノジョではない』だ。これ、ものすごく新鮮な反応だった。

私にとっての一番は、趣味だ。

いまは年齢的にも金銭的にも購入できないけど、この世界のエロゲをプレイする日を中心待ちにしている。だから、TS予定イケメンくんにとつての一番が自分じゃなくても気にならないってのもある。自分にできないことを、他人に求めるのはちよつとね。

ただ、もし、TS予定イケメンくんにとつての一番が自分だったら……うれしい、かも——はいやめー！ この話題もやめ！ やめる!! おぼか!!!

④付き合つて三ヶ月になるのにセックスなし

「ほんつとに、ほんとにもう！ ありえない!!」

「体の相性の確認なしに三ヶ月もよくもつたね!?!」

「わたし、途中解散よりもこっちの方にビックリした！ そんな人いるんだ!?!」

「ねえ、そのカレシ、大丈夫？ その、アレ的な意味勃起不全のこと。お昼ご飯の会の会長と副会長は取り巻きハーレム先輩が勃起不全になつてしまったことを知っている。で……」

……………そういやここ、男性向けエロゲみたいなのが起きる世界だったなあ。

前世との価値観の違いっぷりを目の当たりにして、なんか、改めて実感してしまった。この世界は、昔からずーつと出生率が低い。なので、自然と試行回数セックスが多くなる。何回もしなければいけないのなら、気持ちいい方がいい。そんな一般常識があるので、誰

かとお付き合いする時は、なるべく早めに体の相性やセックスの良し悪しを確認す、る

そうだ。

そうだった。

セックスするのがフツウなんだ。

浮かれていた頭がスツと冷える。TS予定イケメンくんとのでデートがあんまりにも少女漫画していたから、前世基準でカレシカノジョを考えていた。

今世基準で言うならば、TS予定イケメンくんの対応は、たしかにおかしい。

じわりと、嫌な予感がにじむ。

いや、展開としては悪くない。三ヶ月も経っているのだから、私の方からセックスしようとして問題ない。ガツガツしているとは思われないだろう。

セックスして、それで、おしまいだ。

胸がちくりと痛む。

——何もしなければ、このままずっと一緒にいられるんじゃないか。

かすかに浮かんだ気の迷いを打ち消すように、自分に言い聞かせる。何度も何度も繰り返す。

TS予定イケメンくんは「いずれ」ヒロイン」になる。相手は「たぶん、親友」主人公

くんだ。何もしなくても、別れはいずれやってくる。ならば、自分の目的をしつかり果たして、後腐れなく別れなければ。自分のために。

——そうやって自分に言い聞かせないといけない時点で、だいぶ好きでは？  
せやな。

## 第三十話 恋をしている女の子は

寝る準備を済ませてベッドの上に正座し、スマホと向かい合う。なんやかんや理由をつけて、ウダウダと先送りになっていた。けれど、もう寝るしかすることがない。

「……お誘いのメール、送るかあ」

我が家は両親そろって共働き。最近は、海外出張の準備のために仕事の引継ぎやら何やらで、毎日とても忙しそうだ。二人ともいつも夜遅くに帰ってくる。

おうちデートをするにはもってこいのシチュエーションだ。

『今度のデート、うちに来ない?』

しばらくためらった後、送信ボタンをタップする。緊張で指の動きが固い。思ったよりもすぐにメッセージに既読がついた。待つて待つて、心の準備が出来てない。スマホを放り投げたくなる気持ちを抑えて、返信を待つ。

『うん、いいよ』

ホッと肩の力が抜けた。いつものように日時をすり合わせていく。

——来週。

来週の、放課後。クリスマスの前日。

おうちデートが！ 決まりましたっ!!

クリスマス・イブにおうちデート！ クリスマス当日はお出かけデートです!!

やっつた~~~~!!

直接的にセックスしようとは送ってないけど!! そういう同意を得たと思っ  
ていいんだよね? いいんだよね!?

だって“おうちデート”セックス”ってお昼ご飯の会のみんなも言っ  
たし! 前の感覚が「そこをイコールで結ぶのは発想が飛躍しているのでは?’  
と訴えてくるけど!! この男性向けエロゲみたいなことが起きる世界では  
そうなんだもん!!

……いや待て。ちょっと落ち着こう。ここはきちんとセックスの同意  
を得た方がよいのでは?

この三ヶ月、今世の感覚で清すぎるお付き合いをしてきたんだし。当日  
になって、T S 予定イケメンくんが「そんなつもりは無かった」と言っ  
てもおかしくない。なので、この日にセックスするという言葉を取っ  
ておきたい。おきたいがあ! 何て書いて送れ  
と!?

え~~~~と……『当日はセックスしたいんですけど、大丈夫ですか?』  
……さ、さすがに直接的すぎるかな。

もっとう直接的すぎず、かつ分かりやすい表現で……『付き合っ  
て三ヶ月になるの

で、そろそろ体の相性をご確認いただきたく存じます』……業務連絡感がスゴい。

考えろ。考えるんだ、私。

この男性向けエロゲみたいなのが起きる世界では、付き合つてすぐセックスするのはフツウのこと。むしろ、付き合つて三ヶ月、一度もセックスしてないのはあまりフツウじゃない。

ということとは――

『エッチするの楽しみ！ 二人の相性がいいとうれしいな』

これだ……！ セックスするのが当然だと思つている人の反応を装う!! そのうえで相手の出方をうかがう!!

あとは、文末にハートでも散らしておこう。うむ。

おうちデートに誘う時よりも緊張しながら、送信ボタンをタップする。TS予定イケメンくんからは『そうだね』という返事がきた。これで“おうちデートⅡセックス”の言質を取ることができた。ヨシ!

おやすみなさいのスタンプを交わして、トークを切り上げた。スマホを抱えたまま、ベッドに倒れ込む。

「は~~~~~……」

ぶっちゃけていい?

「どう考えてもフラグ」

クリスマス・イブで……そんなん……フラグでしかないやん……！



案の定でござった。

クリスマス・イブの日。待ち合わせに現れたのは、TS予定イケメンくんの面影を残した美少女だった。目と目が合う。美少女は、おずおずと私の名前を呼んだ。

私は、現実を受け入れたくなくなつて、最後の抵抗を試みる。

「えっと……妹さん、かな？ よく似てるね」

「違うんだ。……本人なんだ」

そっか…… やっぱり……！！

人の多いところで話すことでもないということ、近くのカフェに移動する。先を歩くと美少女の後を、のろのろとついていく。足取りが重い。

お店に入って、席について、注文して、飲み物が届いて。湯気の立つ紅茶をぼうつと眺める。すべてがボンヤリしていて現実味がない。

「別れてほしい」



ただ、その言葉だけが鮮明に聞こえて。ようやく意識がハッキリした。

「僕は、その、女の子になってしまったし。このまま付き合い続けるのは難しいと思うんだ」

私としても、別れない理由は無い。

TS予定イケメンさんと付き合い合っていたのは、処女でなくなるため。性転換した今、もう目的を果たせないのだから付き合い続ける意味は無い。

——いや、でも。

ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界だ。男性向けエロゲには、百合ゲーやレズゲーもある。男の娘ゲーやショタゲーだってある。異性愛だけがすべての世界じゃない。

それに、処女でなくなる条件が、男女間でのセックスだけだと定義されているわけでもない。別に、このまま付き合い合っても——

はたと気づく。

『別れない理由は無い』はずなのに、必死になって『別れない理由』を考えている。どうして、なんて、今さらだ。

「わ、たしは……性別なんか、関係なくて……」

覚悟を胸に、顔を上げる。

「きみのことが……」

ずっと前から分かっていた結末を受け入れる時が来た。

「——すき」

TS予定イケメンくん——いや、TS“ヒロイン”ちゃんは、目を見張った。私をじつと見つめ、何かを言おうとして口を開き、ぎゅつと引き結ぶ。そして、「ありがとう」と言った後、「ごめん」と申し訳なさそうな顔でつぶやいた。

「いま、はじめて気がついたんだけど……」

ああ——

「僕、好きな人がいるんだ」

恋をしている女の子は、なんて可愛いんだろう。



TS“ヒロイン”ちゃんが席を立った後、私は静かに泣いていた。カフェの人には本つつ当に申し訳ないのだけれど、涙が止まらなかつた。

どのくらい泣いていたのだろうか。すっかり日は落ち、通りではクリスマスイルミネーションがチカチカと瞬いている。

窓の外が暗くなったので、カフェのガラスに映る自分の顔がはっきり見えた。TS  
ヒロイン”ちゃんの顔と比べたら、あんまりにもボロボロで。自分が失恋したんだとい  
うことを、まざまざと突きつけられるようだった。

——恋している自分はどんな顔をしていたんだろう。  
彼の隣にいた自分の顔を、私は見たことがない。

## 挿話④ 君が好き 前編

「そういや、今のコと付き合ってどんくらいになるんだ？」

ずいぶんとにぎやかになった昼休みの時間、ヒロの隣に座るアンジエとイヴィルは、いつものじゃれあいロげんかに夢中になっている。そんな二人を横目に、ヒロがそんなことを言った。

「三ヶ月くらい、だね」

「マジか！ すげー長いじゃん!!」

言われてみれば、たしかに。付き合った期間の最長を更新している。今までの最長は一ヶ月、最短は一日……だったかな付き合い始めてから別れるまでの日数のみのカウントで、実際に会った回数をもっと少ない。

「いや、よかったよかった！ 俺、心配してたんだぜ？ お前のコイビト関係、なんかフワッフワしてたからさあ」

ヒロは、まるで自分のことのようにうれしそうに笑う。

「それで、どんなコなんだ？ たしか、一個下なんだっけ？」

「うん、そう。ここから数駅離れたところにある学園に通って——」

今まで付き合ってきた女のコは、始めのうちはニコニコとしているのだけど、だんだんと沈んだ顔になっていった。そして、『別れる』と僕に告げる。『思ってたのと違う』『つまんない』『ウチのことなんてどうでもいいんでしょ』『うそつき』『なんで』『どうして』——いつも、泣かせたり怒らせたりしてしまえばかりだった。

このままでは良くないと、ヒロや妹に相談したり、妹から少女漫画を借りて勉強したりしてはいた。けど……女のコから告白されては、女のコからフられての繰り返し根本的な原因を本人も周りも理解していないから。原因の詳しい内容については「エロゲの世界のカレシとカノジョ」を参照のこと。

いっそ、誰とも付き合わない方がいいのでは？　と思つたこともあつたけれど……なぜだかそれは選べなかつた。

『カレシになつて下さい』  
『いっよ』

あの出会いが、偶然なのか必然なのかは分からない。僕に分かるのは、付き合い始めてからのことだけ。

デートの時、あのコはいつも楽しそうに笑っている。

僕の話話の内訳の7割がヒロの話、2割が妹の話、1割がアンジェとイヴィル関係の話。をうれしそうに聞いてくれる。別れ際も僕のことを笑顔で見送ってくれるデート

を途中で切り上げて、ヒロや妹の元に行くときのことを言っている。そんなことは初めてだったから、すごくビックリした。

——困ったな。

「……………」

ふつて湧いた自分の感情に戸惑う。困ることなんて何も無い。あのコとなら、このまま良いお付き合いを続けられる。とてもいいことだ。

僕は、いったい何を——

「つと、悪い。ちよつとあの二人止めてくる」

話が途切れたタイミンで、ヒロは断りを入れると席を立った。アンジエとイヴェルはいつの間にか教室の後ろに移動していて、取っ組み合いのケンカをはじめている。

「ムキーツ！ もう許しませんわ!!」

「あはははつ、ムキーツて！ サルかよ!! ウケる〜」

たしかに、これ以上放っておくと大変なことに魔法の撃ち合いなりそうだ。

彼女たちが異世界からやってきて、ヒロの周りには毎日が大騒ぎ。ヒロのご両親が異世界で厄介ごとを片付けている間、世話係としてアンジエ天使とイヴェル悪魔がやってきたはずなのだけ……どう見てもヒロが二人の世話をしている。

でも、二人に振り回されるヒロは、なんだかんだ楽しそう。少し前のふさぎ込んで

いる姿を知っているから、なおのこと良かったと思える。……僕では、ヒロを引つ張り上げることができなかつた。

「ウギギー！」

「ぐぬーっ！」

もみくちやになつてゐるアンジエとイヴィルの間に割つて入つたヒロは、何やら話をまとめたらしく、僕の方を振り返つた。

「おーい。今度の休み、近くのショッピングモールに行くことになつただけど、お前も来る？」

行くと返事をしかけて踏みとどまる。

「ごめん、その日はデートなんだ」

「デート！ デート!! お互いの愛を深める素晴らしい行いですわね!! ヒロ様、ワタクシたちもデートしましょう！ デート!!」

「おいアンジエ！ 抜け駆けしようとしてんじゃねえ!! ヒロ坊、アタシとデートしよう！ なっ!!」

「いっただだ、痛いって！ ええい、引つ張るな!! ただの買い物でデートじゃない!!」

三人のやりとりがおかしくて、思わず笑つてしまう。あのコとのデートの約束が無ければ、僕も一緒に行けたのにな。ちよつぱり残念だ。

——でも、別れる理由が無いからなあ。

「……………はっ」

するりと出てきた自分の考えに愕然とする。そして、すくと腑に落ちた。どうして、今までのカノジョと長続きしなかったのか。

僕は、あのコに——いや、カノジョになってくれた人間に興味が無い。

あんまりな理由にめまいがする。ふられて当たり前だ。カノジョたち個人を何も見ていなかったのだから。

——ただ、女のコにカノジョでいてほしかっただけ。

僕は、何を……何を考えているんだ？ どうしてそんな最低なことをしなければなら  
ないんだ？ 理解できない。自分が何を求めているのか分からない。

真っ白になった頭の中に、今まで付き合ってきた女のコの泣いた顔や怒った顔が浮かんだ。どれだけ謝ろうと、もう取り返しがつかない。彼女たちを傷つけてしまった過去はなくならない。

最後に、こんな最低な僕にいつも笑いかけてくれるあのコの顔が浮かんだ。

——まだ、間に合う。

ちゃんと向き合おう。向き合わなければ。僕は、あのコのカレシになったんだから。

「ヒロ、僕はデートだから、ショッピングモールには行かない」



「ん？ ああ、うん。聞こえてたぜ。オツケー」



今日は公園でデートをする日。僕たちは、手をつないで遊歩道をぶらぶらと歩く。彼女は気づいていないようだけど、いつもよりもずっと緊張していた。

自分の最低さに気づいてから、今まで付き合ってきた女のコたちにしてしまったことをグルグルと思い返すようになった。

女のコたちが、つまらなさそうな顔や悲しそうな顔、怒った顔をしていた時、自分が何を言ったのか、何をしてしまったのか。申し訳なさに押しつぶされそうになりながら、ひたすらに反芻して、対策を考える。

そして、とにかく彼女の話を聞いて、彼女といっしょにしていると決めた。自分ヒロが楽しい妹の話ばかりしない。ヒロや妹にトラブルが発生しても向こうに行かない。彼女とのデートなのだから、彼女を優先する。

優先しなければと思っていたのだけど——気がついたらヒロの話になっていたし、妹からの電話に出てしまったし、ヒロたちの元へ向かおうと思ってしまった。

通話は、助けを求める妹の叫び声を最後に切れてしまった。とても心配だ。けど、言

わなければ。「デートだから行かない」と「君と一緒にいる」と、言わなければ。だって今はデート中で、僕はカレシなんだから。

「じゃあ、今日はここでお開きということだ」

僕が何かを言う前に、彼女はそう言った。つないだ手を離し、穏やかに笑った。なんでも。どうして。今までのカノジョは。

——ああ、僕はまた、間違えるところだった。

当たり前前のごことが頭から抜け落ちていた。彼女は、今までの女のコたちとは違う人間で。過去の記憶を掘り返したところで、彼女と向き合うことになってならないんだ。

——ちゃんと、ちゃんと向き合わなければ。

僕なりの誠意を込めて、彼女の唇へ自分の唇をそつと重ねる。柔らかな感触。口づけ。恋人らしい行為の第一歩。

少しは、カレシらしいことができたのだろうか。

## 挿話④ 君が好き 後編

体育の授業中、ヒロといっしょに短距離走の順番待ちをする。吐く息が白い。

「なあ、明日のクリスマスパーティーだけどきあ……つて、そっか」

ヒロは途中で話を切ると、モゴモゴ言葉を濁して頬をかく。

「あ………クリスマス・イブはカノジヨの家で、だったっけ」

なんでヒロが赤くなってるんだらう。

「うん、クリスマス当日はデートする予定」

「いや、毎年お前とクリスマス過ぎたから、うっかりしてたぜ」

ヒロの家と僕の家は隣だから、小学校の時から季節のイベントはだいたいヒロといっしょだった。言われてみれば、クリスマスを別々に過ごすのは初めてかもしれない。

「にしても、カノジヨとクリスマスか……いいな……!!」

「このこのと肩をぶつけられる。けっこうな勢いで、思わずよろけてしまった。」

「ま、俺は俺で楽しむからさ！ お前も楽しんでこいよ！」

「う、ん……」

カレシとして真摯であろうとすればするほど、いつも通りがいつも通りじゃなくなっ

ていく。でも、それが当たり前で。きつとあのコと一緒にいることが、僕のいつも通りになつていくのだろう。

隣に並んで立っているのに、ヒロと僕の距離が遠く離れてしまったような気持ちになつた。

——さみしいな。

思わず浮かんだ寂寥感を振り払うように空を見上げる。チカと、遠くで何かが瞬いた。白と黒と灰色のエネルギーが激しくぶつかり合いながら降ってくる。

「ヒロー… あぶない!!」

考えるよりも先に体が動いていた。

「は?」

呆けているヒロの体を思いつき突き飛ばす。次の瞬間、僕の体は光の束に貫かれていた。



——それは、死ぬ間際に見る走馬灯だったのかもしれない。

小学校高学年に上がってすぐくらいのこと。ヒロは隣の席の女のコに恋をした。け

れど、そのコは僕のことが好きだった。

『お前がいると俺にいつしよカノジヨできねーじゃん！ お前の近くにいるのヤだ！！』

今から思うと、初恋に破れたヒロの八つ当たりだったんだと思う。

ただ、当時の僕はこう思った。それは困る。僕はヒロという方が楽しい。ヒロといっしょにいるにはどうすればいいんだろう。

浅はかだった幼い僕は、短絡的な解決方法を思いついた。

そうだ、カノジヨを作ればいいんだ。僕にカノジヨがいれば、僕のカノジヨになりたいて女のコはいなくなる。ヒロといっしょにいられる。

——そのうちにキツカケを忘れて、僕は女のコにカノジヨでいてもらうことを求める人間になった。



目が覚めたら、放課後で、僕は女のコになっていた。

「お、お兄ちゃんが……お姉ちゃんに……」

連絡を受けてやってきたらしい妹が、保健室の入り口で呆然と立ち尽くしている。

「たいつへん申し訳ありませんでした!!」

「さすがのアタシでも謝るわ! スマン!!」

アンジェとイヴィルは半泣きになりながら、ベッドサイドで頭を下げた。話を聞くと、彼女たちは、異世界からやってきた狂った神と交戦中だったらしい。その戦いの余波に、僕は巻き込まれてしまったのだとか。

そして、二つの神力と魔力が複雑に絡み合っているせいで、元に戻るのには難しいと告げられた。

——僕は……僕は、安堵していた。

女のコになったから、もうカレシをがんばらなくていいんだ。いつも通りに戻っていないんだ。……ヒロの隣に立っていていいんだと、思ってしまった。



「別れてほしい」

クリスマス・イブの日、向かい合って座る彼女に、僕はそう言った。自分から別れを告げるのは、初めてのことだった。

「僕は、その、女の子になってしまったし……このまま付き合い続けるのは難しいと思う

んだ」

どこかボンヤリした様子だった彼女は、たどたどしく口を動かす。

「わ、たしは……性別なんか、関係なくて……」

ゆつくりと顔を上げ、しっかりとぼくを見据えた。

「きみのことが……」

その目には輝くような強い意志が宿っていた。

「——すき」

思ってもみなかった言葉に息をのむ。すき……好き？

——僕のことか、好き？

聞き返そうとして、言葉を飲み込む。飲み込んだ言葉が胸の内に広がっていく。

僕は、初めからずっと間違えていた。僕がしなければならなかったのは、カレシらしく振る舞うことじゃない。彼女のことを知って、彼女を好きになることだった。けれど

僕が好きなのは。

好きという言葉で思い浮かぶ相手は。

「ありがとう」

ちゃんと彼女の目を見つめる。

「ごめん」

彼女の目にじわりと、涙が浮かぶ。怯みそうになる自分を奮い立たせる。彼女に——いや、自分の気持ちに、向き合わなければいけない。

この気持ち、家族としての好きなのか、友情としての好きなのか、恋愛としての好きなのか。そんなことすら分からない。けれど、僕の心に、好きという気持ちをはじめて生まれたんだ。

「いま、はじめて気がついたんだけど……」

僕は今から、僕の都合だけで、彼女を傷つける。

「僕、好きな人がいるんだ」

君のことを、好きになれなくて、ごめん——



「ひっ、ひぐっ……ぐすっ……」

頭から毛布をかぶり、震える手でスマホを操作する。僕には、もう彼女しかいなかった。藁にも縋る思いで、コール音を聞く。通話に出た彼女に名前を伝え、返事を聞く前に自分の気持ちを吐き出す。



「ふられた」  
『ええくくく……』

## 第三十一話 選ばれなかった二人

電話に出たら、元カレのTS予定イケメンくん——いや、TS“ヒロイン”ちゃんだった。着信相手をしつかり確認しなかったことを後悔する。着信拒否なり、ブロックなりしておけばよかったなあ。自らの未練がましさを恨みつつ、すぐに切ろう——

『ふうられた』

「ええええええ……」

お、お、お、おまえええええ！　そこは上手くいくところでしょうがよ！！　それで「私をフって幸せにやりやがって、恨んでやる——っ！」って叫びたかったよ！！　私は！！！！

そもそも！　なぜ！！　フった相手にフられた報告するんじゃない！！

……と、思ったけども。付き合ってた時に聞いてた話から察するに、TS“ヒロイン”ちゃんは交友関係とても狭い。友だちが親友“主人公”くんしかいないっぽい。エロゲのメインキャラって、友だちが少ないよねエロゲの主人公の周りには親友（もしくは悪友）としてヒロインかサブキャラが一人二人いる。が、浅い付き合いの友だちがあまりいない。これは、ゲーム制作上の労力の問題だと作者は考えている。キャラが増えれば増えるほど、立ち絵やボイスなども増える。ものすごく大変。なので、友だちキャラ

ラを少数にまとめているのだろう。ちなみに、この世界は男性向けエロゲみたいなことが起きる世界なので、“主人公”周りは押しなべて交友関係が狭い。

あとは、妹ちゃんと部下“ヒロイン”ちゃんたち、か。おそらく恋のライバルであろう彼女たちに、告白してふられたなんて話をできるはずがない。

うん、消去法で私に電話するしかねえ！

いつ電話を切ろうかと思っていたけど、相手のボツチつぶりに気づいてしまった。ここで電話を切るのはあんまりにも無情すぎる。しようがねえなあ！ 聞いてやるよ!!

と思いつつ嗚咽まじりの話し声に「うんうん」と相づちを打つ。

そして思わず言ってしまった。

「そらふられるよ」

「どうじで」  
TSしたのが23日、別れたのが24日、告白したのが25日。攻略がド下手すぎる。

そりゃあ「友だちとしか思えない」と言われても仕方ない。たった三日で、親友“主人公”くんのTS“ヒロイン”ちゃんに対する認識が変わるってのは無理がある。

TSヒロインのいちばんの強みは『距離の近さ』と『油断』だ。ふざけて肩を組む。スカートであぐらをかく。男なら当たり前前の動作を女の子がする。しかも、恥じらいな

く。危なっかしいわエッチだわで、見る方はドキドキせざるを得ないこれは個人の感想・嗜好・解釈であり、普遍的な価値観を示すものではありません。

そして、TSヒロインのいちばんの旨みは『自分は女の子であると理解した瞬間』だ。男性性の喪失と女性性の獲得。そこから生じる感情。最高に面白いこれは個人の感想・嗜好・解釈であり、普遍的な価値観を示すものではありません。

とまあ、そういったニュアンスの話を、オブラートに包んで伝える。

「じわじわ時間をかけてアピールするべきだったと思うよ？」

「だつて、好きになっちゃったんだもん〜〜!!」

振り絞るような泣き声。電話の向こうで、TS“ヒロイン”ちゃんが昨日の自分と同じ顔をしているのかと思うと、不思議な気持ちになる。

エロゲにあるのはハーレムエンドだけじゃない。

数だけで言うのならば、個別エンドの方が豊富だ。当たり前だ。攻略対象の数だけルートがあるのだから。どれだけ共通ルートでイチャイチャしようが、主人公に選ばれなかったヒロインは恋人になれない。

この世界は、基本的に一夫一妻制だ。

単純に、一夫一妻の夫婦の数が多いのだ。モブキャラやサブキャラな人々もだいたい一夫一妻だし、“主人公”や“ヒロイン”も一夫一妻の方が、実は多い。たった一人の

“ヒロイン”を選ぶ“主人公”がいるということは、きつと選ばれなかった“ヒロイン”もいるのだろう。

そんなものなのだ。エロゲも、エロゲみたいなことが起きる世界も。

「好きな人に好かれなくてツライねえ」

「つ、ら、い、く、く！　ごべんなぎあ、く、く、いっ!!」

しようがないなあ。イヤみはこのくらいにしてあげよう。

それにしても、こうやって腹を割って話したのは初めてかもしれない。付き合っていた時は、なんとというか『いいカノジヨだと思われたかった』から、イヤみを言ったり怒ったりしないようにしてた気がする。

別れた後の方が、気安く話せるなんて。なんだかおかしくなって笑ってしまふ。

こうして、私とTS予定イケメンくん——いやTS“ヒロイン”ちゃんは、元カノと元カレになった。

## 第三十二話 繁華街へ逆ナンに行こう！

年度末が近づき、少しずつ寒さが緩み始めた今日この頃。私は、処女でなくなること半ば諦めていた。

だって！ これまでいろいろとやってきたけど、ぜんぜん上手く行かなかつたんだもん!!

さすがに疲れたわ!!

そろそろ腹をくくって、同人エロゲの“女主人公”を回避するのは諦め、“女主人公”になつた後の対策に注力した方がいいかも。などと考えていた時だった。

「逆ナンに行きたい〜?」

あまりにも突然の提案に、思わずすつとんきような声をあげてしまった。電話の相手であるTS“ヒロイン”ちゃん彼女とは、なんやかんやで、たまに電話でおしゃべりする仲に落ち着いていた。は、ブンブンと怒つた様子で『そう!』と返事をする。

「いやいやいや、誘う相手を間違つてませんか? ワタシ キミにふられた オーケー?」

『そうだけどさあ……』

さつきまでの勢いはどこへやら。しおしおと元気が無くなる。

『たしかにね、僕はふられたし、友だちのままにいるってことに納得したさ。でもさ! まったくもって依然と対応が変わらないって何!? たまに「あれ? 僕って女のコになつたんだよね?」って思ってしまうレベルで! 対応が! 変わらない!!』

「見た目で対応を変えないなんて、めちやくちやいい人じゃん」

おっと思わず余計なことを言ってしまった。TS“ヒロイン”ちゃんは、ヒートアップしていた気持ちがシユンと萎えたらしく、めそめそ泣き始めた。

『そうなんだよぉ〜!』

相変わらず、親友“主人公”くんに関することは、情緒の乱高下がすごい。ただ、これでもマシになった方だ。もう三ヶ月近く経ってるし。

『そういうところが好きだったんだよぉ〜!!』

好きだったというか、今でも好きで気持ちの整理私? 私はねえ、TS予定イケメンくんとTS“ヒロイン”ちゃんが別人に思えて仕方ないので、そこはもう割り切つて考へてる。が追いついてないんだらうなあ。

『だから逆ナンに行く!! 女の子扱いしてもらおう!!』

なるほどね。女の子としての意識を高めつつ、前の恋を忘れるための逆ナンかあ。

まあ、TS“ヒロイン”ちゃんは、ものすごく可愛いので、逆ナンなんてちよちよい

のちよいだろう。

しかし、ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界。前世の日本と比べると、治安がものすごく悪い。そのうえ、犯罪のほとんどは“主人公”たちや“ヒロイン”たちに集中する。

そんな世界で、“ヒロイン”が繁華街で逆ナンなんてした日には……即堕ちでアへ顔ダブルピース待ったなしだ。

けれど、『逆ナンに行く！』と息まくTS“ヒロイン”ちゃんに「危ないから止めなよ」と言ったところで、逆効果になりそうだよねえ。『一人でも行くー！』とか言い出しそう。ロクなことにならないだろうと知りつつ、TS“ヒロイン”ちゃん一人で逆ナンに行かせて、何かあったら後味悪いよなあ。ついていってそれとなく逆ナンを阻止した方が、なんぼかマシか。

せつかくだからシヨツピングとしやれこもう。ちようど春服が見たかったんだよね。

『じゃあ、今週の土曜日！ 11時に駅前で!!』

「へいへい」

——そもそも。

好きな相手から女の子扱いトクベツされるからうれいのであって、どうでもいい相手からチヤホヤされてもうれしくない（というか怖い）と思うんだけど。



まあ、  
ここら辺は個人差か。

## 『選択肢』

コツ、コツとだだっ広い廊下に自分の足音が響く。極めて憂鬱な月曜日の朝だ。また、一週間が始まってしまった。

いつでも一言一句変わらぬ授業内容。ほとんど同じクラスメイトの雑談。違うのは、友だちとの会話だけ。しかし、それもそのうちパターン化されてしまった。

俺の発言や行動で、多少のブレを生じさせることはできる。けれど、一週間が経てば、また今週の月曜日に戻ってしまう。

——俺は、同じ一週間をずっと繰り返している。

いつたいどうすればいいんだ。

どうすれば、このループから抜け出すことができるんだ。

「おい、廊下の真ん中に突っ立って何してるんだよ。通行の邪魔だ」

後ろからとげとげしい声をかけられた。振り返ると、御々田蒔アカヤ御々田蒔明哉。

取り巻きハーレム先輩の本名。が立っていた。声色のわりに、心配そうな顔をしている。

——今回はこのパターンか。

わりと悪くない引きだと思ふ。場合によつては、一週間と経たずに月曜日へ戻されることもある。だが、アカヤと会うパターンはほぼ確実に日曜日まで行ける。

「ああ、いや、ボーツとしてた。悪い」

「ふん」

俺が廊下の端に移動すると、アカヤは通り過ぎることなく俺の前で立ち止まる。苛立  
たし気に首をかしげると、さらりとした金髪が揺れた。

「言えよ、聞くだけ聞いてやるから」

腕を組み、ふんぞり返つて上から視線。どうやら話を聞いてくれるらしい。

アカヤはいいやつだ。口は悪いけど、面倒見がいい。名字から分かるように、あの  
御々田蒔財閥エロゲみたいなのが起きる世界なので、もちろん財閥が生き残つてい  
る。の御曹司なのに、『ぼつと出おんぞーし』の俺母親の再婚をきっかけに花卉かいき樹家の跡  
取り息子になってしまい、上流階級しか通えない全寮制の学園に編入することになつ  
た。とても優秀な義理の姉が一つ上の学年にいる。にも、こうやって声をかけてくれ  
る。男友だちの中で、いちばんよく話してるんじゃないかなろうか。

相談にのつてくれたり、愚痴を聞いてくれたりすることに対して礼を伝えると、ふん  
と鼻を鳴らして「それを言う相手はオレじゃない」と言う。謙虚なのか何なのかよく分  
からない。ただ、信頼できることは確かだ。

だから、いつかのループでアカヤに会ったときに、この異常事態ループについても相談した。俺は、ずっと同じ一週間を繰り返している。何をやっても月曜日に戻ってしまおうと。

アカヤは、こんな嘘みたいな話を笑うことなく聞いた後、「オレの方でも探ってみる」と言ってくれた。けれど、以後、そのループでアカヤに会うことはなかった。御々田時財閥の力をもつてしても、一週間以内に調べがつかなかったということなのだろう。

——一瞬、真つ赤な光景が脳裏にフラッシュバックする。

悩み過ぎて立ちくらみでも起こしただろうか。額に手を当てながら、首を振る。

「いや、なんでもない。大丈夫だ」

「またアイツらに無茶ぶりされたんだろ」

アカヤが辟易した声で言う「アイツら」とはメイドサークルの面々のことだ。この学園でも変わり者のお嬢様たちで、サークル活動としてメイドをエンジョイしている。ひよんなことから、俺は彼女たちのご主人様になってしまった。

それ以来、ほぼ毎日、メイドサークルの活動に巻き込まれるか、メイドサークルの誰かといっしょにいた。しかし、一週間がループするようになってから、その生活も変わってしまった。

「いや、最近は顔も合わせてないくらいで……」

ループを経験して分かったことの一つ。メイドサークルの誰かに会おうと、日曜日まで

たどり着けずにループが終わってしまうことが多い。だから、申し訳ないが、意図的に避けるようにしていた。

怪訝そうな顔でアカヤが眉をひそめる。

「昨日も、アイツらにたかられてたじゃないか。アりに群がられる角砂糖みたいだったぞ」

そう言われて、ハツと気づく。昨日——日曜日は、俺の体感時間では遠い昔のできごとだけど、アカヤからすると本当に昨日のできごとなのか。ややこしいな。

アカヤは、大きいため息をついた。懐から、きれいに折りたたまれた紙を取り出すと、俺に向かって突き出す。

「やる」

「無記名の、外出許可証……」

ここは、上流階級しか通えない全寮制の学園で、関係者の出入りすら厳しく制限されている。だから、学生用の外出許可証なんて、ちよつとやそつとじゃ発行してもらえない。しかも、無記名誰でも使えるときた。

「手に入れた方法は聞くなよ。蛇の道は蛇つてやつさ」

「何も言つてないだろ」

「顔に出てた」

アカヤは踵を返すと、「じゃあな」と言って去っていった。その背中に「ありがとう」と声をかける。

俺は、まじまじと手元の外出許可証を見た。

「今週の、土曜日」

アカヤから無記名の外出許可証を譲ってもらおうのは――

## 第三十三話 ドキドキ♡逆ナン大作戦

土曜日、11時に駅前へ着くと、思わず見とれてしまうほどの美少女がいた。クリーマ色のポンチョコートにチエックのスカートがとても似合っている。

辺りをキョロキョロ見まわし、私を見つけると手を振りながら笑顔で駆け寄ってきた。もちろんTS“ヒロイン”ちゃんだ。ヘアスタイルもフアツションもぼっちりキマっている。逆ナンの準備は万全、ということだろう。

「あれ、メイクもしてる?」

「うん! 妹にしてもらった!!」

ほお、妹ちゃん、ナチュラルメイク上手いなあ。前世の私が同じ年頃のころは……うん、日焼け止めはね! つけてた!!

それはさておき。もともと可愛いTS“ヒロイン”ちゃんにナチュラルメイクが合わさり、最強に可愛くなっている。

「えらく気合い入ってんねえ」

「そりゃそうだよ!!」

腰に手を当ててエツヘンと胸を張る。私よりも大きな胸がゆっさりと揺れた。でか

い。

「そうだ。これ、もらってきたんだ」

TS〃ヒロイン〃ちゃんは、カバンから紐を取り出した。20〜30cmくらいだろうか。

「ちよつと手を出してくれる?」

素直に手を差し出すと、私の手首にその紐を結わせる。金糸と銀糸が混じった紐に、横向きの8の字——無限マークのパーツがついている。

「これって、ミサंगा? 異世界からやってきた天使と悪魔が協力して作ったミサंगा。二人の髪の毛が入っている。もちろん効力はバツチリ……かもしれない。」

TS〃ヒロイン〃ちゃんも、同じデザインのみサंगाを身に着けていた。

「そう。これを身につけてると、魂? 的な何かが高められて、自分に相性の良い人を引き寄せてくれるんだって! 二本もらったから、一本あげるね」

キュツと唇を引き締める。思わず「う、うそくさ……」と言いそうになったのをこらえるためだ。まあ、効果があるかどうかは分からないけど、デザインもかわいいし、くれるんならもらつとこう。

「ありがとう。でも、ものすごく高そうだけど、タダでもらつてもいいの?」

「大丈夫。僕も迷惑料としてタダでもらつたから」



……それ、騙されてない？　ほんとに大丈夫??



TS“ヒロイン”ちゃんの『ドキドキ♡逆ナン大作戦』は、早々に頓挫した。そもそも、逆ナンせずとも、歩いているだけで向こうがバンバン声をかけてきた。

初めは機嫌よく応じていたTS“ヒロイン”ちゃんだったが、昼を回る頃にはウンザリとした様子で相手をあしらっていた。しまいには、私のと交換したロングコートで服を覆い、サングラスとキヤスケツト帽で顔を隠すことになった。

ちなみに、私はその様子を透明人間になった気持ちで見ている。どうやら、ナンパ男くんたちには隣にいる私の存在が見えていないらしくった。まあ、お互いにモブだからね。TS“ヒロイン”ちゃんのオーラに目を焼かれて、彼女しか見えなくなるのもさもありなん。

今は、くたびれたので休憩中。おしやれなカフェの奥まったテーブル席でのどを潤す。TS“ヒロイン”ちゃんは、水を一気飲みすると、机に突っ伏して長々ため息をついた。

「僕、男に声をかけられても、ぜんっぜんうれしくない……」

うぐぐん、すつごく根本的な問題だね！

なお、性別が変わってから三ヶ月も経つのに今まで気がつかなかった理由は、繁華街へ出かける時はいつも親友“主人公”くんがいつしよだったからだそう。めっちゃ気を遣ってもらってますやん。親友“主人公”くん、相変わらずいいヤツだなあ。

「……性別が女のコに変わったから、男を好きになるようになったんだと思ってたけど、違った……」

「あぐぐ、あれかあ『君だから好きになったんだ！』って感じ？」

「それぐぐぐぐぐ！」

TS“ヒロイン”ちゃんはガバツと顔を上げると、眉をへんにやり下げた。目じりにじわつと涙が浮かぶ。

「いま泣いたら、メイクが崩れて顔がたいへんなことになるからガマンしなね」  
「うぐぐ」

かなりの薄化粧だけど、マスカラつけてるしアイライン引いてるから泣くのはヤバい。TS“ヒロイン”ちゃんは、ぎゅううつと眉根を寄せて泣くのをガマンしている。それはそれでファンデが崩れそうだ。

メイクの話は置いて。つまり、TS“ヒロイン”ちゃんにとって恋愛対象は親友だけってこと？ ……なんて前途多難な。TS“ヒロイン”ちゃんに良いことがある

ように祈つところ。

「どうする？　もう帰る？」

TS「ヒロイン」ちゃんがいぶ疲れてそうだったのでそう提案したけど、彼女は「せっかく休日ここまで出てきたのに、もう帰るのはなあ」と悩んでいる。そういうことなら、当初の予定を達成させてもらおう。

「じゃあ、買物しない？　私、春服が見たいんだよね」

「うん、そうしよう！　ファッションはよく分からないから、僕は見てるだけだけ」

「あれ？　今日の服は？」

「妹が選んでくれた」

妹ちゃん、メイクもファッションもいけるんか。マジでスゴいな。

## 第三十四話 エロゲの世界のファッション

男性向けエロゲみたいなきっかけが起きる世界のファッションは、男女ともに体のラインが出ていることが多い。そして、レディースのだいたいの服に、乳袋がついている。

乳袋とは、おっぱいの円錐のカタチに生地が張りついているように見える洋服の描き方の通称だ。ブラジャーやコルセット、ビスチェに袖や襟がついて洋服になつていると想像すると分かりやすいかもしれない。

まあ、あんまり褒める意味で使うことはない。だいたいは、着<sup>リ</sup>衣<sup>ア</sup>描<sup>リ</sup>写<sup>テ</sup>が<sup>イ</sup>でき<sup>な</sup>て<sup>い</sup>ないおっぱいという意味で使われている。

ただ、リアリテイのみを重視するとおっぱいとくびれの描写が両立できない……げんげふん。

とにかく。

乳袋の表現は、好きな人もいれば嫌いな人もいる。そして、前世の感覚で言うと、乳袋は実現の難しい洋服ということだ。

コルセットやビスチェという前例があるので、できないわけじゃない。しかし、個人個人の体のラインに沿った縫製が必要になるので、オーダーメイドになるだろう。市販

の既製品では難しい。

でも、この男性向けエロゲみたいなことが起きる世界の服には、市販の既製品にも乳袋がある。それはなぜか。私が考えるに理由は二つ。

一つは、基本的に女性の胸が大きく、またサイズがバラエティに富んでいるから。下はAカップから、上はZカップまであり、人数の分布は後半のカップ数に偏っている。女性の平均バストが大きいので、それを前提としたデザインになっているというわけだ。乳袋つて、ようするにコルセットに近いから、安定感があるんだよね。

もう一つは、この世界の洋服のほとんどが、ものすごく伸縮性のある生地で作られているから。この伸縮性のある生地、今世では綿や麻に並んで一般的なんだけど、前世では聞いたこともない素材なんだよね……なんなんだろう、これ……。

そんなわけで、男性向けエロゲみたいなことが起きる世界の服はシャツもセーターも、ぴっちりしてるのが当たり前。とくに、胸の部分の伸縮性がすごい。どんなサイズのおっぱいでも、ワイシャツのボタンがキレイにとまる。

なんてことをツラツラ考えながら、ショッピングを楽しむ。ここは駅ビルの中にあるレディースブランドオンリーのフロアだ。ナンパを気にせずお買い物ができる。

お、このスカートかわいい。

「これ、どうかな？」

ヒロインちゃんが指さすフリルシャツを手に取ってみる。

「うーん、冬物のセール品かあ。値段は安いけど、色がなあ。生地も厚手だし、これから着るのはちよつとって感じだね」

「難しいな……何がどう違うのか、僕には分からないよ……」

「トレンドとかが気にならないなら、いま買つて来年の冬に着てもいいんじゃない？」

カタチはシンプルだし、たぶんいける」

ちなみに、最近のトレンドは乳袋のゆるめな服だ。オーバーサイズな感じで服を着ることで、こなれ感や細見えを演出する。前世の感覚で言うところと乳袋と乳テント最近よく見かけるおっぱい描写。現実で胸の大きい人が服を着ると、服の生地が胸で引っかかり、胸の下に空間ができる。その状態の服のすそをスカートやズボンに入れることで、胸の大ききの表現と腰のくびれの表現を両立させる描写。いつのころからか乳テントと呼ばれるようになった。ちなみに、すそを出したままの状態だと乳カーテンと言うらしい。の間が近いかもしれない。



そろそろ日も暮れるし、帰ろうかと話していたら、後ろからビックリしたような声が

聞こえた。

「お兄ちゃ、じゃなくて、お姉ちゃん!」

TS〃ヒロイン〃ちゃんが振り返ったので、私もつられて振り返る。背の低い美少女がうれしそうに両手を振っている。年齢は私よりちよつと下かな。たぶん、TS〃ヒロイン〃ちゃんの妹ちゃんだろう。

TS〃ヒロイン〃ちゃんがキレイ系清楚美少女だとすると、妹ちゃんはカワイイ系小動物美少女だ。わしやわしやと頭を撫でて可愛がりたくなる感じ。

妹ちゃんの隣には、両腕に美少女をぶら下げた少年が立っていた。二人を振りほどこうとしつつ、気まずそうに辺りを伺っている。十中八九、親友〃主人公〃くんと、〃ヒロイン〃ちゃんたちだろう。

妹ちゃんに会釈をしながら、TS〃ヒロイン〃ちゃんに小声で話しかける。

「これって、ミサンガの効果ってこと?」

「……そうだとしたら、喜んでいいのやら、悲しんでいいのやら……」

まあ、親友〃主人公〃くん一人だけに遭遇するんじゃないかと、〃ヒロイン〃ちゃんたちも合わせて遭遇するということは——うん、TS〃ヒロイン〃ちゃん的にハーレムがあたりかどうかもなあ。

ちようどいいので、ここで解散することになった。

TS“ヒロイン”ちゃんは、妹ちゃんたちといっしょに夕飯を食べて帰るらしい。ナンプまみれになっていたTS“ヒロイン”ちゃんを独りで帰して大丈夫かと心配していたので、これで一安心だ。

「いっしょにご飯食べませんか？」と妹ちゃんに誘われたけど、遠慮した。あの面子で何を話せと。やめなさい、TS“ヒロイン”ちゃん。そんな目で見られても行きません。帰るの遅くなるし。

そんなことを話しながら、エレベーターの到着を待つ。私は地下街を通って駅へ。みんなは、10階のレストランフロアへ行くそうだ。

ふと、TS“ヒロイン”ちゃんが「そうだ」と声を上げた。

「これ、僕の間ももらってよ」

しゅるりと自分の腕からミサンガをほどくと、私の手首に結わえる。

「僕には引き寄せ効果があっても意味ないって分かったし」

「ええっ?」

結び終わったときに、ちょうど上へ昇るエレベーターがやってきた。ミサンガを返す間もなく、TS“ヒロイン”ちゃんたちはエレベーターに乗り込む。TS“ヒロイン”ちゃんはバイバイと手を振りながら笑顔でこう言った。

「これで効果が二倍だね!」



そ、そんな単純計算でいいんだろうか……？  
困惑した私の顔が、閉じていくエレベーターのドアに反射して映っていた。

## 第三十五話 エロゲの世界の制服

土曜日の夕方。駅ビルの地下街には、ちらほらと学生の姿が見える。帰宅途中に駅ビルへ立ち寄って、遊んで帰るのかもしれない。

学生は、遠くから見てもすぐ分かる。赤い制服、青い制服、緑の制服などなど。カラフルで華やかで、めつつちやくちや目立つからだ。

男性向けエロゲみたいなことが起きる世界の学生服は、とてもとても個性豊かだ。アイドルが着ている学生服っぽい衣装を想像すると分かりやすいかもしれない。

基本的にはピッチリで下はミニスカートロングスカートの制服もわりとある。ひざ丈スカートの制服がいちばん少ないかもしれない。そして、おっぱいを強調するデザインが多い。あとは、ハイウエストだったり、パフスリーブだったり、レースやフリルがふんだんに使われていたりする。

リボンがヒラヒラしていたり、パニエでフワフワしていたり、女子的にもポイントの高い可愛さが備わっている。こういう服、前世からずっと着てみたんだよねえ。毎朝、制服に袖を通すと心が弾む。……まあ、着たり脱いだりするのとお手入れが大変だけだ。

前世の感覚でいう普通の制服——シンプルなブレザーやスタンダードなセーラー服に近いデザインだし、基本的にはピッチリで下はミニスカート。もある。けれど、わりと珍しい。その珍しきで、けっこう人気なんだそう。じわじわと普通の制服を採用する学園も増えていると聞く。制服で通う学園を決める人もいるもんなあ。

ちなみに、この世界の制服も、前世と同じで軍服から発展している。ただ、この世界の軍服、めつつつちやくちやくらびやかなのだ。正装や礼装だけでなく、通常時の軍服もすぐくおしやれなデザインで、カッコいい。オタク心に刺さる。

歴史上の有名な軍人さんってほしい”ヒロイン”だもんねえ。彼女たちを引き立たせるための衣装となると、きらびやかになるのかもしれない。軍服から発展した学生服も、自然と華やかなデザインになったのだろう。たぶん。

まあ、エロゲの制服が個性豊かなのは、現実に存在する学校の制服と被ったときに問題になるからという説が……げぶんげぶん。

というわけで、休日目の街で制服を着ていると、とんでもなく目立つ。学園によつては絡まれる。

……あんなふうには。

「山の上のお坊ちゃんがお！　こんなところに何のようだあ？　ギヤハハ!!」

山の上にある上流階級しか通えない全寮制の学園の制服を知ってるヤンキーってな

に？ 私は取り巻きハーレム先輩がそこに通うって聞いたから、お昼ご飯の会のみんな  
でホームページ見て知ってるけど。

……あの“お坊ちゃん”を狙って声をかけている可能性を考慮しておこう。

カバンから防犯ブザーをスツと取り出して構える。

——ヤンキーの方と相性がいい（エロゲ的な意味で）なんていう展開じゃありません  
ように。

## “女主人公”編

## 『選択肢：初めてのことだ』

学園のある山の上から、街に下りてきたのはいつぶりだろう。たしか、夏休みにメイドサークルのみんなまで出かけて以来のはずだ。実際の日にちだと半年ぶり、なのか。ループしているので、体感だともっと前のことに感じる。

駅前のバスターミナルで降車する。立ち並ぶ背の高いビル。行き交う大勢の人。閉鎖的で物静かな山の上の学園と違い、なんとも開放的で賑やかだ。今までのループとまったく違う景色に、自然と心が躍る。

今日やることをリストにした紙を取り出す。占い師、厄除け神社、都市伝説、ネット怪談。でたらめなラインナップだが、もう藁にも縋る思いだ。

何回も一週間をループし続けているが、何の手がかりも見つかっていない。何がきつかけでループしているのかも、実はよく分かっていない。ただ、何かしらのルール——いや、誰かしらの思惑があることには、気づいていた。

一週間と経たずに月曜日に戻されるなど、意図的にループさせられたような覚えがあるからだ。

学園から移動したことで、その“誰か”を引きずりだすことができないか。そんな期待もあった。

「よし、行くか」

タイムリミットは日暮れまで。一分一秒たりとも無駄にはできない。



とくに何もなく時間だけが過ぎていった。日暮れは、もう目の前だ。

俺は、駅前のバスターミナルに行くフリをしながら、駅ビルの地下街を歩いていた。焦る気持ちをなだめつつ、少しずつ人のいない方へ移動する。

——後をつけられている。

昼過ぎくらいから、見知らぬ男たちに尾行されていた。人数は三人。彼らは、このループについて何か知っているのだろうか。聞き出さなくては——

「山の上のお坊ちゃんがよお！　こんなところに何のようだあ？　ギャハハ!!」  
と、意気込んでいた。数秒前までは。

ひと気のない地下街の細い通りで、ようやく接触してきたかと思ったらコレだ。言動から察するに俺の制服を見て恐喝しようと思ったヤンキーの集団らしい。

深々とため息をつく。なんとも衝動的な犯行だが、退路の断ち方が上手く、逃げるこ  
とが難しい。集団で一人を囲むことには慣れていようだ。俺みたいな学生をカモに  
しているのだろう。

ループする度に色々あったので、こんな半端なヤツらにスゴまれても怖くない。しか  
し、そんな俺の態度がしやくに障ったらしい。

「なんだよその顔は！」

思いつきり腹を殴られてしまった。勢いに負けて床に倒れる。ループによって精神  
は鍛えられているが、肉体はまったく鍛えられていない。男たちの下卑た笑いが上から  
降ってくる。

にしても、制服で目を付けられるなんて。そこまでは気が回っていなかった。着る服  
を考える手間を惜しんで制服を着てきたが、失敗だったな。次のループでは、そこにも  
気を配らないと。

——次？

自分の思考に呆れてしまう。いつからか、ループする前提でものを考えるようになって  
いた。

——いやだ。

「俺はもう、ループなんかしたくない……！」

突然、けたたましいブザー音が辺りに響く。男たちは驚いて辺りを見回す。曲がり角の向こうでブザーが鳴っているのが分かった。この騒音だ。すぐに人が集まってくるだろう。

リーダー格の男が苛立たしげに舌打ちをして、音の発信源を見てくるよう指示した。俺の前にいた男が、曲がり角へ向かう。しばらくすると何かを踏み砕く音がして、ようやくブザー音が止んだ。

「その君！、いったい何をしている!!」

「やべえ！ サツだ!!」

そう叫ぶ男の声と走り去る足音。遠くから「止まりなさい!」という掛け声と複数人の足音が近づいてくる。残りの二人は顔を見合わせると、俺を置いて我先に逃げ出した。

俺もさっさと逃げないと。何も言わずに外出してきているから、警察から家や学園へ連絡が入ると困る。立ち上がろうと地面に手をつくが、体に力が入らない。思ったよりダメージが大きかったらしい。

コツと誰かが通りに足を踏み入れた。思わず身を固くする。

「あ、立たないで。そのまま端に寄ってください」

そう声をかけられ、看板の陰に押し込まれる。うづくまる俺の隣に、声をかけてきた



女の子も座り込んだ。バタバタと足音が通り過ぎていく。

「二つ隣の通りが事件現場だつて通報してあるので、少しの間は大丈夫です」

まじまじと女の子の顔を見る。素朴な雰囲気の可愛い女の子だ。学園では男女ともにキラキラした顔立ちに囲まれているので、とても親しみやすさを感じる。ただ、どこか疲れた目をしているのが気になった。

「君は……」

「おつ、話せるくらい回復しました？　なら、ここを離れましょう」

たしかに、こんなところで話すこともないか。女の子の言葉に頷いて、よろよろと立ち上がる。彼女は俺の上着を手早く脱がせると、持っていた大きな紙袋に突っ込んだ。セーターだけだと少し冷えるが仕方ない。

「被害者は一人だつて言つてあるので、二人で並んで出て行つたらごまかせると思います」

女の子の言う通り、とくに引きとめられることもなく地下街を抜けることが出来た。駅ビルにある憩いの広場へ移動する。ベンチに腰を下ろし、ようやく一息つくことができた。

胸元にぐいっと紙袋を押し付けられる。

「じゃあ、お気をつけて」

「まっ、待ってくれ！」

そのまま立ち去ろうとする女の子の手をつかむ。

「君はいったい何者なんだ！ このループする一週間と関係があるのか!？」

## 第三十六話 バッドエンドのその後

私とお坊ちゃんとは、どうにかこうにか地下街を抜け、駅ビルの敷地にある憩いの広場へ移動した。ここまでくれば、もう大丈夫だと思う。

お坊ちゃんとは、ベンチに腰を下ろしグツタリしている。助けた謝礼をせびるつもりもないので、ブレザーの入った紙袋を渡して帰ろう。

「まっ、待ってくれ！」

お坊ちゃんの手が、私の手をつかんだ。ビリツと首筋が痺れ、一瞬だけ左目の視界が赤くなる。目尻から涙が流れたように感じた。しかし、頬は濡れていない。

パチパチと瞬きをする。何だったんだと首を傾げている間にも、男の子は話を続ける。

「君はいつたい何者なんだ！ このループする一週間と関係があるのか!？」

——ループ？ なにそれ??

えっ、もしかして……この人、ループものの“主人公”なの?? あっそういえば、ヤンキーに囲まれてる時に「ループしたくない！」的なことを叫んでいた気がする。

——ループものかあ。

ノベルゲームというジャンルは、ループものと相性がいい。そもそも、ノベルゲーム自体がループものみたいなものだと思うている。違うルートを見るために、プレイを繰り返したり。トゥルーエンドを見るために、特定のエンドを見なければならなかったり。ノベルゲームとループものの違いは、登場人物たちにループしている自覚がないかあるかだけかもしれない。

しかし、彼がループ“主人公”くんだとしたら、周りにヒロインがいないのが気になる。先ほど会った親友“主人公”くんのように、いつでもどこでも“ヒロイン”が隣にいるのが、主人公の常なのだ。

堰を切ったようにループ“主人公”くんは話し続ける。

ふむふむなるほど。なぜループしているのか分からない。ループするキツカケも分からない。けれど、誰かの意図を感じる、と。

ほうほう。メイドサークルのメンバーといるとループが早まる、ねえ……。

ふと思いつくことがあったので、ループするより前のことを細かく聞かせてもらおう。そして、気がついた。

——ああ、これ、バッドエンドだ。

そりゃ、“ヒロイン”が周りにいないはずだ。

ループするより前の話に出てくる“ヒロイン”の頻度から察するに、義理の姉“ヒロ

イン” ルートに入ってたけど何かの選択肢をミスったんだな、彼。で、延々と同じ一週間を繰り返すバッドエンドに入ってしまった、と。

ループし始めてから、不自然なくらい義理の姉” ヒロイン” の名前が出てこないんだもんなあ。そういうことなんだろう。

エロゲには多種多様なバッドエンドも実装されている。選択肢をミスした結果、ヒロインとの恋愛に発展しませんでした！ バッドエンド!! なんていうのは微笑ましい方で。

主人公やヒロインが悲惨な目に遭うバッドエンドも多い。けっこうな確率で死んだり殺されたりする。ヒロインはそれに追加して陵辱されたり寝取られたりする。グロテスクだったり鬱展開だったりなバッドエンドもある。

……ここは、男性向けエロゲみたいなことが起きる世界なわけで。

“主人公”とか”ヒロイン”ってマジで大変だなあとしみじみ思う。え？ これが私に待ち受ける未来?? ……ハハ。

コホン。

幸か不幸か、ここはゲームじゃなくて現実なので、バッドエンドになったらタイトル画面に戻されるなんてことはない。他のバッドエンドならともかく、ループ”主人公”くんはまだ取り返しがつくのでは——いや待て。

バッドエンドで“主人公”を無限ループにぶち込む義理の姉“ヒロイン”てなんやねん!! どう考えてもクレイジーでサイコなヤンデレやんけ!!!

慌てて周囲を確認する。それっぽいな人の姿はないけど、たぶんどこかで見ているのだろう。ヤンキーの次はヤンデレとか、聞いてませんけど?!?!?

これまでのループから察するに、私はたぶん義姉“ヒロイン”さんの許容範囲をすでに超えている。このまま何もしないでいると、ロクなことにならない気がする。

どうする? まずは相手がどんな感じなのか分からないと対応ができない。とりあえず、お義姉さんについて情報を集めてみよう。

「え、義姉さんの話? いいけど……ループに関係あるのか?」

「まあまあまあ、聞かせてください」

ループ“主人公”くんは義姉“ヒロイン”ルートに入ってから失敗しただけあって、かなり義姉“ヒロイン”さんに心を惹かれていたようだった。本人は気づいてないけど。

ちなみに、義姉“ヒロイン”さんは、素晴らしいご令嬢で、名家の跡取りに相応しい品格の持ち主だそうなの。しかし、両親の再婚でループ“主人公”くんが跡取りになっちゃった。ループ“主人公”くんが跡取りに指名された理由は分からないらしい。

「だから、俺は義姉さんに嫌われてるんだ」

「いや今までの話を聞くに、そのお義姉さんはあなたのことがす「わ——っ!?!」  
私の声をかき消すような大声を上げながら、真っ赤になった女の子が草むらから飛び  
出してきた。

## 第三十七話 ループの真相

「義姉、さん……？」

ループ「主人公」くんがポツリとつぶやく。ご令嬢にあるまじき登場の仕方だったけど、この人が義姉「ヒロイン」さんか。やっぱり近くにいた……わりにはめっちゃ息を切らしてるな？見回りの教師にとっ捕まっていたら、自分の能力が無理やり解除され、息せき切って走ってきた。ちやうど自分の気持ちを暴露されそうになっていたため、思わず飛び出してしまった。ちなみに見回りの教師はお孫さん師範代。

「はあ、はあ。な、なんなんですか！ 貴女!!」

義姉「ヒロイン」さんは、チラッとループ「主人公」くんを見た後、私をキツと睨んだ。

「わたしと弟くんの制服デート制服デートだと思っているのは義姉「ヒロイン」だけ。なお、制服を着ていたから見回りの教師に呼び止められた模様。に割り込んだあげく、わたしの能力を打ち消すなんて……!」

打ち消した覚えはない、が。

「……ええっと。それは、ループの犯人はあなただという自白ですかね？」



「はっ!？」

いやそんな驚かれても……すげースムーズに自白されて、驚きたいのはコツチなんだけど……色んな意味でゆかいな人だな、義姉“ヒロイン”さん。ループ“主人公”くんの語ってくれたご令嬢らしさが消し飛んでるけど。

「そんな、義姉さんが!？」

「ぐううっ! 図つたのね!？」

何も図つてないです。あなたの自爆です。

「義姉さん……」

繰り返す一週間でたくさんつらい目にあつてきたらしいループ“主人公”くんは、信じられない——いや、信じたくないといった顔をしている。

「っあ、貴方が悪いのよー。わたしを選んでくれないから!!」

義姉“ヒロイン”さんは、つらつらと無限ループの真相を話してくれた。なんでこういう時の犯人って事細かに説明してくれるんだらうね。助かるけど。

——血縁関係どうのこうなので、めちやくちややこしかつたです長いので後書きにまとめました。いちおう読まなくても大丈夫なようにしてあります。読みたい方はどうぞ。

簡単にまとめると、無限ループに陥っていた原因は、ループ“主人公”くんと義姉“

ヒロイン“さんの能力が同時に発動してバグっていたからだそうだ。義姉“ヒロイン“さんがループを発動させた後、ループ“主人公“くんの能力が覚醒。

二人とも“時間ループさせる能力“だったばかりに、変に作用して無限ループに入ってしまった。

今は、義姉“ヒロイン“さんの方のループ能力が打ち消されてるらしい。理由は分からないけど能力を使って『私』を殺そうとしたので、一人称『僕』おじさんの“血液“が発動した。ループ能力が打ち消されたのは、その余波。後は、ループ“主人公“くんが自分の能力を解除するだけだという。

なるほどなあ。主人公にも特殊な能力があるタイプだったのね。把握した。他のルートだと、“ヒロイン“に避けがたい悲しい運命が待っていて、それをループ“主人公“くんの能力でなんとかするっていう展開になってそう。

——ところで、ふんわりボカしてたけど……義姉“ヒロイン“さん、ループ“主人公“くんを殺してるよね？ ループの発動条件、ループ“主人公“くんの死亡だよな??

おい、目を反らすな、おい。

## 第三十八話 エロゲにおける別ルートヒロインの役割

ループ“主人公”くんは、悄然として俯いている。

「俺、そんなに嫌われてたのかあ」

そうなるよね。義姉“ヒロイン”さんはオロオロして、助けを求めるように私を見ている。いやいや、そんな目で見られなくても。自らの行いの結果ですがな。

ループ“主人公”くんはゆっくりと顔を上げた。義姉“ヒロイン”さんは、さっきまでうろたえぶりが嘘のようにキリツとした顔をしている。

……ここまで話がこじれた理由、それかあ。ループ“主人公”くんは、義姉“ヒロイン”さんの令嬢然としたとこしか知らないのね。

「なあ、義姉さん。……義姉さんは、何が目的でこの一週間をループしてたんだ？ ループの能力なんて使わなくても、俺にできることなら協力したのに……」

泣きそうな顔で微笑むループ“主人公”くん。記憶をいじられてるうえに、何回か殺されてることがほぼ確定しててこの対応。

かなり好きじゃん。

私はすぐくドン引きしてるぞ。殺人は、恋や愛が理由でも、やっちゃいかんと思うぞ。

義姉“ヒロイン”さんは、厳しい表情のままだ。ただ、何かを言おうとして言えなくてを繰り返している。ははくん、さてはこのヤンデレ、コミュニケーションがド下手クソだな??

ひっそりとため息をつく。

——わりと自覚はあるんだけど。

私は“ヒロイン”に甘い。

だつてさ、たくさんエロゲをプレイしてきたということは、エロゲの本数以上のヒロインと出会ってきたということ。ヒロインという存在に、とてもとても思い入れがあるのだ。

もちろん、この世界は『男性向けエロゲみたいなことが起きる』というだけの現実で、ゲームじゃない。分かっている。けど、どうにも割り切れない。これもまたゲーム脳の一種かもしれない。

……いちばんの被害者ループ主人公は殺されたことや記憶をいじられたことを気にしてないっぽいし。私は被害に遭ってないし殺されかけてましたが、当人は気づいてません。二人の仲を手助けしてもいいよね？

あとね、なるべく早く事態を解決しないとヤバい気がするんだ！　分かりやすく言う  
と義姉“ヒロイン”さんの目にハイライトがなくなってきた!!　やめなされ！　懐

に手を伸ばそうとするここでループ。主人公。くんを殺したら、彼のループ能力が発動して、また始めからやり直せる。と考えていた。懲りてない。のはやめなされ!!

「はい!」と元気よく手を挙げ、二人の注目を集める。

義姉「ヒロイン」さんに向かって「ちよつといいですか」と声をかけた。返事はない。沈黙は肯定だと判断して話を進める。

「何度繰り返し返しても、記憶をいじっても、望む結果は手に入らなかったんですよね? 自分の気持ちは伝わらなかつたし、相手の気持ちも分からなかつたんですよね?」

そんなスゴい顔でにらまないでください。イヤミじゃないです。事実を言ってるだけですよ。

「じゃあもう、方法が間違ってるんですよ」

「——方法、が?」

なんでそんな思ってもみないことを言われたって顔をしてるんだろう。諦めろとも言われると思っただらうか。

そりゃあ、まったく脈がないなら「諦めた方がいい」って私も言ったと思う。ただ、プレイヤー目線岡目八目でイケるんじゃない? っていうのがなんとなく分かるんだよね。

「別の方法を考えないと」

そう伝えると、義姉「ヒロイン」さんは小さな声で「別の、方法」と復唱した。

「そうだよ、義姉さん。そんな方法じゃなくて、もっと違う方法で、俺たちは分かりあえる」

ループ“主人公”くんは、決意に満ちた目で、しっかりと義姉“ヒロイン”さんを見据える。

「俺、義姉さんが何を考えてるか、分からない。——だから、話して聞かせてほしい。義姉さんのこと。それで、俺の気持ちもちゃんと話すから、聞いてほしい」

義姉“ヒロイン”さんの頬が赤らみ、瞳に光が戻った。小さく、でもしっかりと「はい」と答えたのが聞こえた。

さっすが“主人公”！ きっちりバシツと決めてくれるなあ！！

にやにやしながら、うんうんと一人で頷く。この感じだと大丈夫そうだ。二人の空気を邪魔しないように、コツソリと憩いの広場を抜け出した。

はくく！ いいエロゲイベントだった……！！

——エロゲの類型として、別ルートのヒロインが攻略のサポートに回ることもある。登場させるキャラを減らすことができるし、キャラの掘り下げにもなる。まさしく一石二鳥。

まあ、これは例え話で、私はヒロインなんて柄じゃない。けど、誰かの助けになれたというのは普通に気分がいい。

……人を殺すことに抵抗がない人間を野放しにしているものかという不安は残るけども。そこはもう、めつちやがんばってくれ、ループ”主人公”くん。

——私もがんばるから。

素晴らしいエロゲイベントを浴びて、いい気分転換になった。なんだかスッキリした気分だ。

ここまで来たら仕方が無い。腹をくくって、“女主人公”になった後の対策に力を入れよう。さて、何から始めようかと思っていたら、見覚えのある黒づくめの男性がビルの陰からぬつと現れた。

「お、いたいた」血液”が発動して戻ってきたから、念のため様子を見に来た。」

い、一人称『僕』おじさん!? 素晴らしいタイミングで現れたな!!

「ちようどいいところに! また”アレ”をお願ひしてもいいですかね?!”

あいさつもそこそこに頼み込む。なんで突然やってきたのか聞くのも後回しだ。だって、快樂耐性を高めるのは”女主人公”にとつて必要不可欠なんだもん。

「たしかに、そろそろいいかもね。もう前の感覚は忘れてるだろうし」

おじさんは、上から下までしげしげと私を観察した。

「おお、すこおーしただけけど、”格”が上がってるおじさんの”訓練”と毎日の稽古、媚薬&中和剤、ミサンガ×2の積み重ねで”格”が上がってしまった。」

「え？」

「僕とセックスするのは無理だけど、これならもっとキツくしても大丈夫だ」

「いや、ちよ、まつ……」



——キツすぎて死ぬかと思いました。死んでないのが不思議です。

『エピローグ エロゲの世界は女主人公に厳しい編』に続く



## エロゲの世界は女主人公に厳しい

——そして、また春がやってきた。

両親はそれぞれ海外出張へ。私は一軒家で一人暮らし。……うん、準備万端って感じだ。

いつ来るか、いま来るか……できるなら来ないでほしいとソワソワしながら始業式を終え、帰り道。晩ご飯の買い出しにスーパーへ寄ったところ、空から振ってきた赤と青、二つの水球に衝突され、私は死んだ。十数年ぶり二回目の死だった。

しかし、青い水球の中身と同化することで、辛うじて命をつなぐことができた。水球の中身は、エリザベティナ・クロモドーリスと名乗る宇宙人。同化してるから見た目は分からないけど、たぶん、ウミウシ。語尾がウミかウシだから。

……私、いま、お腹の中にウミウシがいるのかあ。

お腹、とオブラートに包んで言ったが、子宮だ。いちばん損傷が少なかった内臓を起点に、私の体を修復しているそうな。……子宮が無事だったのは当たりどころの問題で、腹の脂肪が厚かったからじゃないよね？　ね??

(もろもろの説明は後でするウミ！　いまは戦ってほしいウシ！)

「どうやら、エリザベティナさんは追われているらしい。彼女(?)と同化している私も、これからは追われる対象になるわけで。」

「——そっかあ、私、変身ヒロイン“女主人公”だったのなあ。」

しみじみしていると、赤い水球から現れたヒトデのバケモノが襲いかかってきた。チュートリアル戦闘ですね。分かります。逃げることは難しそうだ。言われるがまま、変身の掛け声を叫ぶ。

「セツト・セイル！」

まばゆい光に包まれたかと思うと、私の姿は瞬時に変わっていた。

「……まあ、そうなるな。男性向けエロゲみたいなことが起きる世界だもんな。基本はピッタリしたボディースーツよな。」

「あ、でも、袖や裾がフリフリしてて可愛い。変身ヒロインと魔法少女とウミウシを足して割った感がある。」

体の奥から力が湧いてくる。グツと拳を握り締め、ヒトデのバケモノに対峙した。



「…………あの、エリザベティナさん？」

(ベティでいいウミ)

(じゃあベティさん。なんか、ものすつごく、疲れてるんですけども……)

ちよつと危なかつたけど、ヒトデのバケモノを退けることができた。ただ、戦闘後の疲労感がヤバイ。歩くのもやつとだ。買い物をして帰る余裕はない。晩ご飯は冷凍野菜と袋ラーメンにしよう。

(いま、アナタの生命維持と肉体修復に、ウチの持つほとんどのエネルギーを使つてるウミ。だから、戦いで使えるエネルギーがギリギリなのウシ)

(つまり?)

(戦いでエネルギーをいっぱい使うと、生命維持と肉体修復にも影響が出ちゃウミ)

これ、疲れてるんじゃないやなくて死にかけてるのか。なるほどなあ。なるほどじゃない。

(でもでも、安心してほしいウミ! ウチは、触れた相手からエネルギーを回収することができるウシ)

(ちなみに、相手に触るって私が触ればいい感じ?)

(ウチが直に触らないとできないウミ)

いや、あなた今お腹の中にいますやん。直に触るの無理ですよ。その点を指摘すると、ベティさんはすっかり慌てふためいてしまった。

(あわわわ! ど、どうしよウミ!! エネルギーを回収できないウシ!!)

——私には分かる。どうすればエネルギーを回収できるか、前世の記憶が知っている。

セックスやな。

よし、今からエロゲの設定としてこの状況を理解していこう。

追手は、どうやらベティさんの身柄を確保したいようだ。さっきの戦闘でヒトデのバケモノに捕まりかけたとき、私の体内からベティさんを取り出そうとしていた。今回は未遂で済んだけど。

つまり、戦闘で負けると、ベティさんを取り出すためになんやかんやを突っ込まれる。これが、敗北エロ回想（シーン）になるんだらうけど、戦闘に逆転勝利する布石にもなっている。ベティさんを取り出すためには、ベティさんに触らないといけないからだ。敗北エロ回想（シーン）中にエネルギーを回復できれば、必殺技が撃てる。

まとめると、戦闘に負けても追手の撃退はできる、と。そりやあね。変身ヒロインにはじわじわと堕ちていってもらわないと困りますからね。戦闘回数は多からうよ。

ただ、負けても大丈夫だけど、勝つてもうまみがありません。エネルギーが消費されるだけで、エネルギーを回収できないからだ。どんどん負ける可能性が高まっていく。

最終的には、敗北エロ回想シーンというわけだ!!! エロゲとしてうまいゲーム性しやがって

くく!! ちくしよくく!!!

——いや、待てよ。

そうだよな。ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界だもんね。

(ベティさん、ベティさん。エネルギーの回収って、追ってきてる相手からしかできないんですかね?)

(そんなことはないウミ。生命体が相手だったら大丈夫ウシ)

セックスやな。

つまり、敗北エロ回想シーンを避けるためには、エネルギーが切れる前に誰かとセックスすればいい、と。

ちなみに、勝ってもセックス、負けてもセックスは、商業向けの変身ヒロインエロゲで見られる王道展開であり、同人エロゲの定番からはズレている。

同人エロゲの“女主人公”じゃなかったんだくく! よかったよかった!! 何もよくないが? どうあがいても変身ヒロイン“女主人公”はえげつない陵辱と隣り合わせだが??

……まあ、人間とのセックスでもエネルギーが回収できるだけマシかあ。

(うん、エネルギーの回収についてはなんとかなると思う)

(ほんとウミ!? スゴいウシ!!)

ベティさんの声が弾む。どうにかこうにか、戦い続ける算段がついた。けれど、なぜ追われているのか、追ってきている相手は何者なのかは聞けていない。

というか、聞いたけれど、ベティさんは教えてくれなかった。(ウチが追われている理由は聞かない方がいいウミ)と言われた。

(——何も知らなければ、アナタは巻き込まれただけの被害者で済むウミ。でも事情を知ってしまったえば、向こうもアナタを放っておけないウシ)

そ、そんなに重たい事情なんですか。

(迷惑をかけて、ほんとにごめんさいウミ。アナタの体の修復が終わったら、ウチはすぐこの星から去るウシ。だから、少しの間だけ、アナタといっしょに居させてほしいウミ)

ちなみに、少しの間がどれくらいになるかは、回収できるエネルギーの量次第だそう。最短で二ヶ月、最長で一年らしい。

(うん、よろしくね、ベティさん)

(よろしくウミ! ええつと……あつ、アナタの名前を聞いてなかったウシ!)

(私の名前は——)

## “女主人公”編 個別ルート

### 個別ルート（プロット）選択肢

（よろしくね、ベテイさん）

（よろしくウミ！ ええつと……あつ、アナタの名前を聞いてなかったウシ！）

（私の名前はゲーム特有の機能である名前入力。エロゲにおいても名前入力や名前変更が実装されていることは多い。名前入力の対象は、たいていが男主人公。だが、同人エロゲには女主人公の名前を決められるものもある。——ともせ点瀬、）

- ① 星音 シオン（一人称『僕』おじさんルート）
- ② 璃子 リコ（取り巻きハーレム先輩ルート）
- ③ 未明 ミア（お孫さん師範代ルート）
- ④ 百合香 ユリカ（TS予定イケメン／TS“ヒロイン”ちゃんルート）
- ⑤ 唯一 ユイ（ベティルート）
- ⑥ 多智乃 タチノ（逆ハーレムルート）



改めて自己紹介をする。握手はできないので、そつとお腹に手を置いた。なんとなく、お腹があつたかい気がする。

……オタクとして、いろいろと履修してきているので、ベティさんが極悪なヤバイ宇宙人であるパターンももちろん考えている。ただ、生き死にを握られている以上、ベティさんの言う通りにするほかない。

それに、なんとなくだけど、ベティさんは悪い宇宙人じゃない気がする。……そう思いたいだけかもしれないけど。



ノロノロとした歩みだったけど、夜までに帰宅することができた。誰もいない家に「ただいま」と声をかける。死んだし、生き返ったし、戦ったし、死にかけてるしで、なんだかもうクタクタだ。

（そういうえば、さっきの戦闘でけっこうエネルギーを使ったウミ。できるなら、エネルギーを回収した方がいいかもウシ）

——さようでございますか。

ゲームで言うところのチュートリアル戦闘とは言え、はじめての実戦。けっこう苦戦

したからなあ。稽古で体を動かしてたからなんとか動けたけど、運が悪ければ普通に負けてたかもしれない。最終的に、なんかこう、必殺技みたいな使ったし。

エネルギー回収かあ……。

人間とセックスか、宇宙人（見た目はバケモノ）とセックスか。とんでもない二択だけど、エロゲならよくある話だ。

もちろん、ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界で、しかも私は変身ヒロイン“女主人公”になってしまったので、夜に繁華街や公園へいけばセックスの相手なんていくらでもいる。

が、ただでさえ死にかけているのに、うかつな行動をして痛い目には遭いたくない。変身ヒロインとえげつない陵辱はワンセットみたいなどころがある。触手、洗脳、催眠、調教、公開レイプなどなど。あと、敵にやられるだけじゃなく、助けるべき一般人に犯されることもあったりする。通称、クス市民。すごいネーミングセンスだよ、クス市民。

もちろん、ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界なので、そういう人々もいるんだろう。今まですっかり自衛してきたので無事だったけど、今後はそうもいかない。この世界は、“主人公”と“ヒロイン”にマジで厳しい。

「……」

いろいろと思いつく手段はある。ただ、何をどうがんばっても自分以外の誰かに迷惑をかけることになりそうで、どうにも二の足を踏んでしまう。……どうしたもんかなあ。

# 一人称『僕』おじさんルート（プロット）

◆ 名前つけルール：天体（基本的に中国系）

変身ヒロイン〃女主人公〃星音シオン

一人称『僕』おじさん 永黎ナガレと天テンコウ（〃血液〃）

おじさんの推し〃主人公〃泰一タイチ

おじさんの推し〃ヒロイン〃夕星ユウ

## ◆ プロット

どうしたもんかなあと悩んでいる直後、自宅に來客が。ドアを開けると一人称『僕』おじさん——永黎ナガレが立っている。ふつうにこわい。

ナガレは宇宙から水球が飛來したことを把握しており、「大丈夫そうだけど、いちおう確認しとくかあ」って感じて様子を見に來た。他のルートだと「大丈夫そうだなあ、うん」って感じて來ない。

変身ヒロイン〃女主人公〃——シオンから事情を聞いたナガレは、血液を操作して子宮の中のベティに触れ、エネルギー回収に協力することを了承。エネルギー回収問題が

速攻で解決するルート①。

ナガレの“血液”を介して、生命維持・肉体修復・戦闘に必要なエネルギーを充分に回収。あとは時間経過を待つだけとなった。

お礼に、しばらくの間ナガレを泊めることに。ナガレは基本的に無職&無宿。最近はナガレの推し“主人公”であるタイチの家にいることが多い。

数日後の放課後、またしても追手と戦うことになったシオン。観戦者の緊張感の無い声援を受けながらの戦闘。シオンは、昨日よりも体がよく動くことに疑問を覚えつつも快勝。

そこへ、“主人公”のタイチと“ヒロイン”のユウがやって来る。「ちよつと出かけてくる」と言つて戻つてこないナガレを心配して探していたらしい。ナガレの扱いはだいたい猫のそれ。

タイチとユウは、ナガレがシオンの名前を覚えていることに驚愕する。いったい二人はどういう関係なのかと興味津々。シオンとナガレは、お互いを指して「命の恩人」という重いのか軽いのか分からない返答をする。

ナガレは上機嫌だった。推し二人がわざわざ探しに来てくれて、テンション爆上げでウキウキだ。その時、シオンの体が急に動き、ナガレの体を突き刺した。異様なほどに血が噴き出す。

実はベティ、スピリチュアルなエネルギーも回収できるトンデモ能力そこに“ある”ならエネルギーとして回収できるウミ！を備えていた。そして、ナガレの“血液”を介してエネルギーを回収した際、“血液”に施していた“禁”もエネルギーとして回収してしまっていた。

“禁”が緩んだ“血液”——テン天コウはナガレの隙を突いて“血液”の一部をシオンの体へ移す。肉体の修復を行っていると偽装してベティとナガレの目をかいくぐり、シオンの体を内側から自らの眷属に改造していた。

簡単に言うとは、外側に露出している部分は人間で、内側にバケモノが混じっている状態。よほどの実力者でも見抜くことは難しい。

で、ナガレへの奇襲につながる。

テンコウは、少しでも多くナガレから“血液”を取り戻して逃げるつもりだった。状況を把握したナガレは、逃げの一手を打とうとするテンコウを見て、操られているシオンを無傷で助けることを諦めた。

「後でちゃんと直すから」と断ってから、シオンの体を切断。ついでに体内からテンコウの“血液”を残らず回収。シオンは、数日ぶり三回目の死を迎えた。ナガレは、タイチとユウからしこたま説教された。

ベティとナガレのおかげで、またまた生き返ったシオンこの二人、二回目の死と三回

目の死の死因でもある。それはいいのだが、ナガレが妙にソワソワしている。チラチラ見てくる。

話を聞くに、一連のあれそれでシオンは肉体修復を終えると人間でなくなってしまう——“ナガレと同じ類の化物”になっってしまうらしい。どうやっても肉体を人間の組成に戻すことが出来なかったと謝罪するベティとナガレ。ついに行くところまで行ってしまったなど遠い目をするシオン。

変身ヒロイン人外” 女主人公”——属性がモリモリである。

まあ、追手との戦いがラクになるのはいいことだと前向きに考えることに。

——だがしかし。

なぜか追手との戦いにナガレが出張ってくる。ナガレが追手を瞬殺して、シオンをチラチラ見てくる。シオンは、昨日までとはまったく違うナガレの態度に困惑する。

ただまあ、倒してもらってラクできたのはたしかなので、「ありがとうございます」とお礼を言う。照れたように頬を緩ませるナガレ。目を白黒させるシオン。

ぶつちやけると、“ナガレ自分と同じ類同の化物存在”に初めて出会い、同情なのか愛情なのか、よく分からない感情友情でないのは分かる。タイチやユウに対して抱くのと違う感情だから。が芽生えていた。

テンコウがベティとナガレの目をごまかすために行った偽装——外側が人間で内側

がバケモノ。その肉体改造を人間の技術で施されたのがナガレである。分類で言うと強化人間。なんやかんやで所属先を壊滅させ、世界を放浪していた。

生まれも育ちもロクでもないナガレは、初めての感情をどう扱っていいか分からず、「お前はシヨタかー」と叫びたくなるようなないじらしい行動をしまくる。ギャップ萌えにもだえ苦しむシオン。

三ヶ月後、シオンは肉体修復を終えてベティと別れを済ませた。

——が、ナガレは変わらずシオンの家に居座っている。

“女主人公”編 エピローグ 一人称『僕』おじさんルート（プロット） 完

……とまあ、こんな感じで、世界に二人ぼっちであることが確定したので、あとはじわじわ仲良くなっていくルートです。一人称『僕』おじさんは、本編中にエロ展開があったので個別ルートでは逆にエロがほぼ無くなるという。



## 取り巻きハーレム先輩ルート（プロット）

◆ 名前つけルール：花言葉十色

変身ヒロイン〃女主人公〃璃子リコ取り巻きハーレム先輩オオダマキ御々田蔭明哉アカヤ〃主人公〃くん先輩ツツフキ石路拓吾タクゴお嬢様〃ヒロイン〃ちゃん先輩ソウビガサキ薔薇ケ咲紅恋花クレハ

（※タクゴとクレハは個別ルートに出ない）

## ◆ プロット

エネルギーの使い方について、「私に良い考えがある」ということで、変身ヒロイン〃女主人公〃——リコは山の上の学園に忍び込む。変身して身体能力を上げたら、潜入は余裕だった。

学園内でコソコソと人探ししている途中、取り巻きハーレム先輩——オオダマキ御々田蔭明哉アカヤとバッタリ出会う。ここら辺はこ都合主義ミサンガの力。

アカヤは（えっわざわざわざわざオレに会いに!?）しょうがないヤツだなあ!! 友だちになっ

てやるよ!!!)と、口に出さないが、テンションマックス。しかし、リコはループ“主人公”くんもしくは義姉“ヒロイン”さん——花卉樹<sup>カイキ</sup>エイゴ<sup>ネ</sup>と烏屋根<sup>ウヤトネ</sup>ノア<sup>乃愛</sup>いろいろあつて、学園では旧姓を名乗っている。を探していると言う。アカヤ、とてもシヨック。

でも、エイゴのところに案内してくれる。

エイゴは、義姉であるノアといっしょにいた。仲直りのきつかけとなつたリコとの再会に驚く二人。リコは、二人のラブラブな雰囲気に一安心。人死にが出て無いようであり。

改めて自己紹介をして、相談したいことがあるというリコに、快く応じるエイゴとノア。アカヤもなんののかのと理屈をこね、めつちや食い下がってその場に同席することになる。

あらあらうふふという温かいまなざしでアカヤを見るエイゴとノア。

三人に自分の事情を話し、エイゴとノアの“時間ループさせる能力”で追手との戦闘を手伝ってほしいとお願いする。

リコは、二人の能力で、『エネルギーをほぼ使わずに済んだ戦闘』を引くまで時間を繰り返し、エネルギー使用の効率化と省エネ化を目論んでいたのだった。TASみたいな感じ。

アカヤは、どれだけエネルギーを節約しても、いつかはエネルギーが足りなくなるん

じゃないかと指摘する。エネルギーの回収はどうするのかと尋ねられ、「いろいろと説明した後）まあ、ようするにセックスしたら回収できますね」と、リコは締めくくる。

「なら、オレの方で信用できる店を手配しよう（友だちだからな！）」

「おお、ありがとうございます!!（エロゲ的な意味で風俗店もわりと危ないから助かる!!）」

「いやいやいや、待つて待つて」

エイゴからストップが入る。エイゴ視点、アカヤはリコを恋愛的な意味で好きなのだと思います。なので、（チャンスだぞ！ アカヤ!!）と応援男性向けエロゲみたいなことが起きる世界なので、体からはじまる恋は定番だったりする。していたら斜め上の展開に走り、ついに行けなくなっていた。

話の流れで、勃起不全であることを打ち明けるアカヤ。そこへ、意外にもノアが助け船を出す。心因性の勃起不全ならば、そうなる前まで一時的に記憶を戻してはどうかという提案だった。

「元の記憶はどうなるんですか？」

「記憶なんて曖昧なものですから、過去にこんなことあったかもしれないくらいに落ち着きます」

「うん、俺の記憶もそんな感じになってる」

## 実験。

ただし、当事者であるアカヤが乗り気ではない。前の自分はあまり好きじゃないから、一時的とはいえ、その頃に戻るの嫌だと言う。

「まあ、たしかに人としてどうかと思うこともしてましたけど。私、前の先輩も嫌いじゃないですよ（いっぱい美味しいもの奢ってもらってたし）」

「なっ——!?!」

「それに、ものすごく個人的な都合ですが、先輩が相手の方が（今日中にエネルギーの回収が終わるので）助かりますね。ただ、これは私の都合なので、先輩の気持ちを優先してください」「やる」

あらあらうふふという温かいまなざしでアカヤを見るエイゴとノア。

アカヤは「前のオレがどんな態度をとっても、セックスに持ち込んでエネルギーを回収しろよ」と言い残し、記憶の操作を受けた。

「じゃあ、念のために性的なことにはちばん興味があつた時期まで記憶を戻すわね。二時間経ったら戻るようにしてあるから」

——という前フリの結果、アカヤの記憶は12才まで戻ってしまう。見た目は大人！  
中身は子ども!!

リコは悩んだものの、本人の伝言を優先しエネルギー回収を決行。性に目覚めたばか

りでエツチなことに興味津々なアカヤくん（12才）をデロデロに甘やかしてセックスする。

二時間後、そこには真つ赤な顔を手で覆って俯くアカヤの姿があった。

ノアによると、心に残る強い記憶がセーブポイント的な役割をしているらしく、そのセーブポイントを読み込むことで記憶を戻しているのだそう。セーブポイントを使わず年月を指定して記憶を戻すと、ズレが出る可能性が高くなるのだとかただし、記憶をいじる相手がエイゴの場合は、一分一秒のズレもなく記憶を戻せる。愛のなせる業。

アカヤは、もし次があるなら、ズレが出ても構わないから年月指定で記憶を戻してくれるように頼む。

けつきよく、この後も何回かセックスすることになる。もちろん記憶を戻す際には年月がズレ、色んな年齢のアカヤと体を重ねることになった。基本的に今より前のアカヤはひねくれているので、なだめすかしての甘やかしセックスになる。

アカヤの思春期の折々に、甘やかしセックスされた記憶が足されていく。捏造された記憶であるのは重々承知なのだが、幼いころから抱えていた飢えと渴きが、リコで満たされていく。こんな好きになるって方が無理だろ状態。

リコはリコで、アカヤの色んな側面を知り、なんだかんだで可愛い人だなあと心惹か

れていく。後半は、いかにしてアカヤを甘やかしてデロデロにして可愛い姿を見るかに全力を尽くしていた。

追手との戦闘は、エイゴとノアのおかげでサクサク。ループのおかげで、相手がどんな攻撃をしてくるか分かるので、ものすごく有利に戦うことができた。

半年ほどかけて、リコは肉体の修復を終え、旅立つベティを見送る。

リコは、なぜだか途方に暮れていた。アカヤに会う理由がなくなってしまった、と。そんなことを考えている自分に混乱するリコ。

「どうしましょう、先輩。私、先輩のこと好きかもしれません」

「奇遇だな、オレもオマエのこと好きだぞ」

「うえええ?! いやでも、先輩の好きは、記憶を足されたからで……勘違いでは……」

「じゃあ、オマエの好きはどうなんだ? 誰かを甘やかすことに楽しみを見出していて、それを好きだと勘違いしてるだけじゃないか?」

「えっ……言われてみれば……そうかも」

「いや、納得するなよ」

お互いの好きが勘違いかどうか確かめるために、二人は恋人になることに。

後日、アカヤの勃起不全が治っていることが発覚。ここにきて初めて、現在の二人がセックスすることになり、ものすごくギクシヤクした。

“ 女主人公 ” 編 エピローグ 取り巻きハーレム先輩ルート（プロット） 完

個別ルートという名の、心因性勃起不全治療ルート。ちなみに、他のルートでも将来的に勃起不全は治ります。個別ルートより時間はだいぶかかりますが。

## お孫さん師範代ルート（プロット）

◆ 名前つけルール：天候&amp;時間

変身ヒロイン〃女主人公〃ミ<sup>未</sup>ア<sup>明</sup>お孫さん師範代 日<sup>ヒナガ</sup>永<sup>タ</sup> ユウケイ<sup>慧</sup>眼鏡〃主人公〃くん 東<sup>シノノメ</sup>雲<sup>メ</sup> アキ<sup>暁</sup>クラ中二病ロリ〃ヒロイン〃ちゃん 照<sup>てるしま</sup>島<sup>マ</sup> ハル<sup>晴</sup>コ<sup>子</sup>無口クール系〃ヒロイン〃ちゃん 栗<sup>ツ</sup>花<sup>ユリ</sup>落<sup>リ</sup> ウル<sup>麗</sup>ウ<sup>雨</sup>おっとり不思議系〃ヒロイン〃ちゃん 安<sup>アズミ</sup>曇<sup>ミ</sup> ヒツジ短い髪の女／キレイ系お姉さん 村<sup>ムラサキ</sup>崎<sup>キ</sup> アカ<sup>茜</sup>ネ少女の声 村<sup>ムラサキ</sup>崎<sup>キ</sup> アイ<sup>藍</sup>長い髪の女 マ<sup>真</sup>ヤ<sup>夜</sup>

（※女主人公と師範代以外、個別ルートに出ない）

◆ プロット

変身ヒロインをしながら、毎朝の稽古を続けるのは難しそうなので、しばらく休む旨



をおじいちゃん師範——日永師範ヒナガに連絡する。理由は、両親の海外出張で、稽古と家事を両立するのが難しいから。場合によっては、両親が戻るまでの丸々一年、稽古に行けないかもしれないと伝える。

中身は大人なので、疑われずに休む理由を考えるのも余裕である。他のルートでもこの理由で連絡して、稽古を休んでいる。

エネルギー回収の目途が立たないうちに、続々と追手がやってくる。戦闘は激しさを増していく。辛うじて追手を撃退し続けているものの、とうとう街に被害を出してしまう。ミア（変身後の姿）は、警察に追われることに。

変身後は身体能力が上がっているのですが、本来ならば捕まることはない。しかし、エネルギーがギリギリで逃げ切れず、警察と思しき人物に追い詰められてしまう。その人物は、お孫さん師範代——日永ヒナガ ユウケイユウケイであった。

潜入捜査官であるユウケイは、年度が変わったのを機に巨大人工浮島の学園から撤退。別の任地へ赴く——はずだったのだが。『旧研究所』事件で死にかけたのをきっかけに“生”や“死”にまつわるものが“視える”ようになってしまったちなみに、眼鏡“主人公”くんも“視える”ようになってしまった人。『旧研究所』の事故が起きた時、事件現場におり、あの世からこの世に戻ってこれた（＝生き返った）。視えすぎるのを防ぐために眼鏡をかけている。

“目”のせいで超常現象犯罪対策課エロゲみたいなことが起きる世界は、超常現象も気軽に起きるので各警察署に専門の課が設置されている。へ異動になり、超常現象による器物損壊の被疑者としてミア（変身後の姿）を追っていた。

追い詰められたミアは、相手が師範代であることに気づく。ユウケイも、認識阻害がかかっている見た目が変わっているはずのミアに気づく。なんやかんやでお互いの事情を打ち明けるところに。

ユウケイは当初、ミアを警察で保護するつもりでいた。しかし、ベティの存在があまりにも人類に有益すぎた。地球外生命体のテクノロジ——粉微塵になった人間の蘇生すら果たし、ほぼ消滅した肉体をわずかな臓器から再生し、再生の間に合っていない部分を未知の物質で補い、人知を超えたエネルギーを駆使する。

もし、ベティの存在が公になったとして。ベティ自身は、ミアの肉体修復が終われば地球から去るといふ。ならば、地球に残されるミアは？ ……ロクな目に遭わないだろうことは、ユウケイにも想像がついた。

ユウケイは、ベティについて公的な記録を残すのはあまりにも危険だと判断し、ベティとミアを匿うことにした。これにはミアも一安心。ミアは、師範にも事情を（エネルギー回収のくだりを伏せて）説明し、日永邸の離れにしばらく滞在することになる。

そこまではいいとして。

問題はエネルギー回収だった。ベティと直接触れる必要がある。しかし、ユウケイはミアとセックスするつもりは無い。苦悩の末、指でベティに触れてエネルギーを回収してもらおうことになる。実は、男性の指の長さなら届くのだ。あまりにも常識的な対応。

しかし、指とはいえ、挿れるためには慣らす必要があるわけで。粛々と行われる。治療行為”。お互いに何も言わない。——そして、一度目は、特に何ごともなく済んだ。

これ以降の戦闘は順調だった。エネルギーを回収できたし、師範やユウケイに稽古をつけてもらっているしで、特に苦戦せず追手を蹴散らすことが出来ていた。

ただ、エネルギー回収の際に行われる“治療行為”が、ミアを悩ませていた。ものすごくムラムラしていた。もどかしくて仕方なかった。だから、「挿れるときに、少し痛かったから、もう少しほぐしてほしい」とウソをついた。

「まだ」「もう少し」とねだり、引き際を弁えなかった結果——

ミアは日永邸から逃げ出した。自分の行いがあまりにも恥ずかしくて、ユウケイと顔を合わせる事ができなかった。

自宅にも戻らず、ユウケイから逃げ回りながら追手との戦闘を繰り広げる。無茶な戦いでエネルギーが尽きかけ、負けそうになったところをユウケイの手助けで逆転する。戦闘後、必死で逃げようとするが、あえなく捕獲。日永邸に戻ることに。

重たい沈黙が日永邸の離れを包む。いろいろと話し合った末に、ベティの提案で「同

じくらしい恥ずかしいところをユウケイが見せれば、「痛み分け」になるのでは？」というところに落着する。

日が経つにつれ、「治療行為」と「痛み分け」は少しずつ過激になっていく。

気がついたら、お互いに戻れないところまで来ていた。しかし、ユウケイは「肉体が修復が済めば終わる関係だ」と断言し、最後の一線だけは絶対に越えない。

ミアも、それが真つ当な対応だと理解していた。これはあくまで、「治療行為」と「痛み分け」だった。その名目がなければ、ミアとユウケイはこんな関係になることはなかった。

半年後、ミアは肉体の修復を終えてしまった。旅立つベティを見送る。

“治療行為”と“痛み分け”はおしまいだ。

本当はこの関係をおしまいになんてしたくなかった。ミアは、ベティと別れる前に変身して変身後のミアはパワーがすさまじく。成人男性なんて軽く押さえ込むことができる。ユウケイを逆レイプしてやろうかとも考えていた。けれど、ユウケイの思いやりを無碍にすることが、どうしてもできなかった。ミアのことをとても大切に扱ってくれているからこそその対応だと、分かっていたから。

頭では分かっても感情がついてこず、ミアは泣き出してしまう。「師範代との関係をおしまいにしたくない」と泣きじやくるミアの前に、ユウケイはひざまずく。ミアの涙

を指で拭いながら「自分も同じ気持ちだ」と伝える。

ミアは、言っていることが違うと混乱する。そんな彼女に「これまでの建前が必要な関係は終わりにして、君と恋人になりたいのだが、どうだろうか」とユウケイは提案するのだった。

“女主人公”編 エピローグ お孫さん師範代ルート（プロット） 完

ミアが学園を卒業するまで、エツチなことを絶対にしない。鉄壁の自制心の持ち主。しばらくするとミアの方が堪えられなくて、初期の“治療行為”くらいまでならオツケーに緩和される。

# TS 予定イケメンくん / TS “ヒロイン” ちゃんルート (プロット)

◆ 名前つけルール：キャラ属性

変身ヒロイン” 女主人公” 百合香 ユリカ

TS 予定イケメン / TS “ヒロイン” ちゃん トナリ 戸成 終友 シユウ

親友” 主人公” くん まきこま 巻駒 結大 ヒロ

天使” ヒロイン” アンジエ

悪魔” ヒロイン” イヴイル イヴイル

妹” ヒロイン” トナリ 戸成 未桜 ミオ

(※女主人公とTSくんちゃん以外、個別ルートに出ない)

## ◆ プロット

(途中でさらに分岐します)

エネルギー回収について、ベティから「身につけているアクセサリーを作ったヒトに協力してもらえないウミ？」と尋ねられる。ベティの言うアクセサリーとはTS “ヒロ

イン“ちゃん——戸成<sup>トナリ</sup> シユウ<sup>終</sup>からもらったミサングのことだった。

このミサング、宇宙人から見てもすごい“力”が備わっているらしい。ただし、変身ヒロイン“女主人公”——ユリカ<sup>百合香</sup>が身につけているミサングからエネルギーを回収すると、ユリカ自身からエネルギーを回収することになる人類にとってスピリチュアルでオカルティックなパワー（生命力、魔法、呪い、気などなど）も回収可能だが、生命体を經由しないと無理。幽霊単体は回収できないが、人間に取り憑いた幽霊は回収できる。魔法単体は回収できないが、人間の持つ魔力は回収できる。そんな感じ。それでは意味がない。

シユウを経由して、ミサングを作った人物に会わせてもらおうと算段をつける。電話だとベティの説明がしにくく、信じてもらえないと思ったユリカ。直に会って事情を説明することに。

翌日。ユリカが思うよりもあっさりと、シユウはベティのことを信じてくれた。むしろ、シユウが語った内容の方が眉唾で、ユリカは目を剥いた。そのミサングは、異世界から地球にやってきた天使と悪魔が作ったものだという。

シユウは「二人とも良いコだから、協力してくれると思うよ」と微笑む。ユリカは、良かったと胸を撫でおろす。そんな二人にベティは待ったをかけた。

シユウ自身が、ものすごい力をまもっているというのだ。これだけのエネルギーがあ

れば、生命維持にも肉体修復にも戦闘にも困らない。

「僕にできることなら喜んで協力するよ」とシユウは答える。しかし、今のシユウは女性だ。ベティに触れることができない。モノは無いし、指も届かない。

「この手段はあんまり使いたくなかったけど、仕方ないウミね……」

実はベティ、雌雄同体ウミウシは雌雄同体。交尾が終わるごとに雄の生殖器を使い捨てするウミウシもいるぞ！ 交尾の際、媚薬を相手に注入するウミウシもいるぞ！ ウミウシすげー!!であり、雌と雄に分裂することができる。分裂体をユリカとシユウの体に同化させれば、エネルギーの受け渡しが可能だという。

分裂体は雌が主で雄が従。親機と子機のような関係になる。また、雌雄でエネルギー回収に差がある。雌の分裂体——ベティは回収に時間がかかるけど丁寧。雄の分裂体——ベティオは早く回収できるけど雑。

しかし、いちばんの問題は、変身する能力がベティに付随しているところだった。ベティと同化した方が追手と戦うことになる。

どちらがベティと同化するべきか——

① ユリカが戦うルート



※女性の体がベースのふたなりが出てきます。

こちらのルートだと、最短の二ヶ月で肉体修復を終えることができる。しかし、複雑な作業ができないベティオでは二つの神力と魔力が絡み合った状態をほくくことができず、今後も女のままで過ごすことになる。

シユウを戦闘にまで巻き込むわけにはいかないと、ユリカは自分が戦うことを決める。それはいいのだが。

「僕の息子が戻った!? いやこれ僕のじゃない!!!」

「それはエネルギー受け渡しのための器官ウミ」

ようするにセックスである。

フった／フられた相手とセックスすることになるという状況に頭を抱える二人。しかし、命には変えられない。それに、同化を解除すれば生えた器官もなくなるということ、複雑な感情は飲み込むことにした。

二人で協力して、追手との戦闘とエネルギー回収をこなしていく。戦ってセックスして、泣いて笑って、ケンカして仲直りして。なんだかおかしなところもあるが、二人はすっかり仲良くなっていた。

二ヶ月後、ユリカは肉体の修復を終え、旅立つベティをシユウと二人で見送った。

並んで立つシユウの横顔を見て、ユリカは「やっぱり好きだなあ」と思ってしまった。

いっしょに過ごすうちに、T Sして“ヒロイン”になったシユウのことも好きになつてしまつていた。学習しない自分に対して、途方に暮れるユリカ。

そんなユリカの変化にシユウは気づく。ユリカも大切な友だちだ。だから、シユウは尋ねた。「どうしてそんなに悲しそうな顔をしているのか」「何か僕にできることはないか」と。

ユリカにとつては、残酷な気遣いだった。ごまかすこともできず、「また、君を好きになつちやつた」と泣きそうになりながら思いを伝える。

二度目の告白を受けたシユウは、自分の心が喜びに震えていることに困惑する。一度目の告白の時には、こんな風にならなかつた。誰かから「好き」と言つてもらえる幸福を、ヒロにふられたことでようやく気がついたのだった。

シユウは、自らの浅ましさを嘆く。

これは、ユリカのことを「好き」だという感情ではない。もちろん、友だちとして大切に、好ましく思っている。だが、ユリカの「好き」とシユウの「好き」は、きつと違う。

シユウは幻滅されるのを覚悟で、自分の思いをすべて打ち明けた。

対するユリカは手応えを感じていた。この告白で「やっぱりヒロが好きだから」と返ってくるなら諦めようと思つていた。しかし――

「私のこと、好きなの？」

「えっ？ うん……友だちとしてだけど、好きだよ」

ユリカの心が震える。付き合っていた時のシユウは、ユリカのことを好きでも嫌いでもなかった。それが今は、「友だちとして好きだ」と明言した。

“女主人公”らしく、“ヒロイン”を攻略しよう。決意を胸に、ユリカは手を差し出した。シユウは不思議そうな顔で、おずおずとユリカの手を握る。

「これからもよろしく」

「う、うん、よろしく？」

## ② シユウが戦うルート

※女性の体がベースのふたなりと男性の体がベースのふたなりが出てきます。

こちらのルートだと、肉体修復に半年ほどかかる。しかし、ベティの精密なエネルギー回収のおかげで二つの神力と魔力が絡み合った状態をほどこことができ、男に戻ることになる。

満身創痍（ほぼ死んでる）のユリカを戦わせるわけにはいかないと、シユウは自分が戦うことに決めた。それはいいのだが。

「あの、ベティさん……私の股間に、生えましたが?」

「生えなきや困るウミ。それはエネルギー受け渡しのための器官だウシ」

ようするにセックスである。

「え、僕、挿入されるの?」

「……そうなりますね」

案の定シユウは即堕ちをキメる。一回のセックスで、めろめろになっていた。今までよく無事だったなとユリカは嘆息する。追手との戦闘もなんやかんやで危うい。豊富なお色気シーン。さすがはTS変身“ヒロイン”としみじみ思いながら、ユリカはサポートに奔走することに。

さらに、エネルギーの回収が進むにつれて、シユウの体はじわじわと男性に戻っていく。思わぬ副次効果に喜ぶシユウ。だがしかし、挿れられるのはシユウの方である。

「なんで?」

「この器官を通してじゃないと、エネルギーの受け渡しができないからウミ」

口ではそう言っているものの、この時点でシユウは心までメス堕ちしているので問題なかったりする。

最終的に男性の体がベースのふたなり——両性具有のような状態になる今回は片方が性器ではない(という設定)なので、厳密に言うとうたふたなりではないかもしれない。ち

なみに、ジャンルとしては女性の体がベースのふたなりの方が圧倒的に多い。同化を解除すれば生えた器官もなくなるのだが。

「前だけでイけなくなつた……」

さめざめと泣くシユウ。性癖が捻じれすぎて後戻りができないところまで来ていた。

「もうお嫁にも行けないしお婿にも行けない……っ！」

「せ、責任は取るから!!」

ユリカは、ベティにエネルギー受け渡し器官を残したままにできないかと尋ねる。シユウは「僕のためにそこまで……!」と感激して胸をときめかせている。

受け渡し器官は、ベティ&ベティオと同化していないとエネルギーを受け渡す機能を発揮しない。潤滑液を分泌する機能が備わつた肉のかたまりだ。ベティからすると、どうして残したいのか理解できない。しかし、できるかできないかというと、できる。

本来ならできないのだが、ユリカは肉体修復で、シユウは性転換で、体の組成がふわふわになつていた。その状態なら、受け渡し器官を足すことができるという。

ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界なので、けつこうな人数のふたなりが存在する。先天的にふたなりな人も、後天的にふたなりになる人もいる。ちなみに、比率でいうと女性の体がベースのふたなりが圧倒的に多く、男性の体がベースのふたなりはあんまりいない。

だから、ふたなりになること事態は問題ないのだが――

ここは男性向けエロゲみたいなのが起きる世界なので、ふたなり“女主人公”とかロクなことにならないのはたしかだ。ユリカは、使わない時は収納できる機能の追加を、ベティにお願いをするのだった。

半年後、ユリカは肉体の修復と改造を終えた。旅立つベティをシユウと二人で見送る。

シユウはとろけそうな笑顔でユリカに寄り添っている。彼は、メス堕ちを越えてユリカ堕ちを果たしていた。おかげで、ユリカが相手なら前でもイけるようになった。

これで良かったのだろうかと思うことはある。しかし、シユウ本人は幸せそうで、自分も幸せだ。だからいつかと星空を見上げながら思うユリカだった。

“女主人公”編 エピローグ TS 予定イケメンくん / TS “ヒロイン”ちゃん  
ルート（プロット） 完

温度差がひどい。ちなみに、他のルートでは主人公くんのハーレムに収まり、TS “ヒロイン”として幸せに過ごしています。

## エリザベティナ（ベティ）ルート（プロット）

◆ 名前つけルール：特になし

変身ヒロイン〃 女主人公〃 ユイ<sup>唯一</sup>

宇宙から来たウミウシ（？） エリザベティナ・クロモドーリス

## ◆ プロット

いろいろなと考えたが、どの案も誰かの手を借りないといけない。自分の都合に他人を巻き込むことを良しとしなかった変身ヒロイン〃 女主人公〃 —— ユイ<sup>唯一</sup>は、追手との戦闘でエネルギーを回収することを覚悟する。

長年の観察&考察から、男性向けエロゲみたいなきっかけがあることを逆手に取り、回想シーン<sup>エロ</sup>が起きやすいシチュエーションやセリフを使い、わざとエロイベントを起こす。そして、受けるダメージを抑えつつ、大技で仕留める。

たとえるなら、横スクロール2Dアクションの同人エロゲにおいて、道中で敵に襲われてやられるアニメーション。あれだった。

「どうして独りでがんばるウミ？ 誰かに助けてもらった方がいいんじゃないかうシ

「？」

「うーん……誰かに迷惑をかけたくないから、かな。あと、ベティさんがいるし。独りじゃないよ。本当に独りだったら、がんばれないと思う」

ただし、こまめに戦闘をする必要があるため、エネルギーを回収するのにいちばん時間がかかる方法だった。さらに、接触する時間を確保するため、戦いが長引く。他のルートと違い、追手と何かしらの会話が発生することがあった宇宙人の言語が分かるのは、ベティと同化してるから。

戦いを重ねていくうちに、うつすらとだがベティがどういう存在なのか、ユイは理解する。

ベティは、とある宇宙の王族（のようなもの）の生き残りだった。その宇宙において王族の存在は、宇宙を維持する法則システムなのだという。エネルギーを循環させ、生命を育む。原理が実証され、実用化された神さまのような存在と言ってもいいかもしれない。

ある時、別宇宙からの侵略に遭い、ベティだけが命からがら脱出することができた。ベティさえ生きていれば、彼女の宇宙はやり直せる。しかし、ベティが捕まれば、侵略者に資源として使い潰つぶされてしまう。

なお、ベティがこの地球ほしに墜ちてしまったのは偶然。追手からの攻撃で宇宙船（水球）がダメージを受け、不時着することになったのが理由。



Q. 追っ手（侵略者）が地球を資源にしないのはなぜですか。

A. 向こうからすると、地球を資源に使っても焚き付けにすらならないからです。手間をかけるだけ損。ベティを狙った方が得。

ベティは悩んでいた。そもそも自分の存在が、地球誰かに迷惑をかけている。誰かに迷惑をかけることは——ユイが好きじゃないことだ。

どうしてだか、ユイにとって好ましくないことを、したいと思えない。共に過ごす間に、ベティにとって、自分が生き続けることの次に、ユイは大切な存在になつていった。

ユイにとつても、ベティは大切な存在だ。自分が巻き込まれることを承知のうえで、ベティの口から彼女の事情を聞くことにした。ベティは悩みつつも、すべての事情を打ち明けた。ユイには知っていてほしい。そう思うようになっていた。

ユイは、ベティがいることこそが地球にとつていい迷惑なのだを知った。

「だったらさ。二人で宇宙に行こうよ。宇宙ステーションや人工衛星より、月よりももつともつと遠い宇宙で戦うなら、誰の迷惑にもならないでしょ？」

つまりユイは、追手との戦闘とエネルギー回収にかかる丸々一年を、宇宙で過ごすという。しかしそれは、一度しかないユイの時間を犠牲にする方法だ。成績や進路に大きな影響を与えてしまうだろう。

だが、すでに人生二度目であるユイからすると、そんなことは些細な問題だった。

一年後――

ユイは肉体の修復を終え、地球に戻ってきた。ウミウシつばさの残る外見をした宇宙人――ベティの頬を朝焼け色の涙がポロポロと流れていく。

ずっと独りで宇宙を逃げ回っていた。自らの宇宙の復興を果たすまで生き続けるという使命があつたから、ツラくはなかった。だから、これからも独りで大丈夫。

そのはずなのに、ユイとの別れを思うと、ベティは涙が止まらなかった。その涙を指で拭いながら、ユイは微笑んだ。

「ベティさんについていく」

地球に戻ったのは、両親に事情を伝え、きちんとお別れをするためだと言う。

「前に言ったよね。私は、独りだったら、きつとがんばれなかった。ベティさんがいたからここまで来れた。ベティさんを見送って、ひとりぼっちにするなんてできないよ。友達だちだもん」

「まあ、なんの役にも立たないけどね」と笑いながらユイは手を差し出した。ベティは泣きながら微笑んで、ユイの手をそつと握った。

“女主人公”編 エピローグ エリザベティナ（ベティ）ルート（プロット） 完

ちなみに他のルートだと、主人公のあれそれを見て、誰かに助けてもらおうことの大切さにベティは気づきます。追手から逃げ回りながら協力者を募り、侵略者たちと敵対しつつ自らの宇宙を復興するという感じです。

## 逆ハーレムルート（プロット）

◆ 名前つけルール：特になし

変身ヒロイン〃 女主人公〃 タチノ<sup>多智乃</sup>

## ◆ プロット

変身ヒロイン〃 女主人公〃 —— タチノ<sup>多智乃</sup>は、最短の二ヶ月で肉体を修復するために、効率のいいエネルギー回収方法を画策した。自分に負担が無いと、なおさらに良い。

というわけで、ベティさんに頼んで『無意識<sup>寝て</sup>の間にエネルギーを回収を済ませてもらう』ことにした。エロゲで例えるのなら〃 オートスキップ機能〃 だ。未読部分もスキップしてくれるタイプ。

参考にしたのは、義姉〃 ヒロイン〃 さんの〃 時間をループさせる能力〃。ループ中は、能力を発動させている義姉〃 ヒロイン〃 さん以外に自意識が無く、彼女の目的が達成されるまで自動でループが続くという。この『自意識が無く』『自動で続く』という点に、タチノは注目したのだった。

ベティと相談しながら、エネルギー回収自動化の処理を詰めていく。

タチノがセックスの相手に選んだのは、街の人々だ。変身した状態なら、成人男性の一人や二人、軽く抑え込める。問題は、普通に犯罪なところだが――

「相手の）記憶を消すってできる？」

「（自分の）記憶を消すくらいならちよちよいのちよいウミ！」

これで問題が無くなった。

「記憶が無くなると言っても、結婚してる人や恋人がいる人はイヤだなあ。確実に独身で、（エロゲ的な意味で）私とセックスするのに抵抗が無い（＝モブおじさんのな）相手がいいんだけど……そういう条件で絞り込める？」

「え〜と……（性別と戸籍と、あとタチノへの好感度でフィルタリングしたら）大丈夫ウミ！」

タチノへの好感度でフィルタリング⇨タチノのことをある程度以上に好ましく思っている。

「ああでも、相手が勃たなかったらどうしよう……」

「エネルギー回収のためにも、相手の性器を確実に勃起させるのは重要ウミね」

「夏にバイトした時に、媚薬（性的興奮剤）を飲んだことがあって。そういうのでどうにかできない？」

「媚薬……なるほど媚薬（惚れ薬）ウミね！（元からタチノをある程度以上に好ましく

思っているから) 気持ちを高めるくらい余裕ウシ!!」

「お〜〜! ベティさんすごい!!」

「えっへんウミ」

「あと、(エロゲみたいなのが起きる世界だから) なるべく体を頑丈に……」

「丈夫さ(宇宙基準)は大事ウミね……」

このように、問題しかない”オートスキップ機能”が実装された。

二ヶ月後、タチノは肉体の修復を終え、旅立つベティと最後のおしゃべりをしていた。そこへ、オートスキップの被害者一同が集まる。一人称『僕』おじさん、取り巻きハレム先輩、お孫さん師範代、TSしたはずのイケメンくん性自認が男のままなので”オートスキップ機能”のフィルタリングに引っかかった。そして、なんやかんや(意味深)で男に戻った。以上の四名が逆ハーレムルート of 被害者である。

だがしかし、タチノは何も覚えていない。

ベティがセックスした記憶を消しているので、思い出すことすらできない。ちなみに、タチノ本人は、寝ていたから覚えていないのだと思っていた。

タチノとベティは、どうしようもない事情があったことを語った。被害者である男性陣は「たしかに情状酌量の余地はある」と頷いた。しかし、逆レイプをされて以降、タチノのことが好きで好きでたまらないのだと言う。

被害者の口から赤裸々に語られる逆レイプ。ベティは目撃者として「事実だウミ」と証言する。せめてもの抗弁として「媚薬のせいだ」とタチノは言う。だが、味方であるはずのベティに背後から撃たれた。

「みんな元からタチノのことけっこう好きだったウミ。ウチはその『好き』を『交尾したくらい好き』に増幅させただけウシ」

なんだか面映ゆい気分になる一同。円満解決だと判断して、立ち去るベティ。

そして、被害者の中に取り残される加害者。

たとえ増幅させられた気持ちだとはいえ、タチノを好きなことには変わりはないし、諦めることも譲ることもしたくないと男性陣は語る。結果としてタチノは四人と付き合うことに。

最終的に五人で結婚もする。

作中でタチノは勘違いしているのだが、この世界は逆ハーレムも法的に認められている。基本的に一夫一妻制であり、多夫多妻制を選択できるのだ。一夫多妻でもいいし、多夫一妻でも、多夫多妻でもいい。複数人の男女が新たに一つの戸籍をつくることができるという制度。戸籍の筆頭者を誰にするかだけの話。ただ、男性向けエロゲみたいなことが起きる世界なので、一夫多妻の家庭がものすごく多い。

家庭に不満はないけれど、どうしてこうなったと思わずにいられないタチノだった。

“女主人公”編 エピローグ 逆ハーレムルート（プロット） 完

この面子で逆ハーレムを成立させる方法が、これしか思いつきませんでした！ 宇宙  
基準で体を頑丈にしているので、僕おじとも余裕でセックスできます！！ やったね！！！！



## “ヒロイン”編

## 『選択肢：もう何回目になるだろう』

バスに揺られながら、文庫本のページをめくる。文字の海を漂っていると、じわりと紙面に血がにじみ、赤く染まっていった。いつもの幻覚だ。諦めて本を閉じる。今日はもう読み進めることができないうだろう。

車窓から外をぼんやりと眺める。この流れて行く景色を見るのも何回目になるのだろうか。

学園から下りたところで、得るものは何もない。分かっている。なのに、アカヤから外出許可証をもらった時は街へ向かってしまう。もらったものは使わないという貧乏性……いや、素直に言えば、心のどこかで期待しているのかもしれない。馬鹿な考えに思わず自嘲してしまう。

——どうやってこのループから抜け出すことができない。

意図的にループさせられている節があり、ループを起こしている“誰か”がいるだろうことは察していた。月曜日に戻る時、その“誰か”に殺されているのだろうことも分かった。

俺は、“誰か”の正体を知るために奔走し、足掻き続けた。

しかし、足掻けば足掻くほど、状況は悪くなる一方だった。いつからか、俺の周りの人たちが殺されるようになったのだ。サークルのみんなが、アカヤが、両親が、無関係な人々が、むごたらしく殺された。“誰か”の正体にあと一步のところまで迫った時は、義姉さんの自殺を見せつけられた。

俺が足掻くことで、周りの人が傷つく。このループを起こしている“誰か”からの脅迫は、あまりにも効果覲面だった。

——俺は身動きが取れなくなってしまった。

だから、受け入れることにした。ここは地獄で、自分は罪を犯し、罰を受けているのだと納得した。

地獄に落ちた亡者は、刑期を終えるまで何度も何度も呵責を与えられるという。焼かれ煮られ磨り潰されても肉体が再生し、刑罰を受け続ける。俺にとってはこのループこそが地獄の呵責なのだろう。

ただ、本物の地獄よりはきつとマシだ。俺には本がある。読書という楽しみがある。ページ番号さえ覚えていれば、どれだけループを繰り返しても続きが読めた。学園の本を読みつくしたとしても、電子書籍を購入すればいい。

本を読みながら静かに一週間を過ごし、たまに街へ下りる。そして、週の終わりに殺

されるのを待つ。

——もうずっと、そんな日々を繰り返していた。

街へ下りても、何かをすることは無い。ぶらぶらと時間をつぶすだけだ。ただ、ずいぶん久しぶりに外出許可証をもらったので、ウツカリと制服のまま来てしまった。

「山の上のお坊ちゃんがよお！　こんなところに何のようだあ？　ギャハハ！！」

そろそろ日が暮れ始めるころ。俺は、ひと気のない地下街の細い通りで不良に囲まれていた。制服で街に下りた時は、ほぼ確実に絡まれる。私服で来れば避けられた事態なのだが、忘れていた。

不良たちにバレないよう周囲に目を配る。少し離れたところに彼女がいた。どこか疲れた目をした素朴な雰囲気の子。彼女に迷惑をかけてしまうのは、いつ以来だろう。自分のうかつさに舌打ちをしたくなる。

「なんだよその顔は！」

ここはどんな顔をしていたとしても腹を殴られる。ひ弱な俺の肉体は、殴打の勢いに負けて床に倒れてしまう。精神がおかしくなっているのか、痛みはあまり感じない。

いつかと同じように、けたたましい防犯ブザーの音が聞こえた助けてもらう方法は『選択肢：初めてのことで』とほとんど同じ。防犯ブザーを二つ隣の通りで鳴らして不良の気を引く。ブザーで通りから出てきた不良を警察に発見してもらう。少し時間をお

いて、二人で連れ立って地下街から脱出。



彼女の機転に助けてもらい、駅ビルにある憩いの広場へ移動することができた。不良たちは、地下街で警察官と追いかけてっこをしていることだろう。

自分の上着が入った紙袋を受け取る。感じが悪く見えるのを承知で、会釈だけした。ここに来るまで、ひと言も言葉を交わしていない。必要以上の会話は、彼女を危険にさらしてしまう。

あとは彼女が立ち去るのを見送るだけ、なのだが——  
彼女はまじまじと俺を見ながら、首を傾げた。

「……前にも、こうやって紙袋を渡したこと、ありませんでしたっけ？」

## 第三十六話 デジャヴを重ねる

私とお坊ちゃんは、どうにかこうにか地下街を抜け、駅ビルの敷地にある憩いの広場へ移動した。ここまできれば、もう大丈夫だと思う。

お坊ちゃんは、無言で立ち尽くしている。不良に絡まれたのがそんなにシヨックだったんだらうか。心配になって顔を覗き込むと、どろりと濁った目をしていた。まだ若いはずなのに、老いを感じる。強烈な違和感に体が震えた。あまり関わり合いにならない方がいいかもしれない。さっさと別れて帰ろう。

ブレザーの入った紙袋を手渡すと、お坊ちゃんは何も言わず頭を下げた。地下街からここまで、ひと言も話していない。ずいぶんと無口なお坊ちゃんだ。前に紙袋を渡した時は、ちゃんとお礼を言ってくれたのに。……ん？ な、んだ今の？

「……前にも、こうやって紙袋を渡したこと、ありませんでしたっけ？」  
思わず口について言葉が出た。

うつすらとした記憶が、幾重にも積み重なっている感覚。何千何万のぼやけた記憶の中、たまにお坊ちゃんと出会う私があった。

「ぐっ」

頭が痛い。目が回る。

倒れそうになった私の肩を、お坊ちゃんが支えた。ビリツと首筋が痺れ、一瞬だけ左目の視界が赤くなる。目尻から涙が流れたように感じた。

直後、至近距離で何かが破裂した。頬に液体が叩きつけられる。

「おい、どうしたんだ!?!」

お坊ちゃんの叫ぶような慌てた声。

「血がつー!」

血? 頬についた液体を指で拭う。指先には、べったりと血がついていた。しかし、日光に照らされると、血液はしゅうしゅうと音を立てながら消えていく。私は、そんな異様な光景に心当たりがあつた。

「ああ、いや、これは……大丈夫で……」

「大丈夫なわけないだろう!?! ああ、くそ! 俺のせいだ……!」

どうしてだか、お坊ちゃんの方にも心当たりがあるようだ。なんでや。

お坊ちゃんはポケットからハンカチを取り出すと、私の頬を荒っぽく押さえた。たぶん圧迫止血してくれているんだろう。けど、私の心当たりが正しければ、頬のどこにも傷はないはずだ。

なかば錯乱している彼を落ち着かせるために、こっちの心当たりを話すことにした。

×××

「人助けをしたお礼に、お守りとして血液を飲まされた？」

一人称『僕』おじさんとの“訓練”の部分に割愛して、そういう風に伝えた。間違ったことは言っていない。うん。

「あまりにも荒唐無稽で、信じてもらえないとは思うんですけど」

「……いや。信じるよ」

ひどく苦々しい顔で、お坊ちゃんは頷いた。重々しく息を吐きながら「俺も、荒唐無稽なことには覚えがあるから」と絞り出す。

「ところで、どんなお守りなんだ？」

「たしか、いざという時に命を助けてくれるお守り、だったかな」

「それは、つまり……」

つまり、ついさつき死にかけたってことになるな。いま気がついたわ。

お坊ちゃんの顔から血の気が引く。私が死にかけた理由に、思い当たる節があるようだ。

「やっぱり俺のせいだ」

虚ろな表情でそうつぶやいた後、必死な形相で「早くここから逃げてくれ！　今ならまだ間に合うかもしれない!!」と叫ぶ。

「それは——」

“俺のせい”。

頭の中にある、重なりすぎてぼやけた記憶。記憶にあるお坊ちゃんは、今よりもマシな目をしていた。

「私があなただのことを知ってる……いえ、覚えていることと関係がありますか？」

驚愕に見開かれる目。ひゅうと息をのむ掠れた音が、薄く開かれた唇から漏れた。

「な、んで？」

「これが関係があるかは分からないんですが、実は私、」

会話を遮るように、どす、と足元に赤黒く染まったボールが落ちてきた。ボールは、べしやべしやと音を立てて地面を転がり、真つ赤な液体をまき散らす。

本当は分かっている。理解したくないだけだ。人相が判別できないほどグチャグチャになっているが、それは——

「ひっ」

人間の頭部だった。

「もお、わたしの楽しみの邪魔をするなんて、無粋な方がいたものです！」



声が出た方に顔を向ける。少女のカタチをした何か、血にまみれた手をひらひらと振りながら、こちらへ向かってゆっくりと歩いてきた。

「えへ、えへへ……お待たせ、弟くん♡」

## 第三十七話 “前世”の記憶

「そん、な……、どうして……義姉さん……?」

お坊ちゃんは震えた声でそう言った。よく見ると、少女のカタチをした何かは、お坊ちゃんと同じ山の上の学園の制服を着ている。明らかにお坊ちゃんの関係者だった。あまりにも気配がおぞましくて、パツと見で気がつかなかった。

「あれえ? どうしてわたしの顔が分かるのかしら?」

お坊ちゃんの義姉だという少女は、指を顎にあて可愛らしく小首をかしげた。

「ん〜、さつきちよつかいかけてきたアレ一人称『僕』おじさんの“血液”。が原因かしら? まあ見られたところがかまいませんね。いつもみたいに記憶をいじればいいだけですもの。えへへ」

記憶をいじるとかヤバいひとり言がポロポロとこぼれておられる。こわい。

「ところでえ」

義姉の目がこちらを向く。木のうろのように真つ暗な目だった。ぞわりと鳥肌が立つ。とても嫌な予感がした。

「今度の浮気相手は、その子ですね」

疑問でなく断定。義姉はニタリと嗜虐的な笑みを浮かべた。私を義姉の視線から遮るように、お坊ちゃんが一步前に入る。

「なにを、何を言ってるんだよ！ 義姉さん!!」

ほんまそれな。

「義姉さんがやったのか!!? 今までのことも、ぜんぶ!!」

詳しい事情は分からないけれど、今の状況と向こうの口ぶりから察するに、あなたの義姉が犯人なのは確実だと思います。

糾弾された本人は、不思議そうな顔で目を瞬かせた。

「どうして、って。弟くんが悪いからですよ？ わたしという相手がいるのに何度も何度も浮気するんですもの。お仕置きをたくさんして、ようやく反省してくれたと思っただら——お坊ちゃん視点で義姉が自殺したループのこと。実は、そのループで犯人である義姉にたどりついていて。自分を選んでくれたと大喜びする義姉を、お坊ちゃんは否定し拒絶した。周りの人を傷つけられたことをどうしても許せなかった。絶望した義姉は、お坊ちゃんと心中してループし直し、彼の記憶をいじった。そして、彼がループから脱出するのを諦めるように仕向けた。義姉的には「ループしたら生き返るんだからお仕置きにちようどいい」くらいのノリだった。」

彼女はそこで言葉を切った。ものすごい形相でお坊ちゃんを睨む。絶望と憎悪と執

着がないまぜになったような顔だった。ものすごくこわい。

対するお坊ちゃんも義姉を睨んでいる。その目には燃え上がるような怒りが見えた。義姉は、そんな彼の様子に頬を膨らませる。

「もおく、違いますよ、弟くん。わたしが見たいのはそんな顔じゃないです」  
「あえ？」

思わず声もれた。お腹が熱い。立っていられなくなつて膝から崩れ落ちる。血の気が引いていく。地面に横たわる私の腹部から、どくどくと血が溢れていた義姉の能力により『お腹を切られた』という記憶を植え付けられた。記憶が肉体に反映され、出血している。このルートでは何千何万回と能力を使っているので、別ルートよりも能力が強力で精密。

「なっ!?!」

「そう! その顔!! えへへ、わたしとお揃いですね♡」

お坊ちゃんが私の傍にしゃがんだ気配がした。仰向けに寝かされ、傷口を圧迫される。鋭い痛みにうめく。

「血がとまらない……っ」

視界に広がるのは、お坊ちゃんの泣きそうな顔と暮れゆく空。指先から冷えていく体には、彼の手のひらだけが温かく感じた。

「さあ、もう一度はじめましょう！ この一週間を繰り返している間、弟くんはわたしのものなんですから!!」

義姉の恍惚とした声が聞こえた。高らかに歌い上げるような、熱に浮かされたような声だった。

——なるほど。そういうことか。

これも“訓練”のたまものか、死に瀕しているというのに頭は冷静だった。お坊ちゃんにはループものの“主人公”くん。おそらく、自分と“ヒロイン”が犯人に殺されるタイプのループもの。

こういうシナリオってルートによって犯人が違ったりするんだけど、このルートではヤンデレな義姉が犯人だったんだろう。まあ、殺されてるのは“ヒロイン”じゃなくて私だけでも。

「死なないで、死なないでくれ」

震える声とともに、ぱたぱたと温かい液体が頬に落ちてくる。顔をくしゃくしゃにして、お坊ちゃん——ループ“主人公”くんは泣いていた。

「俺のせいで、こんな……君は俺を助けてくれただけなのに……!」

せやな。ただまあ、ここでわたしが死んだとしても、ループすれば生き返る。人の生き死になんて無かったことに——

ああ、そうか。

彼は、ループ“主人公”くんだものな。ぜんぶ、覚えてるんだ。ずっとずっと、こうして傷つき続けてきたのか。この人は、そんな地獄に、ずっと独りで生きているのか。

——たった独りで足掻くことのつらさを、私は知っている。この一年間、嫌というほど味わってきた。一年だけでも、心が折れそうなほどしんどかった。

いやまあ、『地獄のようなループからの脱出』と『同人エロゲの“女主人公”対策』を同列に扱ったら怒られるかもしれないけども。

「まだ何も知らないんだ。君が誰なのかすら、知らない」

私は、ループ“主人公”くんに出会ったことうつすらと覚えている。重なりすぎてぼやけた記憶は、これまでに蓄積されたループの記憶なんだろう。自分にまったく関係ないループの記憶がある理由はサツパリ分からない。

ただ、こうやって覚えていることが、ループ“主人公”くんの助けになればいい。そう思った。

「……りんね」

——私の名前は、トモセ点瀬リリンネ音

ループ“主人公”くんが小さな声で私の名前を復唱した。

「俺は、エイゴ。花卉カ樹イエイゴ音」

氣力を振り絞って微笑み、小さく頷く。本当は自分の連絡先とかを伝えたかった。そうすれば、次のループの手助けができる。けど、そんな長い文章を話す余裕はなかった。ふと、遠くの空に黒い点が見えた。とうとう目までおかしくなったらしい。と、思っていたら、瞬きの間に空から影が降ってきた。なんとなく見覚えのあるシルエットをしている影は、軽い音とともに地面へ着地した。

「血液」の反応が消えたから、気になって来てみれば——」

周辺の空気が、重く、暗くなつたように感じた。あまりの重圧に、息が苦しくなる。

——この声、一人称『僕』おじさん？

かすむ視界の端で、一人称『僕』おじさん vs ヤンデレ義姉の戦いが勃発。怪獣大決戦みたいなのが起こり、駅ビルは爆発した。



——以上が、十数年ぶり二回目に死んだ時の記憶だ。

次に気がついた時、私は、駅ビルの地下街に防犯ブザーを構えて立っていた。さつき死んだばかりの——”前世”の記憶を引き継いで。

## 第三十八話 ループを重ねる

防犯ブザーを構えた私と、不良に囲まれたループ“主人公”くん——花卉樹エイゴく  
んは、お互いの姿を見て目が飛び出そうなほど驚いた。そのリアクションで、どちらに  
もさつきまでの記憶があることを察する。

前世の記憶を引き継ぐ、というのは、この世界に生まれた時に発現した私の異能だっ  
たようだ来世もずっと記憶を引き継ぎ続けるとなると、すごく大変そうなので、この世  
界限定の異能であることを祈っている。ループの記憶がうっすらあったのも、『時間が  
戻る』それまでの自分は死んだ』という判定だったのだろう。うっすらした記憶とはつ  
きりした記憶の違いは、自分が死んだことの自覚があるかどうか、かな？

まあ、私のことはさておき。

隙を突いて不良から逃げた私たちは、新たなループについて色々と話し合った。結  
果、私と花卉樹くんは『二人が出会った土曜日の午後から私が死ぬまで』をループして  
いることが分かった。

現在、一週間をループし続ける“一週間ループ”と土曜日の午後をループし続ける“  
土曜日ループ”、二つのループが同時に起こっていることになる。で、一週間ループが



起きる前に、土曜日ループを起こし、同じ土曜日を繰り返している感じだ。

ループについて詳しいことが分かったのは、花卉樹くんも“時間をループさせる能力”に覚醒していたから。自分で目的を設定して、土曜日ループを起こした覚えがあるらしい。

私に死んでほしくないと強く思ったなら、“時間をループさせる能力”が発動したのだという。つまり、土曜日ループの目的は、私が死なないようにすること。この目的が達成されるか、花卉樹くんが任意で解除するかで、土曜日ループから脱出できるそうなの。

「義姉さんも、俺と同じ能力を持っている。何かの目的を設定して、ループを起こしたはずだ」

花卉樹くんは断言する。

「今まで自覚が無かったんだけど、義姉さんの能力に巻き込まれるカタチで、俺の能力が発動してる彼の“時間ループさせる能力”の特異性は、複数のループを同時に発動できるところ。今回はループ中にループを起こしているが、まったく別のループを同時に起こすこともできる。そのループのどちらにも遍在できる。わりとヤバイ能力。」

その能力の性質が限りなく自分に近いのだと言う。

簡単にまとめると、一週間ループを起こしているのはヤンデレ義姉と花卉樹くんということになる。一週間ループから脱出するには、ヤンデレ義姉の目的を達成して、花卉

樹くんの能力を解除する必要があるというわけだ。

「お義姉さんが設定する目的って、花卉樹くんと両想いになること以外にない？」  
「だとしたら、俺は永遠に脱出できないかもな」

花卉樹くんは、うんざりした様子のため息をついた。

……花卉樹くんとヤンデレ義姉が両想いになることがループの目的だったなら、なぜ、花卉樹くんや彼の周りの人を殺す必要があったんだろう？ 殺す必要なくない??  
だって、目的が達成できなければループから脱出できないんだもん。自分は高みの見物としやれ込めばいい。

調べなければいけないことが次から次へと増えていく――



けど、大丈夫！ 私たちには土曜日ループがあるからね!!

土曜日ループを認識しているのは花卉樹くんと私だけだった。ヤンデレ義姉すら土曜日ループに気がついていなかったそもそも、本来はループを発動した能力者しかループを認識できない。ヤンデレ義姉が起こした一週間ループを認識していたエイゴ。一週間ループと土曜日ループを記憶している『私』。これらはイレギュラー。うん、そう

なんだ。さつき殺されてまた戻ってきた。これで死んだのは三回目だ。

つまり、この土曜日ループを活用すれば、ヤンデレ義姉に気づかれることなく情報収集ができるのだ！ しかも、花卉樹くんと接触しない限り、私はノーマーク！ やったね！！

ちなみに今回の土曜日ループではすでに目をつけられている気がするぞ！ いろいろ伏せながらだけど、めっちゃ話してるし！！

しかし、花卉樹くんは土曜日ループを使つての情報集をもものすごく嫌がった。

「(点瀬さんを死なせないために能力を使ったのに) それじゃ意味がないだろう！」  
せやな。

……花卉樹くんと関わらず、まっすぐ家に帰る。そうすれば私は死なないし、土曜日ループから脱出できる。けど——

「私は、花卉樹くんの助けになりたくって思ってる」

花卉樹くんは泣きそうな顔で歯を食いしばった。への字に曲げた唇が震えている。二回目に死ぬとき、花卉樹くんの地獄を知った。傷つき続けている彼が、救われてほしいと思った。

「だから、花卉樹くんが殺される前に、私は自分で死ぬ」

いやまあ、別の地獄に引きずり込むような誘いだけでも。

これは土曜日ループを上手く使うために、仕方のないことだ。

ヤンデレ義姉は、記憶操作の能力も持っている。詳細は分からないけれど、その能力が相手の記憶も覗けるのなら——花卉樹くんの記憶から、土曜日ループと“前世”の記憶を引き継ぐ私の存在がバレてしまう。

なので、ヤンデレ義姉が花卉樹くんに接触する前に私が死んで土曜日ループを発動させる必要がある。

「つなら、せめて俺が点瀬さんを……」

「いやいや、ただでさえ花卉樹くんは大変なのに、そんなことまでさせるわけには……」

話し合いは、どこまで行っても平行線だった。しようがないので、自分で死ぬのと花卉樹くんに殺されるの、代わりばんこにすることにした。

死ぬのが怖くないかと聞かれると、もちろん怖い。ただ、“訓練”のおかげか、苦痛や恐怖も知らんぷりできるようになってるんだよねえええっ！ 命が軽うい!!



それから、私たちは土曜日ループを使ってたくさんの情報を集めた。

情報収集に専念するために、まずはヤンデレ義姉の動向を。次に“時間をループさせ

る能力”の詳細。ヤンデレ義姉に対抗できる相手である一人称『僕』おじさんがやって来た理由。できるだけ時間を稼ぎつつ周辺に被害を出さない方法。などなど。

——そして、ヤンデレ義姉が一週間ループに設定した目的。

白と黒の美しい織目が、辺り一帯を包んでいる。断続的に聞こえる激しい戦闘音に合わせて地面が揺れる。私は、詰めていた息をホッと吐いた。

「ようやく、ここまで来たねえ」

「ああ、次で終わらせよう」

私たちは、戦闘と人目を避けて、結界の端まで走った。これからすることを誰かに邪魔されるわけにはいかない。

「今回はどっちだっけ？」

「俺の番」

すっかり慣れた手つき。何回も繰り返しているけれど、彼はいつだってツラそうな顔をしている。だから私は、彼のツラさが少しでも減るようにと、何でもないことのように微笑む。

「——またね、エイゴ」

「またな、リンネ」

## 第三十九話 無限ループからの脱出RTA

土曜日の午後、駅ビルの地下に戻った瞬間から、即座に行動を開始する。マジで時間がない。

手にしている防犯ブザーを使わずに、地下街の壁に設置してある消火器を持っていく。この際、指紋が残らないように手袋をしておくこと。まだ寒い時期で本当によかった。

黄色の安全ピンを抜き、ホースの先を不良に向ける。目でエイゴに合図し、彼が走り出したと同時に上下のレバーを力いっぱい握る。真っ白な消火薬剤が地下街の狭い通りを埋めていく。

「うおっ、なんだゲホッ！」

「ゴホッゴホッ」

不良が咳き込みはじめるくらいで消火器を元の場所へ戻す。私の周りも真っ白だ。これで、ヤンデレ義姉の目もごまかせる。

薬剤の煙を突っ切って、エイゴがこちらにやって来た。すれ違いざまに彼の手を握る。ピリツと首筋が痺れ、一瞬だけ左目の視界が赤くなった。目尻から“血液”が流れ

出た直後、至近距離で破裂。頬に“血液”が叩きつけられる。こうすると、だいたい20分後くらいに一人称『僕』おじさんが駅ビルの地下街へやって来る。

この方法だとヤンデレ義姉にも何かあったことが伝わってしまうのが難点だ。が、これ以外に方法はなかった。おじさんは携帯電話を持っていないので。

紙袋の底から厚紙を引っ張り出し、化粧ポーチからアイライナーを取り出す。駅の裏手にある再開発地区へ来てほしいと書いて、頬に残る“血液”を塗りつけた。風で飛ばないように消火器の下に挟む。これでよし。

ここは地下街なので、“血液”が消えることはない。おじさんは確実にメモを読んでくれる。日にさらされて“血液”が消えちゃうと、さすがに追跡できないと、いつかのループでご本人が言っていた。

ちなみに、エイゴは私の手を握った後、そのまま走り去っている。ヤンデレ義姉の目を引き付けつつ、準備の時間を稼いで再開発地区へ誘導する手はずだ。

さて、私もやることをやらねば。

未だにむせている不良に気づかれないよう、その場から移動する。早歩きでまっすぐ再開発地区へ向かいつつ、スマホでお孫さん師範代に電話。ちょうど今日、繁華街の見回りをしているのだ。

ヤンデレ義姉は目にハイライトがないけど、どえらい美人だ。そんな美人が繁華街を

うろつけば、ひっきりなしに声をかけられる。なお、ヤンデレ義姉に声をかけた相手は、運が悪ければ——まあ、うん。なので、師範代にそこら辺を見張ってもらう必要がある。こんなことで人死に出すなんて、もうごめんだ。

「もしもし、師範代ですか？　実は、助けてほしいことがあるんです——」

お孫さん師範代には、『ヤンデレ義姉の特徴』と『ヤバい相手でも人殺しも辞さないこと』『とても強い異能力者であること』『こちらで対応できる相手と呼ぶこと』を丁寧に伝える。細かい事情を除けば、すべてぶつちやけている。

「師範代自身も含めて、ぜったいに誰も接触しないようにしてほしいんです」

『——分かった。無理はするなよ』

「はい！　ありがとうございます!!」

どれだけ突拍子もないことを言っても、師範代はしつかり受け止めて対応してくれらる。さすが、夏休みにいろいろあった人は肝の座り方が違う。何があったかは未だに知らないけれど。

ちよつと息が上がりつつあるが、足も手も止めない。次に、TS“ヒロイン”ちゃんに電話をかける。TS“ヒロイン”ちゃんを通して、彼女の友だちである天使と悪魔へお願いし、周辺への被害を抑える手伝いをしてもらう。

何回目かのループで判明したんだけど、親友“主人公”くんにはぶら下がった“ヒ



ロイン“ちゃん二人、異世界から地球にやってきた天使と悪魔なんだそう。性転換しちゃったのも、彼女たちの起こした事故が原因だったらしい。

スピーカーモードにもらい、天使“ヒロイン“ちゃんと悪魔“ヒロイン“ちゃんに駅の裏手にある再開発地区へ協力して結界を張ってほしいと頼み込む。事情に関しては、ぜんぶ終わってから説明するでゴリ押しだ。

当たり前だけど、ものすごく警戒される。言っていないはずなのに二人の正体を知っているんだもんな。そらそうだ。

ただ、周囲の魔力天使と悪魔の異世界では、生のエネルギーが『神力』、死のエネルギーが『魔力』と呼ばれている。を探ってほしいと伝えると、おどろおどろしい魔力が駅ビルの敷地内にあることと、禍々しい魔力を纏った何かが高速で近づいていることが判明する。

うん、ヤンデレ義姉と一人称『僕』おじさんだね。

その二つが十数分後に駅ビル裏手の再開発地区で衝突するから、結界を張ってほしいのだと改めてお願いする。いちばん初めの時、駅ビルが爆発したのは二人が衝突した余波のせいだ。

結界を張る必要性は十分に伝わった。ただ、天使“ヒロイン“ちゃんと悪魔“ヒロイン“ちゃんの二人はものすごく仲が悪いので、協力して結界を張ることを渋る。

でも、片方だけじゃ強度が足りない。天使と悪魔、相反する二人が協力して、ようやく怪獣大決戦の余波から駅ビルを守れる。それは、今までのループで分かっている。

『僕からもお願い。きつと、よっぼどのことなんだと思うんだ』

TS「ヒロイン」ちゃんがそう言うのと、親友「主人公」くんも『手伝ってやれよ』と後押ししてくれた。よし、この二人が動いてくれたなら――

『しようがねえなあ……』

『致し方ありませんわね……』

天使「ヒロイン」ちゃんと悪魔「ヒロイン」ちゃんは、渋々といった感じで承諾してくれる。

「ありがとう！ 本当にありがとう!!」

境界を張るタイムミングでまた電話すると伝え、通話を切る。

――これで時間稼ぎの準備は整った。

スマホをしまうと、全力で駆けだす。私がいちばん初めに再開発地区へ着いてないと、あとあと面倒なのだ。



まだ冬だというのに、汗だくになって息を切らしている。ようやく、駅の裏手にある再開発地区へ到着した。人目を避けながら防音シートを潜り抜け、こそこそと侵入する。

ここは、貨物駅の移転やらなんやかんやで広大な更地になっている。重機や機材やプレハブ小屋なんかがあるけれど、この時間ならば誰もいないことは確認済みだ。結界を張った時に巻き込まれて閉じ込められる人は出ない。

プレハブ小屋か……いや、うん、そうな。そうなるな。

頭によぎったあれこれを首を振って遠ざける。それは後で考えればいいことだ。

そうこうしているうちに、目の前に真っ黒い影が降ってきた。軽い音とともに地面へ着地する。

「お、いたいた」

一人称『僕』おじさんは、ひらひらと手を振りながら私の方へ近づいてきた。ちらりと腕時計を確認する。よし、時間はある。

「『血液』が相討ちになったみたいだけど、何があつたんだい？」

「実は——」

なるべく早く再開発地区へ到着したかった理由はこれ。おじさんに事情説明をする時間を確保するためだ。特に、結界のことをちゃんと伝えておかないと、おじさんは

ウツカリ破いてしまう。

そう、一人称『僕』おじさん、ちよつと規格外なくらい強いんだよね。

今までは勝敗が決するよりも前に土曜日ループを発動していたから、どっちが勝ったのかは分かっている。けど、おじさんはヤンデレ義姉に勝てる。そう確信できるくらい強い。ただ、余波で駅ビルが爆発するけども。

「なるほど」時間をループさせる能力”ねえ……」

おじさんは、ポリポリと顎をかく。

「一人殺したら犯罪者、数千殺したら英雄って言うけどさ。同じ人間を何千回何万回と殺したら、どうなるんだろうなあ」

何回も聞いたつぶやき。初めは答えが分からなかったけれど、今なら分かる。

「――心が壊れます」

ヤンデレ義姉は、壊れている。一週間ループで叶えなかった願いは歪み果てて、エイゴを殺し続けることが目的になっている。

だからこそ、ヤンデレ義姉が一週間ループに設定した目的を探るのが大変だった。

遠くに、エイゴの姿が見えた。姿は見えないが、ヤンデレ義姉も必ずいる。まずは、お孫さん師範代に電話、再開発地区で激しい戦闘が起きるので離れてほしいと伝える。次に、TS“ヒロイン”ちゃんに電話。しばらくすると、白と黒の美しい織目が、再開発

地区を包み込む。

大きく伸びをしながら、一人称『僕』おじさんが振り返った。

「それで、合図があるまでこの結界の中で戦ってればいいんだな？」

「はい、よろしく願います」

今までは、戦闘の前にヤンデレ義姉から手を変え品を変え話を聞きだしたりしていたけれど、それはもう必要ない。聞くべきことは、すべて聞いた。

「よし、任された。ちょうど運動したかったんだよねえ」

うーん、頼もしいことこのうえない。



私とエイゴは、とある目的のために、敷地内のプレハブ小屋へ移動した。薄い壁の向こうから、激しい戦闘音が聞こえ、小屋全体がぐらぐらと揺れている。天井から、パラリとホコリが落ちてきた。

さて、何度も何度も繰り返すけれども、ここは男性向けエロゲみたいなきることが起きる世界だ。

あー、えー、何が言いたいかと言うとですね、ヤンデレ義姉が一週間ループに設定し

た目的が『エイゴが両想いの相手とセックスすること』だったんだよねえええええ!!!  
 バツツツカじゃないの?!?!?

なぜ、『エイゴと自分が両想いになること』が目的じゃないかというのと、ヤンデレ義姉やエイゴの“時間をループさせる能力”は設定する目的に自分を含めることができないからだ。それをすると、自分でループを観測できなくなつて危ないんだという。

これは、何回目かのループでエイゴのお義父さんから聞いた。“時間をループさせる能力”つて花卉樹家の家系に伝わる能力なんだつて。実は、エイゴと彼のお母さんは花卉樹家の遠縁なんだそう。だから、お義父さんはエイゴのお母さんと再婚したらしい。

もつと細々した話も聞いたけど、まあ、今は関係ない話だ。

———だけ記憶を改竄しても、感情を変えることができなかつた。

それが、ヤンデレ義姉が発動した一週間ループの結末だ。

部屋の隅に積んであつた防音シートの上に、エイゴが脱いだ上着を広げる。ぐらぐらと小屋が揺れている。視界もゆらゆらと揺れて、心臓が破裂しそうなほどドキドキしていた。

———両想いの相手に指定はない。

“ヒロイン”じゃない私が相手でもいいのだろうか。一週間ループを起こして月曜日

に戻って、ちゃんとした“ヒロイン”を攻略してもらった方がいいんじゃないか。でも、ヤンデレ義姉を抑えつつセックスに持ち込めるのは今しかない。それに、私じゃない誰かと両想いになったエイゴを見るのは、すごくすごく嫌だ。

ただ、ループが解除できなかつたら——両想いじゃなかつたらどうしよう。考えてもどうしようもないことが、ぐるぐると頭をめぐる。

「ほ、んん、っ」

いま、めつちや声が裏返ってたな。エイゴも緊張してるんだなということが分かって、少し肩の力が抜ける。

「本当は、その、ぜんぶが終わったら伝えるつもりだったんだけど——」

エイゴは、一呼吸置くと私の目をしっかりと見据えた。彼の頬が赤くなっている。

「俺はリンネのことが好きだ」

頭が真っ白になる。それまでうだうだと悩んでいたことが吹き飛んで、残った言葉がするりと唇から出ていった。

「——私も、エイゴのことが好き」



え〜その〜、はい。一週間ループは解除されました。

痛くなかったし、なんなら気持ちよかった。さすが男性向けエロゲみたいなことが起る世界。などと考えながら、いそいそと身だしなみを整える。ふと、戦闘音が止んでいることに気がついた。

慌てて外に出ると、泣き崩れるヤンデレ義姉と頭をかいて途方に暮れている一人称『僕』おじさんがいた。話を聞くと、少し前に「どうして!？」と叫び声をあげた後、呆然と立ち尽くし、最終的にわあわあ泣き出したらしい。

泣き声からこぼれるうわごとを拾い上げる。どうやら、一週間ループが解除されたことを察知し、自らが設定した目的——『エイゴが両想いの相手とセックスすること』を思い出したようだ。

目的が達成されてループが解除されたということとは——

「俺は、義姉さんのものじゃない。義姉さんの想いに答えるつもりもない」

エイゴはそうハッキリと言葉にした。

「……どうして? どうして、そんな酷いことを言うんですか?」

「何度も、何度も何度も! 俺の周りの人を傷つけた!! 俺は、義姉さんの行いを許せません」

エイゴの手は、怒りを閉じ込めるように固く握られている。かすかに震えるその拳



に、そつと自分の手を添えた。

ヤンデレ義姉は、心の底から不思議そうに首を傾げた。

「なぜ、怒っているんです？——時間が戻ったら、ぜんぶ元に戻るじゃないですか」

ああ、これは、マジでダメなやつだ。ヤンデレ義姉とエイゴでは、価値観があまりにも違い過ぎる。

ヤンデレ義姉の考え方が間違っているとは言えない。彼女の能力を十全に使いこなすにあたって、割り切った考えは必要だ。ただ、割り切れなくて傷つき続けてきたエイゴとは、相性が恐ろしく悪い。

愕然としているエイゴに、一人称『僕』おじさんが声をかけた。

「それで、どうする？ 自分で殺る？ 僕が殺る？」

わあ、殺すしか選択肢がない！

「——さすがに殺人を見過ごすことにはできない」

待ったをかけたのは、お孫さん師範代だった。様子を見に来てくれたんだらうか。

師範代は、懐から手帳を取り出し、中を開いて見せながら「警察だ」と名乗った。けい、さつ……警察!? えっ、お孫さん師範代、教師、うえええっ、警察の方が本職!?!?

——ヤンデレ義姉は器物損壊の現行犯として逮捕された一人称『僕』おじさんはいつの間にかいなくなっていたので、彼が壊した分もヤンデレ義姉が壊したことになった。

ただ、すべてが元に戻った今、彼女が起こした数々の犯罪は無限ループの彼方。ヤンデレ義姉がそれ以上の罪に問われることはなかった。

けれど、たがが外れたヤバい異能力者であることは証明されたらしい。

異能力を制限する処置を施された後、危険な異能力者を指導する学園へ転校していった。その学園、孤島の監獄みたいなところなんだって。

うん、どう考えてもエロゲの舞台だね。

きつと、その学園でも男性向けエロゲみたいなことが起きると思うので、素敵な“主人公”を捕まえてマトモになってください。お互いの今後のためにも。

『エピローグ エロゲの世界はヒロインに厳しい』に続く

## エロゲの世界はヒロインに厳しい

——そして、また春がやってきた。

両親はそれぞれ海外出張へ。私は一軒家で一人暮らし。慣れるまで、家事をこなすのは骨が折れそうだ……と、思っていたのだけでも。ちらりと時計を見上げる。そろそろ時間だ。

今回こそ、ちゃんとしよう。

決意を胸に抱きつつソファから立ち上がると、ちょうどチャイムが鳴った。ドアを開いて客人を出迎える。いつも通り、私服姿のエイゴが立っていた。エイゴの姿を見るだけで、なんだか気持ちが悪くなって、笑顔になる。

「久しぶりだな」

「うん、一ヶ月ぶり！」

軽く挨拶を交わした後、おそろおそろ彼の背後を覗き込む。少し離れたところに、メイドさんがずらりと並んでいた。

彼女たちは、私に向かって深々と頭を下げる。その一糸乱れぬ様子に、思わずビクツと体が跳ねた、何回見ても慣れない光景だ。

「奥様、本日もよろしくお願いいいたします」

「あ、はい……よろしく……」

すんでのところで、「お願いします」を飲み込む。敬語は無しでとお願いされてたんだった。

彼女たちは、メイドだけどメイドじゃない。サークル活動としてメイドをしているメイドサークルの面々だ。上流階級しか通えない全寮制の学園で、メイドになりきることを生き甲斐にしているお嬢さまたちなんだって。そういう愉快な女の子、大好き。

いろいろあって、エイゴはメイドサークルのご主人様役をやっているそう。わーい、それなんてエロゲ。

おそらく、メイドサークルの面々は“ヒロイン”で、私は恋のライバルとして立ちはかかるのだ！——と、意気込んでいた。

しかし、エイゴに恋人ができたと知ったメイドサークルの面々は「奥様！奥様だわ！」と万歳三唱の大喜び。「ぜひ奥様にお目通りを！」と鼻息荒く盛り上がり、月に一回、メイドサークルの学外活動として我が家をお掃除しにきてくれる運びとなった。

そんな申請、よく通ったなあ許可がもらえるまで粘っただけだと言っていたので、まあ、”時間をループさせる能力”を使っただらう。

ご近所さんには、月に一回ハウスキーパーを手配しているとごまかしている。みんな

「やっぱり娘さんの一人暮らしは心配なのねえ」と納得してくるから助かる。両親の海外出張がこんなところで役に立つとは思わなかった。

家を掃除してもらってる間、私とエイゴにできることはない……というか、何かすると怒られる。なので、この時間でデートをするのがお決まりになっていた。

「いつてらっしやいませ」

お見送りのために整理するメイドさんたち。何回見ても迫力があつてビビる。

「う、うん、いつてきます」

「後は頼んだ」



デートから帰ってくるころにはすっかり掃除が済んでいる。ピカピカになった我が家に、メイド長さんだけが残って給仕をしてくれた。ソファでくつろぎながら、用意してくれたお茶とおやつに舌鼓を打つ。いつもながら、めっちゃめっちゃ美味しい。

「では、わたくしたちは“次の間”に控えておりますので、ご用の際は何なりとお申し付けくださいませ」

“次の間”とは、うちの近所にある一軒家だ。メイドサークルで使うためにサークル

活動費で買ったらしい。まったくもって意味が分からないけど、そう言つてた。おかねもち、すごい。

メイド長さんは後片付けを済ませると部屋を後にした。いま、この家にいるのは私とエイゴだけ。つまり、まあ、そういうこと。ちゃんとね、お膳立てをね、してくれるんですよ。メイドさんたち。

「——リンネ」

エイゴの手のひらがゆっくりと太ももを這う。くすぐつたいような気持ちいいような、ゾワゾワする感覚。

だがしかし！

今日はこのまま流されるわけにはいかなないのである!!

ガシツとエイゴの手を握って待ったをかける。エイゴはきよんとしている。かわいいかよ。このまま流されてもいつかなあと思う自分を叱りつけ、心を鬼にする。

「ちよつとお話があります」

「なんででしょう」

「ここで居住まいを正して話を聞いてくれるエイゴ、めちやくちや好き。」

「——エイゴさん、体がもたないので私以外にも彼女を増やしてください！」

「え、やだ」

「そこをなんとか……！」

間髪入れず断るエイゴにすがりつく。

初めての時は大丈夫だった。お互いに初体験だったし、それどころじゃなかったし。まあ気持ちよかったなあで終わった。あのね、回を重ねるごとにね、えげつなくなってるんですよ。“訓練”を貫通させてイキ狂わされるんですよ。

——やっぱり、男性向けエロゲみたいなことが起きる世界の“人間”は、前世の“人間”とカテゴリーが根本的に違う気がする。

前世において、エロゲのセックスはファンタジーだった。

汁だくぶつかかけも、時間を置かずに連続射精も、生理学的に難しい日本人男性が一度に射精する精液の量は平均で3.1ml——小さじの半分よりちよつと多いくらい。量では汁だくぶつかかけにならない。体内で精子および精漿が作られ続けているとはいえ、インターバルなしでの連続射精も難しい。でも、精液の量やセックスの回数は多い方がエッチでいいよね！ と、前世の私はのんきに思っていた。

ここは男性向けエロゲみたいなことが起きる世界。

前世ではファンタジーだったエロゲのセックスが、今世では現実になっているのだ!! ファンタジーが現実になるなんて、異世界転生の醍醐味だよね！ やったー!! やったーではないが??

たぶん、出生率の低さをカバーするためにこういう進化を遂げてきたんだろうなつてのは分かる。分かるんだけども。——体が!! もたない!!!

「体がもたないのは分かった。でも、リンネ以外とセックスする気はない」

「うぐぐぐ……」

「でも、リンネに無理をさせるのは、俺もしたくない。だから……」

——いろいろと試してみようか。

翌日ベッドから起き上がれないよりはマシだと思い、エイゴの提案に頷いた。以後、それはもう、いろいろと試すことになった。それはいい。

「でも! 後片付けは! 自分でするから!! 勘弁してください!!!」

「ご主人様と奥様の身の回りのお世話は、メイドの仕事ですから♡」

「ちよつ、待つ」

むなしい叫びがメイドさんたちにもみくちやにされて消えていく。こんな風に、  
主人公ヒロイオン  
エイゴのカノジョとしてドタバタな毎日を過ごすのだろう。



余談だけでも、進学を機に同棲することになり、月に一回ではなく毎日セックスする



ようになつたら体が慣れた。  
今世の私の体、しっかりこの<sup>エ</sup>世界<sup>ロ</sup>仕<sup>ゲ</sup>様だつた。

## 番外編 名前の由来 &amp; あとがき

◆【僕おじルート】名前つけルール：天体（基本的に中国系）

変身ヒロイン〃女主人公〃 シオン<sup>星音</sup>

流れ星が落ちる時、音が聞こえることがあるので。おじさんと同じような存在になるので流れ星で揃えた。

一人称『僕』おじさん ナガレ<sup>永</sup>とテンコウ<sup>天?</sup>（血液）

流れ星から。テンコウ（天狗）は中国の古代思想で音を伴う流星のこと。？は中国に伝わる妖怪で、僵尸から魃になった妖怪が、さらに変じたら？になるとも言われている。

おじさんの推し〃主人公〃 タイチ<sup>泰一</sup>

中国の古代思想で宇宙の根源を指す。

おじさんの推し〃ヒロイン〃 ユウ<sup>夕星</sup>

西の空に見える金星。宵の明星。ヒロインの名前は中国の五行思想から決めた。

◆【取巻きルート】名前つけルール：花言葉十色

変身ヒロイン〃女主人公〃 リコ<sup>璃子</sup>

彼岸花の別名、リコリスから。色の指定は無し。「転生」「再会」「また会う日を楽しみに」「悲しい思い出」「思うはあなた一人」などなど。死を連想するような花言葉も多い。また別名が多いのも特徴。

取り巻きハーレム先輩 オオダマキ 御々田蒔 明 アカヤ 歳

オダマキの花は、相反する意味の花言葉を抱えている。「愛する」「愚か」「信仰」「勝利」などなど。赤いオダマキは「捨てられた恋人」のシンボルになっっているらしく「心配して震えている」という意味が。情報源が分からなかったため、英語圏の記事を洗ってみると、ビクトリア朝ではそういう扱いだったらしいことが分かった。

“主人公” くん先輩 ツワブキ 石路 拓 タクゴ 吾

ツワブキの花言葉は、「謙譲」「愛よ蘇れ」「先を見通す能力」「困難に負けない」など。タクゴは生薬としてのツワブキの別名。

お嬢様 “ヒロイン” ちゃん先輩 ソウビガサキ 薔薇ケ咲 紅恋花 クレハ

一本の赤い薔薇。薔薇は本数別にも花言葉がある。一本の薔薇は「一目惚れ」「私にはあなたしかいない」。赤い薔薇は「あなたを愛しています」「愛情」「美」「情熱」「恋」「熱烈な恋」などなど。赤色の中にも分類があり、特に紅色は「恋焦がれています」という花言葉になる。

◆ おじいちゃん師範の名字 名前つけルール：石言葉  
ひなが  
日永

サンストーン（日長石）から。石言葉は「あらゆる勝利をもたらす」「きらめき」「恋のチャンス」「隠された力」などなど。往時は「主人公」としてブイブイ言わせていた。

◆ 【師範代ルート】名前つけルール：天候&時間

サブルール：夜⇨死んでる 朝⇨死んだことがある 昼⇨生きてる 夕⇨死ぬかもしれない

（ヒロインズの天候は昼に分類している）

（ルートによっては、朝や昼でも死ぬことがあるし、夕でも生き残ることがある）

変身ヒロイン〃女主人公〃 未明ミア 朝

お孫さん師範代 日永 ヒナガ ユウケイ タ 夕

眼鏡〃主人公〃 シノノメくん 東雲 トウウン アキラ アキラ 朝

中二病ロリ〃ヒロイン〃 てるしまちゃん 照島 テロシマ ハルコ ハルコ 昼

無口クール系〃ヒロイン〃 ツユリちゃん 栗花落 トリス ウルウ ウルウ 昼

おっとり不思議系〃ヒロイン〃 アズミちゃん 安曇 アズミ ヒツジ 昼

短い髪の女／キレイ系お姉さん ムラサキ村崎 アカネアカネ 夕

少女の声 ムラサキ 村崎 藍 アイ 夜  
 長い髪の女 真夜 マヤ 夜

## ◆ 「TSルート」名前つけルール：キャラ属性

変身ヒロイン〃女主人公〃 百合香 ユリカ

百合……か……？

TS予定イケメン／TS〃ヒロイン〃 ちゃん トナリ 戸成 終 シユウ 友

お隣さんかつ雌雄が逆転するので。

親友〃主人公〃くん まきこま 巻駒 結 ヒロ 大

巻き込まれ主人公なので。ちなみに、父は勇いさむで母は茉緒まお。勇者と魔王から。

天使〃ヒロイン〃 アンジェ

異世界の天使なので。フランス語の天使から。

悪魔〃ヒロイン〃 イヴイル

異世界の悪魔なので。英語の悪から。

妹〃ヒロイン〃 トナリ 戸成 未桜 ミオ

お隣さんかつ妹なので。妹の字を分解して名前に入れてある。

◆「ベティルート」名前つけルール：エンディング由来

変身ヒロイン〃女主人公〃ユイ唯一

誰の助けも借りず自力で頑張った。

エリザベティナ・クロモドリス（ベティ）

エリザベスウミウシの学名から。

◆「逆ハーレムルート」名前つけルール：エンディング由来

変身ヒロイン〃女主人公〃タチ多智乃

（主に同性愛において）攻める側のことを指す。タチ。対義語はネコ。タチとネコ、両

方をこなす場合はリバと呼ぶ。

◆「ヒロイン〃ルート」名前つけルール：四字熟語

前世の記憶持ち〃ヒロイン〃点瀬トモセリンネ音

輪廻転生。名は体を表す。

ループ〃主人公〃くんカイキ花卉樹エイト永悟

永劫回帰。無限ループを受け入れかけていたのでこの名前になった。何千回何万回とループを繰り返しても正気を保っている時点で、つよつよメンタルである。

ヤンデレ義姉 烏屋根ウヤトネ 乃愛ノア

屋烏之愛。偏愛、溺愛、盲愛の意味。坊主憎けりや袈裟まで憎いの逆。その人を愛するあまり、その人に関わる全てが愛しくてたまらない。それこそ、その人の家の屋根に止まっている烏まで愛しく思える。本編では、可愛さ余って憎さ百倍なことになっている。

◆ あとがき

約二ヶ月の間、お付き合いいただきありがとうございました。最後まで書ききることができてよかったなあとしみじみ思っています。個別ルートはプロットになりましたが。

作者は、エロゲのエロいことをするために設定された世界観が大好きです。その世界観を膨らませたらとても楽しかったので、本作を書きました。読んだ方にも楽しんでいただけたのなら、作者もうれしく思います。

最後の仕上げとして、本作の（ただでさえ少ない）エロ部分を修正し、R15版としてなろうに掲載——『移植』します。

PCエロゲが家庭用ゲーム機に移植される際は、イベントグラフィックや攻略キャラ、ドラマCDなどの特典が追加されますが、本作ではしません。『移植』の際に見つ

かった誤字が修正されるくらいです。

エロゲをモチーフとする作品として、どうしても『移植』をネタに盛り込みたかったです。けど難しかったので、本作自体をなろう『移植』にすることでネタにします。これで、やりたかったことが全部できます。

なろうの方で本作を見かけましたら、「ああ、『移植』したんだなあ」と思ってくださいませ。よろしくお願いいたします。